

第15回キャリア教育
優良教育委員会、学校及びPTA団体等
文部科学大臣表彰

文 部 科 学 省

第15回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等の取組内容（推薦理由）

目次

<北海道>		東京都立第一商業高等学校	22
北海道釧路湖陵高等学校（定時制課程）	1	お茶の水女子大学附属高等学校	23
<青森県>		瀧野川女子学園中学高等学校	25
板柳町教育委員会	1	<神奈川県>	
青森県立弘前第一養護学校	2	神奈川県立相模田名高等学校	26
青森県立木造高等学校	3	<新潟県>	
青森県立三戸高等学校	4	小千谷市教育委員会	27
<岩手県>		長岡市立関原中学校	27
岩手県立高田高等学校	6	新潟県立柏崎翔洋中等教育学校	28
岩手県立一関工業高等学校	6	<富山県>	
<宮城県>		滑川市立北加積小学校	29
色麻町教育委員会	7	砺波市立庄川中学校	30
宮城県加美農業高等学校	7	富山県立桜井高等学校	30
<秋田県>		<石川県>	
北秋田市教育委員会	8	石川県高等学校定時制通信制教育振興会	31
羽後町立羽後中学校	9	<福井県>	
<山形県>		鯖江市教育委員会	31
酒田市教育委員会	9	福井県立若狭高等学校	32
村山市立楯岡中学校	10	福井県立丸岡高等学校	32
<福島県>		<山梨県>	
石川町教育委員会	10	山梨県立北杜高等学校	33
棚倉町立棚倉小学校	11	富士川町立増穂中学校PTA	33
檜葉町立檜葉中学校	11	<長野県>	
天栄村立湯本中学校	12	長野県須坂創成高等学校	34
<茨城県>		塩尻市立桔梗小学校コミュニティ・スクール	34
神栖市教育委員会	13	<岐阜県>	
笠間市立岩間第三小学校	14	揖斐川町立谷汲中学校	36
学校法人霞ヶ浦学園 つくば国際大学高等学校	15	郡上市立郡上東中学校	36
筑西市立下館小学校PTA	15	大垣市PTA連合会	37
<群馬県>		<静岡県>	
長野原町立西中学校	16	牧之原市教育委員会	37
太田市立太田中学校	16	<愛知県>	
群馬県立富岡高等学校	17	東海市教育委員会	38
<埼玉県>		蒲郡市立三谷小学校	38
蓮田市立蓮田南小学校	17	犬山市立東部中学校	39
<千葉県>		<三重県>	
勝浦市立勝浦中学校	18	亀山市立白川小学校	39
木更津市立岩根中学校	19	四日市市立橋北中学校	40
千葉県立長狭高等学校	19	三重県立水産高等学校	41
<東京都>		<滋賀県>	
世田谷区教育委員会	20	甲賀市立朝宮小学校	42
青梅市立霞台小学校	21	滋賀県立瀬田工業高等学校	43
三鷹市立第四中学校	22		

<京都府>	長崎県立島原翔南高等学校 …………… 6 7
京都府立桂高等学校 …………… 4 4	田平南小緑の少年団 …………… 6 8
<大阪府>	<熊本県>
摂津市教育委員会 …………… 4 5	津奈木町立津奈木小学校 …………… 6 8
<兵庫県>	御船町立御船中学校 …………… 6 9
兵庫県立農業高等学校（定時制課程） …………… 4 6	熊本県立熊本西高等学校 …………… 6 9
兵庫県立阪神特別支援学校 …………… 4 7	<宮崎県>
<島根県>	えびの市立飯野中学校 …………… 7 0
島根県立浜田高等学校 …………… 4 8	国富町立木脇中学校 …………… 7 1
島根県立吉賀高等学校 …………… 4 8	椎葉村立椎葉中学校 …………… 7 1
<岡山県>	<鹿児島県>
早島町立早島中学校 …………… 4 9	日置市立飯牟礼小学校 …………… 7 2
岡山県立津山東高等学校 …………… 4 9	志布志市立宇都中学校 …………… 7 3
岡山県立倉敷まきび支援学校 …………… 5 0	鹿児島県立与論高等学校 …………… 7 3
<広島県>	<沖縄県>
三原市立大和中学校 …………… 5 1	沖縄県立八重山高等学校尚志会 …………… 7 4
広島県立宮島工業高等学校 …………… 5 1	<仙台市>
広島県立広島北特別支援学校 …………… 5 2	仙台市立仙台商業高等学校 …………… 7 4
<山口県>	<さいたま市>
岩国市立由宇中学校 …………… 5 3	さいたま市立大原中学校 …………… 7 5
宇部フロンティア大学付属香川高等学校 …………… 5 4	<川崎市>
山口県立徳山総合支援学校 P T A …………… 5 5	川崎市立東小倉小学校 …………… 7 6
<徳島県>	川崎市立久本小学校 …………… 7 6
勝浦町立横瀬小学校 …………… 5 6	<浜松市>
松茂町立松茂中学校 …………… 5 7	浜松市立細江中学校 …………… 7 7
鳴門教育大学附属中学校 …………… 5 8	<京都市>
<香川県>	京都市立西京高等学校（定時制課程） …………… 7 7
観音寺市立豊浜中学校 …………… 5 9	京都市立伏見工業高等学校（定時制課程） …………… 7 8
<愛媛県>	<神戸市>
四国中央市立三島東中学校 …………… 5 9	神戸市立神港橘高等学校 …………… 7 8
愛媛県立長浜高等学校 …………… 6 0	
愛媛県立今治特別支援学校 …………… 6 0	
<高知県>	
香美市教育委員会 …………… 6 1	
高知県立室戸高等学校 …………… 6 1	
<福岡県>	
吉富町立吉富小学校 …………… 6 2	
吉富町外一市中学校組合立吉富中学校 …………… 6 3	
福岡県立朝倉東高等学校 …………… 6 4	
久留米市立南筑高等学校 P T A …………… 6 4	
<佐賀県>	
鹿島市立西部中学校 …………… 6 5	
<長崎県>	
雲仙市立小浜中学校 …………… 6 6	
長崎県立清峰高等学校 …………… 6 6	

＜北海道＞（種別：学校）北海道釧路湖陵高等学校（定時制課程）

推薦理由

北海道釧路湖陵高等学校定時制課程は、平成29年度入学生からキャリア教育の全体目標を「社会的・職業的自立に向け、①相互理解のコミュニケーションを図り協働できる生徒」「②主体的に課題を解決し自己成長のために学び続ける生徒」「③自己実現のために粘り強く取り組むことができる生徒を育成する」とし、4年間を見通したキャリア教育プログラムを実践しながら、組織的・系統的なキャリア教育に取り組んでいる。

こうした中、令和3年度には北海道教育委員会の「北海道高等学校定時制・通信制パワーアップ事業」の指定を受け、4年間を見通したキャリア教育全体計画を作成するとともに、外部機関と連携を深めながら、生徒の実態を踏まえた個に応じた指導方法の工夫と改善に取り組むなど、これまでの取組を総括した。本事業において、生徒を対象に実施したアンケート調査からは、生徒の「進路に対する意識」「自己理解・自己管理能力」の向上、進路決定率の上昇等が成果として確認できたことから、事業終了後についても、引き続き、生徒の望ましいキャリア発達を目指し教育活動の改善・充実に取り組んでいる。

＜具体的な取組内容＞

- 4年間を見通したキャリア教育の全体計画の作成
 - 生徒に身に付けさせたい力（基礎的・汎用的能力）を「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」とし、キャリア教育の全体計画と各学年の実施計画を作成
- 外部機関との連携
 - 企業訪問の実施（企業への訪問と報告の発表会）
 - 大学訪問の実施（釧路公立大学への訪問と報告の発表会）
 - 分野別学習会の実施（上級学校やさまざまな業種から講師を招聘）
 - ハローワークとの連携や釧路教育局キャリアプランニングスーパーバイザーの活用
- 生徒の実態を踏まえた個に応じた指導方法の改善・充実
 - 進路学習アンケートの実施
 - キャリア教育アンケートの実施
 - 「湖定キャリア・パスポート」の作成・活用

＜添付資料＞

- 「4年間を見通したキャリア教育プログラムの実践」（実践報告）令和4年3月
- 「湖定キャリア・パスポート」

＜青森県＞（種別：教育委員会）板柳町教育委員会

推薦理由

1 推薦教育委員会概要

板柳町教育委員会では、学校教育指導と社会教育行政の方針と重点に、キャリア教育の充実を位置付け、教育委員会と小・中学校が連携を図りながら、キャリア教育の推進に取り組んでいる。令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、管内中学校において職場体験が中止となり、計画しているキャリア教育が実施できない状態となったが、当該教育委員会生涯学習課が学校教育の事業として、町内の小中学校のキャリア教育をバックアップすることとした。令和3年度からは、青森県学校教育支援プラットフォーム西北地区実行委員会（県から委託を受け、学校のキャリア教育をコーディネートする団体）と一緒に本事業を開催し、今年度に至る。

この取組の1つとして、職業に関する関心を高め、将来の自分の生き方を前向きに考える心を育むとともに、板柳町を愛する心情を育てることをねらいとして、板柳町キャリア教育事業を実施している。コロナウイルス感染症感染拡大防止対策として、職場体験等が実施できない状況が続く学校において、先輩や大人から進学や職業について話を伺うなどの職業講話を教育委員会が主催することで、自分の生き方や将来について考える貴重な機会を生み出している。当該教育委員会では、コロナ禍において学校の教育活動が制限される中、学校を支え、積極的にキャリア教育の推進に取り組んでいることから、キャリア教育優良教育委員会として推薦するものである。

2 主な取組について

＜板柳町キャリア教育事業の具体的な取組＞

(1) 小学校6年生1回目（令和4年7月5日実施）

町内全小学校の6年生（78名）を対象に、板柳町内及び近隣市町の職業人を講師として、自分が選んだ職業の楽しさや選択してよかったことについて講話とパネルディスカッションを実施。

(2) 中学校1回目（令和4年7月7日実施）

町内の中学1年生（92名）を対象に、町内の中学校を卒業した4名の高校生を講師として、現在の高等学校を選んだ理由、将来の夢、夢に向かって頑張っていることなどの講話とパネルディスカッションを実施。

(3) 小学校6年生2回目（令和4年9月2日実施）

第1回目と違う板柳町内及び近隣市町の職業人を講師として、講話とパネルディスカッションを実施。

(4) 中学校2回目（令和4年9月16日実施）

町内の中学1・2年生（200名）を対象に、アナウンサーや検事、新聞記者など普段直接話をする機のない職業人を講師として、仕事のやりがいなどについての講話とパネルディスカッションを実施。

3 まとめ

板柳町では、人口減少と若者の街離れが課題となっている。当該教育委員会は、板柳町をよりよくするために働く人たちとの交流を通して、キャリア教育としてのねらいと郷土愛を育てることを目的に、板柳町キャリア教育事業を実施している。特に郷土に残り、郷土の活性化のため、そして、郷土を離れても郷土の良さを忘れない郷土愛を育むことに重点を置いている。また、コロナ禍において、職場体験等のキャリア教育が学校単位で実施しにくい状況の中で、教育委員会が中心となり、校種を越えて職業講話を実施するなど、児童生徒に学びの場を提供している。

＜青森県＞（種別：学校）青森県立弘前第一養護学校

推薦理由

1 推薦校概要

弘前第一養護学校は、小学部、中学部、高等部からなる知的障害特別支援学校で、岩木山東山麓一合目に位置し、広大なりんご園に囲まれ、自然豊かな環境にある。この環境を利用し、より地域に根差し、地域を愛する心の育成を目指し、平成20年度に「りんごと岩木山に関する学習プロジェクト」を立ち上げ、青森県教育委員会からの事業協力を得て、近隣のりんご農家等、地域人材や学校との交流を図りながらプロジェクトを開始した。

その後、高等部校舎を市街地の旧県立岩木高等学校に分離・移転したことや、これまでの交流校の閉校、りんご農家の高齢化等、地域状況の変化に伴い、本プロジェクトも見直しが必要となった。そこで、新たな農家との繋がりや各学部のニーズに応じた地域との関わりを再検討したりした結果、新たな地域人材の協力やこれまで交流のなかった学校との交流学习、各学部間が連携し先輩の働く姿を見たり体験したりする機会を設定するなど、地域社会に溶け込んでたくましく生きることを目指した「地域とつながろうキャリアUPプロジェクト」に取り組んでいる。

2 主な取組について

(1) 「りんごの学習」

近隣のりんご畑からりんごの木を借用し、農業を営む保護者を講師として、小・中学部全員が「摘果」、「葉とり」、「収穫」といったりんご栽培の一部を体験した。また、中学部では、外部講師を招いてりんご染めを体験した。知的障害があり、学習や活動への困難さがある児童生徒に対し、事前に講師と教員が連携して児童生徒が取り組みやすいよう学習用の視聴覚教材を準備したり、作業が理解しやすいように補助具を準備したりするなど、指導内容や指導方法を工夫した。高等部では、地域の高校生（県立弘前実業高等学校）とりんごを使った調理活動と一緒にいき、学び合うなかで障害の有無を意識しない同年齢同士の交流活動ができた。

(2) 「地域人を活用した授業」

中学部、高等部の教育課程における「作業学習」の中で外部講師を招き授業を実施した。中学部では4つ、高等部では5つの作業班において外部講師と連携しながら授業を行った。高等部農工班は西洋野菜のルバーブの収穫やみそ玉作りを行い、中学部木工班では、市内の高校生（県立弘前工業高等学校）を講師として招き、直接的な関わり合いを通して、協働しながら木工製品の作成技術を学ぶことで、作業効率や製品の質を向上させること

ができた。

(3) 「夢や志実現のための学習」

小・中学部が「先輩が働く様子を見学しよう」と題し、高等部見学を実施した。小・中学部の児童生徒が高等部生徒の作業学習を体験したり、高等部生徒を講師として、清掃や接客の仕方を学ぶ出前授業を行ったりした。児童生徒が高等部の先輩の「働く」という漠然としたイメージから、実際に働きぶりを見ることで、高等部での活動を理解し、「〇〇先輩のようにになりたい」と具体的な目標をもつことができる大事な機会となっている。また、高等部の生徒は身近な憧れの存在であり、将来のイメージに繋がりがやすく、将来のことに関心をもつよい機会ともなっている。

高等部が地域貢献も含めて市役所や市民会館等公共施設における清掃活動に取り組んだ。その後、本校生徒の理解が進み、現場実習への受け入れに発展した。これを機会に市役所のホールを借用して、高等部の生徒が一般市民に向けて学校紹介と作業製品をプレゼントした。出向けなかった生徒はオンラインで参加し、新しい生活様式における人との繋がりをもちことができた。

さらに今年度、地域に貢献することで、働く喜びを感じ自己有用感を向上させることを目指し、弘前市で唯一の動物園「弥生動物広場」へ自分たちが育てた野菜類を飼料として提供した。この活動がきっかけとなり、動物園側から動物たちの餌やり体験用飼料の袋詰めを依頼され、作業学習で請負作業に取り組むことで、障害の重い生徒も集中して自らできる作業を行い、高等部の生徒が一致協力して製品を提供できた。本取組は、地域番組でも放送され、多くの励ましの言葉を頂いた。また、動物園職員が、学校に来て生徒と作業を一緒に行うことで、職員と生徒との距離が近くなり、生徒が自身の役割と地域から感謝されていることを実感できる取組へと発展している。

3 まとめ

3つのプログラムは、弘前市弥生地区や岩木地区の方々の力を借りながら活動を展開するものである。地域の方々の指導を受けたり、活動を共有したりする機会をもつことは、他者とのコミュニケーション力や自己有用感の高まりにつながる。そして、学習活動で経験した内容については、児童生徒自身が振り返ることで身に付いた力を実感し、直接あるいは間接的に地域へ発信していくことが重要であると考え。本活動の成果については、本校ホームページでの紹介や報道機関への取材依頼、地域のショッピングモールで開催する本校作品展、公共機関での販売学習等を通して積極的に発信していく。これら一連のサイクルにより、児童生徒自身は、地域の中での役割を実感し、地域の一員として自分たちができることについて主体的に考えていこうとする意欲につながり、ひいては地域貢献や地域活性化につながっていくものと考え。また、青森県の緑豊かな地域性を生かし、更に地域の人材交流を進めながら農福連携の地盤づくりをしながら地域とともに貢献できる人材育成に積極的に取り組んでおり、県内を代表するキャリア教育実践校として好事例を生み出している。

<青森県> (種別：学校) 青森県立木造高等学校

推薦理由

1 推薦校概要

青森県立木造高等学校（以下当該校）は、昭和2年に開校し、文武両道の校風を今に至るまで継続している。現在では、総合学科の特長を生かして幅広い進路に対応した教育課程を編成し、課題解決型学習による主体的な学習の充実に取り組み、夢や志の実現に向け、「知・徳・体」の調和のとれた多くの人財を輩出している。

当該校は、生徒の多様な希望進路の実現に向けたサポート体制の整備充実をはじめ、事前・事後指導を含めたインターンシップの実施や探究型学習を重視している。「探究学習」において、1年次では「地球未来探究」をテーマに、地域とタイアップし、つがる縄文の会と連携した地元の環境資源を活用した亀ヶ岡石器時代遺跡及び田小屋野貝塚について理解を深め、2年次では「地域未来探究から、私が生きる未来探究」をテーマに、西北地域県民局地域連携部と連携し、地元「ベンセ湿原の保存」や地域の洋菓子店等と共同で洋菓子を開発するなど、課題を持続可能な開発目標につなげる探究活動を行っている。3年次では、「私が生きる未来探究」をテーマに、自分自身の在り方や生き方を踏まえ、その解決策を考えるチャレンジ精神を育成するための未来予想図を作成するなど、将来を考え探究する力の育成の実践活動を行っている。このように、生徒一人一人の社会的・職業的自立に必要な資質・能力の育成と将来を考え探究する力の育成が図れるよう、学校と地域が連携・協力したキャリア教育を実践している。

2 主な取組について

(1) 生徒の希望進路を考えた「夢に向かうための職業人講話」による中学校・高等学校連携の実現に向けた実践活動

キャリア教育における中学校と高等学校の縦の接続と、学校と地域、関係機関が連携したモデルとして、地元を中心とした先輩社会人から仕事のやりがいや想い、今後の展望を生徒が直接聞くことにより、将来に向けての夢や目標を描き、自分自身の進路選択に生かしながら、自立した社会人・職業人の育成をめざすきっかけづくりとしている。また、中学生や高校生を巻き込んだまちづくりや地域活動の担い手となる人財の育成と人財の輪の拡大をめざす仕掛けづくりを実践している。

(2) 高大連携による大学授業による将来の学びを考える実践活動

自分の進路について深く考え、社会人としての基礎となる知識や態度を身につけさせることを目的に、進学を考えている生徒を中心として、大学における講義を自分の希望に合わせ受講し、進路選択のきっかけづくりを実践している。

(3) 「働く」を実践活動で考えるインターンシップ

生徒に自己の将来について考えさせ、社会や職業に対する認識を深め、学ぶことの重要性を考えさせることを目的とし、地元企業約140社と地方公共団体等の協力により、1年生全員がインターンシップを実施している。

(4) 地域との協働活動

当该校では、青森県教育委員会の事業（「ドリカム人づくりプラン（名称：木造（きづくり）・人づくり・地域づくり）」「あおもり創造学」）の取組として、地元つがる市観光協会などの支援のもと「地域との協働活動による探究的学習」を広く展開している。その中で、「ラズベリーパイ」（マイコン）を活用したスマート農業システム研究「つがる市の世界遺産「亀ヶ岡石器時代遺跡」のVRゴーグルの開発と観光VR動画の制作」（つがる縄文の会との協働）等の取組を実践し、地域との関わりを深めさせている。さらに、地元産業の振興を考えるため、つがる市や地元商工会議所等への聞き取りをとおして地域の経済動向について理解し、地元企業と連携して地域の特産物の開発と販路拡大を考え、生徒の力で情報発信する力を身につける取組を行っている。

(5) 自ら考え選択し、行動するための様々な学校外学修への参加活動

当该校では、生徒自らの意思で「講座」や「講演会」、「体験学習」、「ボランティア」、「自由課題研究」などの様々な学びの場に参加する学校外学修を推奨している。これにより、異世代交流を含め、学校では体験することのできない知識や経験の幅を広げるとともに、社会の変化に柔軟に対応し、逞しく生きるためのスキルの向上を実践できる機会の仕掛けを推進している。

(6) 地域の一員としての活動

つがる市の伝統的な祭りである「馬市まつり」には1、2年生約300名が参加し、生徒の制作による「馬ねぶた」、学年単位での「流しおどり」の披露は、祭りを起点とした地域の賑わいに大きく貢献している。また、つがる市はもとより、他の市町村や諸団体主催の催事においては、吹奏楽部が演奏を披露し、各種団体、NPO法人などからのボランティア活動の動員要請にも生徒が積極的に参加している。地域とともに歩む学校の教育活動の一環としてのものだが、生徒の姿勢が本校の伝統として地域に認知されている。

3 まとめ

当该校は、教育目標に掲げている「誠実」「勤勉」「親切」の三つの校訓をもとに、生徒の人間形成を図るため、教育方針及び重点目標の推進を通して「生徒が夢と志をもち、地域に根ざし、文武両道をめざしながら、個々の成長につながる豊かな学校」を構築し、「木高プライドを持ち、自立でき、社会に貢献でき、夢に向かって推進できる生徒を育成する」ことを最高目標としている。その中で、当该校は、人づくり・地域づくりをめざしながら、生徒一人ひとりの進路達成のため、中学校・高等学校・大学の縦の連携、学校と地元つがる市のほか、地域・関係機関との横の連携をもとに、生徒が主体的に学習し、生徒同士、生徒と地域が相互に成長できるようなキャリア教育を実践している。

<青森県>（種別：学校）青森県立三戸高等学校

推薦理由

1 推薦校概要

青森県立三戸高等学校（以下当该校）は、昭和2年の創立以来、今年度96年目を迎える歴史ある学校である。

昭和37年に商業科が設置されたが、平成24年に商業科が募集停止となり、翌年コース制に移行しビジネスマネジメントコースが設置された。今年度は、少子化等の影響で全校生徒は現在88名まで減少している。普通科1学級で、2学年からコース選択制の教育課程編成である。現在、3学年は3コース（人文数理探究コース、総合教養コース、ビジネスマネジメントコース）、2学年は2コース（文理探究コース、みらい探究コース）となっている。

当該校では、「地域を学びのフィールドとしたキャリア教育」を展開し、起業家精神に代表される力、「チャレンジ精神」「創造性」「探究心」「コミュニケーション能力」「リーダー性」「判断力」「決断力」「情報分析能力」等を養い、自分の将来の「生き方」を考えるきっかけとすることを主な目的としている。

2 主な取組について

（1）ビジネスマネジメントコースについて

ビジネス・マネジメントコースでは、ビジネス（商業）の基礎的・基本的な知識と技術を着実に習得させ、これに基づいた構想力、想像力、感性などビジネスの創造にかかわる資質を養い、社会の変化に対応できる起業家の育成を目指してきた。ビジネスマネジメントコースの開設以来、当該校の独特なカリキュラムに対応するスキルを習得するために、各方面の講師の先生方を招聘し生徒の育成に協力をいただきながら起業家教育（アントレプレナーシップ教育）の指導を行ってきた。

（2）三高チャレンジショップ

三高チャレンジショップは、ビジネスマネジメントコースにおける各科目の目的や成果を結集して行う総合的な販売実践の場で、三戸町内の空き店舗を利活用しながら、生徒が自ら販売商品についての企画を立案し、仕入交渉、商品管理、店舗設計、販売運営、決算整理までの実務を一貫して担当する販売実習である。チャレンジショップの実施に当たり、町内の金融機関の融資担当者、三戸町議会議員、三戸町役場地方創生推進室、三戸町スタンプ会などから指導・助言をいただいた。平成26年度よりチャレンジショップが開始され、平成27年度からは三高祭（文化祭）や三戸町農林商工まつりでも行われるようになった。令和2年度までの7年間で17回実施、令和3年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響によりできなかったものの、今年度は10月に実施を予定している。

（3）地域商社SANNOWAとの連携

株式会社SANNOWAは三戸町内に平成31年に設立された官民連携（三戸町、読売広告社の共同出資）の企業で、「モノづくり」「ひとづくり」「まちづくり」を通じて、三戸町のモノ、ひと、コトの地域資源を掘り起こし、地域から全国・全世界に発信して交流拡大をしている地域商社である。当該校が令和元年度から地域に根差した新商品の開発に取り組んだ際に、三戸町を元気にするという目的を持った取り組みが縁となり、生徒の商品プランへの評価、アドバイス等のご指導を受けている。令和2年度には三戸町からサクランボの新品種「ジュノハート」が発表され、販売の企画をSANNOWAと当該校がコラボし、販売即売会を行った。

（4）三戸町 町づくり人財塾への参加

三戸町では、地域を元気にするための対話を実践するための場として、「三戸町 町づくり人財塾」を開講しており、2学生が参加している。平成30年度は8名、令和元年度は7名、令和2年度は7名、令和3年度は9名の生徒が参加し、年齢が倍以上違う町民の方とも親しく対話しながら、将来の三戸町をどのようにして盛り上げたらよいかを積極的に意見発表することで、地域の問題解決に向けて理解を深めた。

（5）県担当機関との連携

令和2年度には地域の活性化や雇用などを含む、社会・地域・環境に配慮したエシカル消費の観点から青森県消費生活センターの依頼を受け、「消費者フォーラム in 三戸」へ参加し、当該校で現在進めている「地場産品を活かした商品開発」の授業の状況を含んだ発表をした。チャレンジショップでの商品販売が、全国各地の商品を町民の方々に提供することで、町内の消費拡大の一因にもなっていることや、特別講師による「地元産品を活かした商品開発」によって、将来的には三戸町の新しい名産品の創出や地元の人々の新規雇用の創出に繋げてきた。

3 まとめ

当該校は、チャレンジショップや商品開発などを通しキャリア教育の実践を行ってきた。「地域を学びのフィールドとしたキャリア教育」も発足後9年目を迎え、卒業生の就職先も地元周辺が大半を占めている。進学した卒業生も将来は地元に戻って活躍したいと考える割合が増えており、本来の目的である「地域経済に貢献できる人財の育成」が達成できている。少子化の進行は郡部に立地する本校にとって大きな問題となっているが「あおり留学」として全国から生徒募集を行うことになっている。

今後も地元や周辺地域の活性の起点となるキャリア教育を継続し、持続可能な社会の創り手の育成に努め、地域の学校としての社会的役割を果たし、持続可能な地域社会の実現に貢献する取組実践は、模範的なキャリア教育となっている。

＜岩手県＞（種別：学校）岩手県立高田高等学校

推薦理由

高田高校が所在する岩手県陸前高田市は、東日本大震災津波で甚大な被害を受け、被災から11年が経過した現在でも産業復興や人口流出など多くの課題を抱えている。こうした中、令和元年度に「産・官・学」が協働して地域や社会の復興、発展を担う有為な人材を育成するため、その方策を検討し協議内容を学校経営計画や教育課程等に反映させることを目的に「高田高校未来創造プロジェクト協議会」を設立し、現在に至っている。高田高校のキャリア教育は、当協議会で協議した内容を基盤に、地元企業や自治体等と連携した体験的な活動や地域探究学習等を「T×ACTION（タクシオン）」と名付け、「総合的な探究の時間」を中心に、生徒の発達段階に応じて取り組んでいるものである。具体的な取組事例は以下のとおりである。

1学年では、関係機関や地元の10事業所（令和4年度実績）と連携し、各事業所の若手社員等との交流により、地元事業所の仕事内容や若手社員等が実感しているやりがいに触れることで、地域の将来に可能性を感じ、自身のキャリアデザインを検討する基盤とすることを目的に「高校生と地元で働く若手社員等との交流会」を実施している。また、陸前高田市や地元の15事業所（令和4年度実績）と連携し、実際に生徒が各事業所を訪問して「働くということとはどういうことか」についての理解を深めることを目的とした「ワークトリップ」を実施している。

2学年では、地元の21事業所（令和3年度実績）と連携し、取り組んだ生徒が、実務に携わる経験をすることで職業理解を深め、自身のキャリアデザインの精度を高めることを目的に「インターンシップ」を実施している。また、その他にも地元企業等と連携して新商品の開発や販売に取り組むことで、主体的に課題を発見していく力や創造性を育む取組も展開している。その主な取組例として、海洋システム科の生徒達による醸造業者である株式会社八木澤商店と連携した白味噌鯖缶詰の開発・販売や、NPO法人りくカフェと連携して行った低カロリー・減塩のオリジナルレシピによる弁当の開発・販売がある。

以上の取組が、推薦の観点と合致し、本県のキャリア教育の充実・発展に大いに貢献している。

＜岩手県＞（種別：学校）岩手県立一関工業高等学校

推薦理由

一関工業高校では、キャリア教育の充実を目的として、これまでのインターンシップに加え、4つの事業を展開している。

特徴として、地元理解と愛着及び、生徒の社会的・職業的自立と地域課題を含めた社会の諸課題に挑み解決する力を育むことである。令和2年度から学校運営協議会を設置し、自治体と地元企業、地域住民、学校が連携・協働することにより、組織的にキャリア教育の推進・充実を図っている。

- 1 地域産業講座
- 2 「技術・知識を地域につなげるプロジェクト」
- 3 岩手大学半導体アカデミー
- 4 出前授業、SDGs、I L C

取組の理念に「Well-being」を据え、活動の動機と目的を明確にし、推進する仕組みとして学校運営協議会を機能させている。学校を取り巻く各方面からの連携・協働により、地域とともにある学校として、積極的に地域資源を活用し、キャリア形成と地域の担い手の育成に取り組んでいる。また、新型コロナウイルス感染症対策として、ICT機器を活用したオンライン講義や、実験、実技講習、企業説明、企業見学会に取り組み、誰一人取り残すことのない「学びを止めない」努力として、活動形態の新たな試みも行っている。さらには、今年度、一関工業高等専門学校及び一関市教育委員会が連携・協働した、地元小・中学生を対象としたIT授業には、サポーターとして参画した。このように、さまざまな視点からキャリア教育の推進に努めている。

少子化が進み、専門高校への志願者数は減少しているが、一関工業高校は定員を超える志願者があった。地域や関係機関・団体等との協働による魅力と特色ある取組の成果の一つと捉えている。

以上の取組が、推薦の観点と合致し、本県のキャリア教育の充実・発展に大いに貢献している。

＜宮城県＞（種別：教育委員会）色麻町教育委員会

推薦理由

1 取組の概要

小・中・高等学校における縦のつながりを意識した異校種交流や、地域の人々・企業との交流活動や体験活動を進めるなど、地域連携によるキャリア教育に、町全体で計画的、継続的に取り組んでいる。令和2・3年度に、宮城県教育委員会指定「志教育支援事業推進地区」の指定を受け、「夢の実現 Will・Comer」をテーマに、将来の夢や目標に向かって主体的に生きる児童生徒の育成を目指し、地域社会との連携・協働による活動を体系的に実践するなど、本県独自の取組である「みやぎの志教育」の一層の推進を図った。

2 主な取組内容

（1）異校種間連携

これまで行ってきた加美農業高等学校との連携を土台に、小・中・高における縦のつながりを意識して、異校種間の交流を進めた。具体的な取組として、加美農業高等学校と小学校が白菜栽培をとおして交流活動を行ったり、加美農業高等学校と中学校が協力して、加美農米のブランド化についてのPR活動を行ったりした。

（成果）

各校の連携事業活動における豊かなかかわり合いを通して、よりよい人間関係を築き、将来の夢や目標に向かって主体的に学び生きていこうとする力を育成することにつながった。

（2）地域連携

色麻のひと・もの・ことについて、再確認し、目標に向かって努力することや役割を果たすことの大切さに気付いたり、これからの自分にできることを考えたりできるように、交流と体験の工夫を図った。地域学校協働本部や地元企業からの協力を得て、えごま栽培に関わる人々と小学生が交流し、働くことの意義について考える体験活動を取り入れたり、ハローワークから講師を招いて職業講話を取り入れたりした。

（成果）

特に小学校では、地域学校協働本部や地元企業からの協力を得て、地域の産業のすばらしさを実感し将来の仕事や生活についても考える機会となった。

（3）その他の連携

地域を支える人材としての自覚を深め、改めて地域資源を見直すとともに、自分たちが住んでいる地域をよりよくしていこうとする態度と意欲を高めるために、中学生が宮城大学と協力して旅行企画やパンフレットを作成する探究的な活動を取り入れたりした。

（成果）

中学校3年生では、宮城大学と連携し、インターネットのデータを活用する方法や地域資源を使った町づくりについて学ぶことができた。

＜宮城県＞（種別：学校）宮城県加美農業高等学校

推薦理由

1 学校の概要

宮城県北西部に位置する色麻町にあり、町の西側は奥羽山脈の山岳地帯、東側は大崎平野にかかる四季折々の自然がある場所に位置している。校地面積は約81万㎡を有し、本州一の広さを誇る農業高校である。また、昭和39年に文部省より、「自営者養成農業高校」として、全国の農業高校の中で第1号の指定を受けた。今年で創立122周年を迎え、校訓の「耕心」の下、社会に有益な人材の育成に努めている。

2 取組の概要

令和2・3年度に宮城県教育委員会の「志教育支援事業推進地区」の指定を受け、学区内にある小・中学校と積極的に連携・協働しながら、志教育の推進に取り組んだ。現在も学校の資源を十分に生かし、長期的な視点で、

系統的・多角的にキャリア教育を展開している。

特に、地域連携、異校種間連携による農業教育の充実と郷土愛の醸成、伝統野菜を活用した地域の活性化、産学官連携によるブランド米の創出など学校の枠を超えた取組を、年間を通して行っている。

3 主な取組内容

(1) 異校種間連携

①酪農ファーム活動

県内の小学生を対象とした搾乳体験等の出前授業を積極的に行い、生徒が人と「かかわり」を深める実践を行っている。

②ICTの活用による遠隔授業の実践

コロナ禍であってもICTを活用し、リモートによる草花の種まきや鉢上げ作業の指導、草花の生育状況や実習場面のライブカメラ中継など、高校生が中学生に遠隔授業を行っている。

(2) 地域連携

①伝統野菜の保護活動

栽培する農家の減少により、絶滅の恐れがある地域伝統野菜「小瀬菜大根（こぜなだいこん）」の継承のため、栽培農家や大学、町及び普及センター等と協働し、栽培方法の研究を行うとともに、レシピ開発や商品開発などをおして、普及活動に努めるなど、保護活動に取り組んでいる。

②自治体と連携した獣害対策

地域の課題である獣害対策のため、色麻町と連携し、被害状況の調査と防除柵の設置に向けた協働作業を行った。獣害の調査に基づき、AIによる分析を行い、センサーカメラを設置し、箱罠を製作して捕獲と駆除を試みている。これらの活動により、地域の課題解決に取り組むとともに、地域貢献の志の醸成、地域農業を守り、持続可能な社会の構築に向けた自己肯定感の育成を図っている。

(3) 産学官の連携

安心・安全な農作物を消費者へ提供するため、県及び東北農政局との連携により、JGAP認証のブランド米を生産した。また、世界農業遺産の認定地域に学校があることから、安心・安全な農業を実践しながら、グローバルな視点での農業経営を目指すため、ブランド米を海外（香港）に輸出し、6次産業化等の学びも展開している。

<秋田県>（種別：教育委員会）北秋田市教育委員会

推薦理由

1 取組の概要

北秋田市教育委員会では、第2次北秋田市教育ビジョンの基本理念「心豊かでたくましい人間性を育む教育の充実」の下、重点目標を「ふるさとを愛し、ふるさとを支えようとする子どもの育成」として、地域に根ざしたキャリア教育の充実を施策の柱として様々な事業を行っている。

2 主な取組内容

①北秋田市の自然、伝統、文化、歴史等についての理解を図るとともに、自らが生まれ育ったふるさとに愛着をもち、誇り高く生きる態度の育成に資するために、令和2年に郷土資料集「きらり☆きたあきた」を発行し、市内の児童生徒並びに教職員に配付するとともに、教師用手引きも作成した。資料集の活用に関する教職員向け研修及び児童生徒向け講座も開催している。

②自分の生き方について考えたり北秋田市のよさを再認識したりすることを通して、地域社会に貢献し、将来を担っていく頼もしい人材を育成するため、夏休みに市内在住の中学生を対象に5日間にわたり職場体験活動を行っている。今年度は市内の約100余りの職場がエントリーし、200名の生徒が職場体験学習を行った。

③社会を支える自覚と高い志を育成するため、毎年8月に「きたあきたこどもサミット」を開催し、市内9小学校から代表児童1名ずつ、市内4中学校から代表生徒2名ずつが集まり北秋田市の課題について話し合いを行っている。各校の児童会、生徒会で事前に話し合われた内容を持ち寄って話し合い、その内容を再度自分たちの学校で広める活動をしている。今年度は「きらり☆きたあきた～地域のためにできること～」について話し合った。

- ④市内各小・中学校の総合的な学習の時間の推進を図るため、補助金活用事業を行っている。各校では補助金を活用し、校外学習、地域の人々との交流、伝統行事の体験など様々な活動を行っている。各校の取組は「きり☆未来を切り拓く子どもたちの活動」として「広報きたあきた」で紹介している。
- ⑤教職員を対象に、夏季休業期間を利用して、市の歴史、文化、自然等の概要を知り、諸施設等の見学を通してその実態を把握し、日々の指導に役立てるため、「郷土学習フィールドワーク」と「野外観察会」を実施している。

＜秋田県＞（種別：学校）羽後町立羽後中学校

推薦理由

＜特色ある教育活動＞

羽後中学校では、学校の教育目標『自律 協働 創造』の下、今年度の重点実践事項の一つとして「地域に根ざしたキャリア教育の推進」に取り組んでいる。

総合的な学習の時間では、「ふるさと羽後を見つめ、ふるさとに貢献する生き方を考える生徒の育成」を目標に、生徒は3年間、ふるさとに関わる課題について探究的な学習を進めている。3年生（106名）は、「地域貢献」と「社会参画」を柱とした学習を“Project U”として、生徒がそれぞれの興味・関心を基にチームを編成して取り組んでいる。町関係課、地元企業、NPO等からの支援を得て、ふるさと羽後町を元気にする様々なプロジェクトに、実行委員会を中心に企画・運営している。

【令和4年度の主な取組】

- (1) プロジェクト実行委員会…“Project U”の活動全体の統括、各部門の企画への支援
- (2) 食事部門…隣接市のホテルとのコラボによる地元産食材を使用したオリジナルメニューの制作と販売
- (3) スイーツ部門…町内道の駅とのコラボメニューの企画
- (4) お菓子部門…ホテル、地元製造業とのコラボメニューの企画
- (5) アクセサリー部門…クラフト作家や地元呉服店とのコラボによるアクセサリーブランドの展開
- (6) 映像部門…町総務課、NPO等の協力を得て、羽後町を題材にした「ふるさとCM大賞コンテスト」に出品する作品を製作
- (7) 羽後中学校の公式ツイッターを開設し、“Project U”に関する情報を発信（随時更新）
- (8) デザイン部門…各部門からの要請を受けて、ポスター、イラスト等デザインの作成

＜山形県＞（種別：教育委員会）酒田市教育委員会

推薦理由

酒田市キャリア教育推進事業は、児童生徒一人一人が、自分の将来を切り開き自立して生きていく力を育成するため、小学校または中学校が行うキャリア教育に関する活動を支援することを目的として行っている。

＜対象となる事業について＞

- ①学校において「キャリア教育推進事業」の趣旨に沿った取り組みを実施する事業
- ②キャリア教育の推進に繋がる事業

＜事業内容について＞

「キャリア教育の推進」をテーマの柱に据え、交付金を活用し、学校提案型のキャリア教育活動を実施する。

- ①実施校：小学校、中学校
- ②様々な職業に就いている方を講師に迎え、仕事内容や働くことへの思い、故郷で働く理由、働く喜び、職業選択について大切なこと等の講話。

＜成果について＞

- ①地域に多彩な職業があることを知り、働くことに興味関心を持つようになった児童生徒が多かった。
- ②将来への夢を育み、学ぶことや計画することの大切さに気付いた児童生徒も多かった。
- ③酒田の自然や文化に触れる貴重な機会になった。

＜今後について＞

今後も地域指導者等に講義を依頼し、児童生徒の勤労観、職業観を育成し、夢を叶える充実した将来へ導く方策としていく。

＜山形県＞（種別：学校）村山市立楯岡中学校

推薦理由

1. 概要

村山市立楯岡中学校では、学校全ての教育活動が将来の職業選びにつながることから、「キャリア教育」に力を入れている。

「感性をみがき“未来を生きぬく力”を育む学校」の教育目標を掲げ、「未来を生きぬく力」＝「キャリア」であるという認識の下、学年ごとにキャリアの課題を持ち、調べ学習や体験学習など探究型の深い学びを積極的に取り入れたキャリア教育を推進している。本校の【目指す学校像・生徒像】は「学ぶ・響く・琢く」の3つから、特に「夢（＝将来のキャリア）の広がる学校」として、その実現のために学び続ける生徒の育成を基本の指導テーマとしている。

2. 具体的な取組

(1) 【先輩のキャリアに学ぶ「ようこそ先輩！楯中」授業＝《喜望塾》】

各界で活躍している母校出身の先輩や地域人材を講師に招き、話を聞く「キャリア教室」を開校の翌年から継続的に開催している。キャリア形成のためのモデル学習（＝コンピテンシーモデル）でもあるこの方法は最も効果的な方法といえる。全国レベルで活躍している先輩を講師に迎えた講座「喜望塾」は、現在まで10回開催している。

(2) 【学年のステップを踏んだキャリア教育の実践《職場体験学習等》】

第1学年では、自分の生き方からの進路計画や「親の職業を知る」調べ学習、第2学年では、さまざまな職業を学びつつ進路検討のための「職場体験学習」、第3学年では、適切な進路選択に向けた「進路情報の主体的獲得」など、ステップを踏みつつ、キャリアに対する理解を深められるような独自の工夫を行っている。

(3) 【「キャリア・パスポート」の積極活用と「楯中パワーアッププロジェクト」との連携】

キャリア学習で学んだことを「キャリア・パスポート」に蓄積し学びのふり返しを行うと共に、「キャリア」の根幹＝自己管理能力と捉え、生活記録ノート「楯中 Life」を活用するなど「楯中パワーアッププロジェクト」活動と密接に連携し、さまざまな実践活動を行っている。

＜福島県＞（種別：教育委員会）石川町教育委員会

推薦理由

平成28年4月、石川町、地域の企業（事業所）、福島県立石川高等学校が連携・協力し、地域の子供たちの適正な職業観、勤労観の育成を図るため、いしかわWORK&LIFE教育運営協議会を置いた。

この運営協議会は、石川町長、石川町教育委員会教育長、石川町商工会会長及び福島県立石川高等学校長の4名で構成されている。また、運営協議会の傘下には実行委員会が置かれ、役場からの各課長、そして本校からはキャリア教育・地域連携推進担当教諭等10名をもって協働的に運営に当たっている。

毎年度4月には、添付資料のとおり調印式が執り行われ、本校生徒へ「人に学び、地域と歩む」本事業の理念を喚起させ、「地域に貢献できる人材の育成を目指す」地域からの協力に気付かせ、就業意欲を一層高める機会となっている。

石川高等学校は2年次から、3年次までキャリア教育を継続履修する。2年次では、毎週水曜日6時間、おおよそ8時半から15時までの6校時相当時間を従事にあてる。4月から7月までの11回を前期実習、9月から12月までの14回を後期実習とし、前期と後期では異なった2事業所で就業する。3年次では、4月から12月の22回、1事業所で継続就業する。

事業所開拓には、商工会の協力が欠かせない。旧年度の秋には、商工会が事業所受け入れについて依頼をする。本校生徒と事業所とのミスマッチが無いよう、商工会職員と本校教諭から成る面接官と生徒との間で面談が行われる。事業所は鉄工業、旅館業、販売業、建設業、自動車業、福祉施設、保育所、役所等多業種に富んでいる。

キャリア教育と近似した支援として、「石川町企業合同説明会」が3年生を対象とした6月、2年生を対象とした1月に役場主催で行われる。この事業では、キャリア教育理念「地域に貢献できる人材」に立脚した町内企業への就職のきっかけ作りの場となり、地域教育が生徒の将来を支える構図となっている。

このいしかわWORK&LIFE教育では、「地域創造探究」も柱に置き、生徒が地域の課題解決に向けて実際に校外

へ出て、地域の人的資源を得ながら地域の課題や地域の強みを知る活動も行っている。また今年度から、石川町役場が「福島県立石川高等学校高校魅力化事業」を立ち上げ、本校へ石川町高校魅力化コーディネーター1名の派遣が実現している。本コーディネーターは、令和4年7月28日、山形県南陽市で開催された「第5回全国高等学校小規模校サミット」の参加を進め、本校のいしかわWORK&LIFE教育の特色についてPRする支援をした。

＜福島県＞（種別：学校）棚倉町立棚倉小学校

推薦理由

棚倉小学校では、平成25年度より棚倉町教育委員会が推進しているキャリア教育の取組を基盤として、令和元年度より、キャリア教育を軸とした教育課程の研究に取り組み、成果を挙げている。

「全ての児童に今の学びと自己の将来とのつながりを実感させ、真の学力向上の基盤を作りたい」という思いのもと、将来必要となる資質・能力を育成し、キャリア発達を促す教育課程について、以下に示す組織的・系統的な取組により研究が積み重ねられている。

取組1 資質・能力と「ほめポイント」の設定

児童一人一人が思い描いた「なりたい自分」になるために必要な資質・能力を、教師が意図的・計画的に「将来につなぐ資質・能力」として設定するとともに、それらを子どもの行動レベルで「ほめポイント」として整理した。設定した資質・能力は、学習指導要領で示された学力の3つの柱や、キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力と関連付けて設定した。

取組2 キャリア教育の視点を生かした意図的・計画的な教育活動の展開

児童の資質・能力を育むために、四半期ごとに有益な教科、領域等を各学年で精選配列した。教育活動全体において、特に精選配列した教科、領域においては児童のよさ「ほめポイント」を意識して横断的、関連的に指導した。核となる体験活動としては、主に町や地域人材バンクとの連携による、低学年での町探検、中学年での町で働く人についての探究活動、高学年でのチャレキッズ（職業体験学習）等を系統的に位置付けるとともに、事前・事後学習において、仕事の大切さや働く人の思いに気付く学びを積み重ね、人の役に立つ喜びやなりたい自分になるために努力する大切さへの意識や態度を育てた。

取組3 キャリア教育の視点を生かした授業改善

授業においては、教科のねらいを達成するための授業づくりと、授業で見られる児童のよさ「ほめポイント」の見取り、価値づけという2つの柱をもとに構想、実践を行った。教科のねらいを達成する授業づくりの中に潜むキャリア教育としての価値を見出し、それを意識して指導することで、「教科を通したキャリア教育」を実践した。

取組4 特別活動を要としたキャリア教育の実践

教育活動全体の取組を自己の将来や社会づくりにつなげていくことができるよう、学校、家庭、地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり将来の生き方を考えたりする活動を行った。あわせて「キャリア・パスポート」をドリームファイルと名付け、一人一人のキャリア形成に関わる学びの経験を累積した。

取組5 「自己マネジメント力」の向上の手立て

全ての教育活動において、「なりたい自分」をイメージした目標設定、自力または協働での実践、振り返り、新たな目標設定のPDCAサイクルを意識して指導した。中でも、毎日の学習や生活の計画や振り返りにおいて、学習計画表「スケジュールプランナー」を活用したことは、自己マネジメント力の向上につながった。

＜福島県＞（種別：学校）楡葉町立楡葉中学校

推薦理由

社会的自立・職業的自立に向けて、生徒一人一人のキャリア発達を全ての教育活動を通して支援することを目的として活動している。東日本大震災及び原子力発電所の事故による避難を経験したことで、楡葉町の魅力を学び、発信することが大きな課題であったことから、平成29年4月に楡葉町での教育活動を再開して以来地域に根ざしたキャリア教育を進めており、生徒が実践する活動は地域の復興にも大きく寄与している。

主な取組は次の通りである。

1 起業家体験学習

檜葉中学校では平成30年度より、起業家体験学習として模擬会社「Nalys（ナリーズ）」を立ち上げ、全校生徒が会社員となり経営、運営している。慶應義塾大学院教授の岸博幸先生、大江貴史先生をはじめ、檜葉町や関係機関の指導や支援を受け、商品開発や販売等の体験学習を進化、発展させている。地域の発展を担う人材の育成、多様化の進む社会で生き抜く力の育成を目指した活動を進めている。

（1）組織

社長を中心として複数の製造部、広報部、地域連携部で構成されている。「檜葉町民や全国の人が檜葉の良さを知り笑顔になってもらうことを実現する」を定款とし、檜葉町の特産品を使った魅力的な商品開発と発信を行っている。

（2）主な活動内容

- ①起業家講座：社会課題を見つけ、協働して解決する力を育てる。
- ②商品開発：地域の素材を生かした魅力ある商品を開発する。
- ③VMD講座：商品の陳列やポップ作りを通し、商品の魅力を伝える力をつける。
- ④販売スクリプト講座：商品に興味をもたせるための表現力を身につける。
- ⑤販売活動：利益を出し、組織として持続可能な活動となるための取組を学ぶ。
- ⑥決算報告：一年間の取組みと活動成果を明確に報告する力を育てる。
- ⑦寄付活動：利益を地域に還元し、社会福祉に貢献する喜びを学ぶ。

2 地域活性化講座

地域経済が活性化するための方策を提案するため、檜葉町の実情と他地域の取組みを調べ、仲間と協働して解決する力を育てる。

3 和太鼓学習

檜葉町の伝統を継承し、地域への誇りを持つとともに次世代に伝えるための技能を習得するため、地域人材との連携を密にした活動を行っている。

令和3年度福島県キャリア教育推進事業の指定を受け、令和3年11月12日（金）にモデル校実践研究発表会を実施した。社会的・職業的自立に必要な資質・能力を育成するために、特別活動をキャリア教育の要としながら、自分たちの活動を絶えず見直し、生徒の自発的、自治的な活動を充実させている。

<福島県>（種別：学校）天栄村立湯本中学校

推薦理由

1 取組の概要

福島県岩瀬郡天栄村の鳳坂峠を会津方面に向かって越えたところに位置する山あいの湯本地域は、湯本温泉・二岐温泉の2つの温泉を抱え、さらには羽鳥湖や隣接する高原レジャー施設などを有する観光に立脚した地域である。しかし近年は、地元に基幹産業となるものが少ないため、働き口やより住みやすいところを求めて地域を離れてしまう若者が多く、過疎化に伴う高齢化が急激に進んでいる。こうした中で、生徒が自分たちの生まれ育った湯本地域について深く学び、地域独自の魅力や課題を理解し、それらを解決しようと実際の体験を伴った探究的で深い学びを進めることが重要であると考え。このような探究的な学びを推進していくために、全校生徒が2名で地域や関係者とのつながりが密接である極小規模校の本校の強みを生かして、令和3年度から令和4年度にかけて総合的な学習の時間を中心に起業家精神（アントレプレナーシップ）教育（以下、アントレ）を取り入れ、生徒一人一人の模擬起業体験を通して、湯本地域における新しい価値（商品あるいはサービス）を開発する機会を設けることとした。

令和3年度は、生徒の実態に応じて、特に以下に掲げるキャリア教育にも大きく関わるA～Dの資質・能力等の育成に向けて意図的・計画的に実践を積み重ねていった。生徒に実践させる前には、教員がチームとなって生徒を支援できるように週1回アントレ委員会を設定し、授業における進め方や支援の仕方などについて具体的に確認した。また、アントレを進めていく中で、A～Dの資質・能力等の育成に向けてPDCAサイクルを有効に機能させつつ、令和4年度に閉校を迎える本校の最後の卒業生が開発した商品が、長く地域の中に残るようなも

のにしたいとの思いも強くなっていった。

【湯本中学校におけるキャリア教育に係る育成すべき資質・能力等】

A 情報を収集し分析するリサーチ力 B アイデアを生み出す発想力及びそれを形にしていく企画力
C 関係者の理解を得るためのプレゼンテーション力 D 仲間と協働して取り組むチームワーク力

2 取組の実際

- (1) 自分自身や自らの地域への思いを理解する活動(A リサーチ力)
 - ①自分の好きなもの探し ②自分の興味・感心のあるもの探し
- (2) 自らのアイデアや地域の強みを商品として開発する活動(B 発想力・企画力)
 - ①商品の企画書づくり ②企画書の練り直し ③試作品づくり(計6回)
生徒が湯本地域にちなんだ商品を開発する中で、天栄村特産の野菜を生かしたお菓子「ヤーコンクッキー」と、生徒の居住地の近くの有名な二岐山の名前にちなんだ和菓子「二岐大福」を開発することとなった。
- (3) 開発商品を事業者や地域の方に広く理解をしてもらう宣伝活動(C プレゼンテーション力)
 - ①アントレ学習中間発表(道の駅「羽鳥湖高原」駅長さん、地元製造業者(stan cafe)向け)
 - ②授業参観での開発商品の試食会(「ヤーコンクッキー」「二岐大福」)
 - ③チラシづくり(村ふるさと夢学校、村企画政策課の協力)
 - ④校内文化祭における開発商品の試食会(「ヤーコンクッキー」「二岐大福」)
- (4) 地域や事業者との協働による商品を具現化・販売活動(D チームワーク力)
 - ①職場体験(stan cafe)における商品の共同開発(「ヤーコンクッキー」「二岐大福」)
 - ②最終試作品づくり(stan cafeにて) ③製造など委託依頼(正式にstan cafeへ委託依頼)
 - ④道の駅「羽鳥湖高原」での販売の正式依頼
 - ⑤販売活動その1(羽鳥湖高原道の駅にて) ⑥販売活動その2(村地域おこし協力隊主催のてんえい市への出店)
- (5) 湯本地域の強み・弱みを把握し、新しいニーズ(価値)を把握する活動(A リサーチ力)
 - ①県内先進校とのオンライン交流(アントレ学習情報交換) ②地域、関係者とのオンライン会議(地域のニーズの把握) ③村内の他中学校とのオンライン交流(同年代の考えるニーズの把握)
 - ④令和4年度アントレ学習の方向性の検討

3 取組の成果と今後

令和3年度の取組は、湯本地域ばかりでなく天栄村においても「ふるさと」を深く理解するキャリア教育の実践として、地元の新聞に大きく取り上げられ地域に広く紹介されたことで注目を浴びた。令和4年度の現在も、この取組を発展させ、A～Dの資質・能力等をさらに育成すべく地域の農家、製造事業者、販売所と連携、昨年度以上に地域に密着した商品「天菜クッキー」(天栄村の野菜を使用)や「二岐天菜パン(仮称)」(二岐山の名称と天栄村の野菜使用)を開発している。

湯本中学校は令和4年度末をもって閉校の運びとなるが、本校最後の卒業生が開発した商品が来年度以降も地域の事業者の看板商品としての価値を生み出せるように、今後、関係者と協議を重ねながら最後まで改良を加えていきたい。

＜茨城県＞(種別：教育委員会) 神栖市教育委員会

推薦理由

神栖市は10年後につながる「授業・学校・人」づくりをキャリア教育の視点で捉え、NEXT10「10年間学ぶ意欲を持続させるために」を掲げ、キャリア教育のさらなる充実を図っている。その一環としてキャリア教育セミナーを実施しており、今年度は、市内外の企業・事業所や近隣の大学等の協力を得ながら児童生徒が主体となる体験型講座を行う予定である。このセミナーを通して、児童生徒が知的好奇心を高めるとともに、キャリア選択の機会を得ることを目指す。市教育委員会が学校機関と地域・社会の連携が円滑に進むよう取り組んでいる。

①小中学校のキャリア教育推進プロジェクトの取組

市内のすべての小中学校にキャリア教育推進プロジェクトの計画書と報告書の作成を依頼し、当該学校内での教職員のキャリア教育への理解が深まるとともに、推進が図れるようにしている。また、地域・社会にもキャリ

ア教育の取組について理解を得られるよう各学校のホームページに計画書や報告書を掲載している。

②高等学校とのキャリア教育推進の連携

年3回、キャリア教育研修会を開催している。5月に行われる研修会では、各小中学校が計画書を持ち寄り、共通理解や情報交換を行ったり、小中連携の視点について話し合ったりする機会を作っている。市内の高等学校も参加し、「キャリア・パスポート」について小・中・高等学校間で情報交換する中で、児童生徒にとってさらなるキャリア発達につながるような内容になるよう検討する機会も設けている。9月に行われる研修会では、1学期の取組を振り返り、今後の方向性について検討する機会を作っている。2月に行われる研修会では、小中学校だけでなく高等学校でのキャリア教育に関する授業の取組や高等学校での「キャリア・パスポート」の活用についても情報交換を行い、小・中・高と系統性のあるキャリア教育が展開できるよう、今年度の成果と課題について共通理解を図っている。市教育委員会が市内のすべての小中学校だけでなく、市内の高等学校とも連携してキャリア教育の推進が図れるようにしている。

＜茨城県＞（種別：学校）笠間市立岩間第三小学校

推薦理由

【概要】

岩間第三小学校「ベンチャービジネス」事業「キャリア教育の一環としての岩間三小スイートポテト販売」が昨年度から継続的に行われており、以下の点で学校を中心とした地域社会、地元企業が連携・協力し一体となった取組を進めてきているキャリア教育実践校として広く全国の学校に周知したいと強く考える。

【主な取組】

- ① 将来の起業家を育成するため「働く」ことの疑似体験を通して自治的活動、創造的活動の充実を図る。
- ② 全校児童で大切に栽培し収穫したサツマイモを地域住民や地元企業と連携しながらスイーツ加工・販売までの広報活動及び店舗販売まで行うなど、体験的なキャリア教育の環境を地元総ぐるみで整える。
- ③ 岩間三小スイートポテト販売に係る様々な活動（別紙参照）を通して地域と学校の連携を促進し、地元を愛し、地元を大切にする人材を育成する。

【昨年度の取組】

6学年の児童を中心に、生産部、広報部、商品開発部、営業部、販売部の5部署からなる模擬会社を設立し、学校の総力を挙げたキャリア教育を念頭に活動を進めた。児童からの考えをもとにして、会社名、会社のシンボルマーク、商品名、商品パッケージを決定した。シンボルマークをプリントしたエプロンを製作し、児童は活動時にいつもそれを身に付けた。

地元企業と連動して製作したスイートポテトは、地域交流センターに協力依頼をし、当施設で開かれる地域イベントでの出店販売を実施した。商品開発や出店交渉の際は、児童が職員の方と直接関わって交渉した。広報活動では、近隣の小学校や中学校へ児童が訪問しPR活動やチラシの配付を行ったり、地域の企業や店舗にポスターの掲示を依頼したり、更には、地域広報誌（「茨城新聞」「笠間市広報誌」）に掲載された。

【今年度の取組】

昨年度の取組の成果と課題を、職員、児童、地元企業と確認し昨年度の取組をベースとしながらも、以下の点をキャリア教育の中に取り込むことでアップデートを図った。

岩間三小「ベンチャービジネス事業」として企業体験活動を明確化し、ヒト・モノ・カネ・情報の活用を図りながらキャリア教育の学びの内容を以下、具体化して取り組んでいる。

- 地域の起業家による出前事業及び商工会との連携（3・4年笠間焼商品化も視野に入れて）
- 学校運営協議会を中核とした明確な役割分担と体制整備 - 「起業家育成部（児童対象）」「人材育成部（対象：地域）」「企業連携促進部（対象：地元企業）」「教育行政連携促進部（対象：教育行政）」
- 6年生を中心とした校内児童組織づくり - 「総務・企画部」「生産部」「広報部」「商品開発部」「渉外部」
- 株式会社の働きや株式による資金調達のしくみについて、外部講師を招集した体験学習

<茨城県> (種別：学校) 学校法人霞ヶ浦学園 つくば国際大学高等学校

推薦理由

平成30年に学校活性化計画を立て、令和2年度から「アドバンススクール」という愛称の下、「社会の役に立つ人材」の育成、「生きる力」を身に付け、地域に根差し、地域に信頼され愛される学校を目指し、学校改革を始めた。その改革の中核が3年間を見通した「キャリア教育」であり、その主な取り組みは次の通りである。

① キャリアデザインの授業 (総合的な探究の時間)

オリジナルのテキストを使用し、職業観・人生観の育成や問題解決能力の育成を目指した3年間通しての授業を展開している。

② アドバンスエリアの授業 (学校設定科目)

生徒は自分の興味・関心や希望進路に応じて、「メディカルエリア」「生活デザインエリア」「カレッジエリア」「地域デザインエリア」「エキスパートエリア」の5エリアから、2年次に週2時間、3年次に週4時間の科目選択をして将来の進路選択の一助としている。年130人程度の外部講師の協力をいただいている。

③ 第1学年全生徒による職場体験 (インターンシップ)

所在の土浦市内及び近隣の事業所(60～80)にて、3月に実施予定(令和3年度はコロナにより中止となった)。事業所調べ、心構えやマナーを事前に学習し、当日(1～2日間)を迎え、実施後は「報告書」の提出により自己評価を行い、次年度へ臨むことにしている。

④ 第2学年希望者による職場体験 (インターンシップ)

高校の近隣の事業所(20～30)にて、12月に実施予定。

⑤ 保育園・幼稚園実習

夏季休業期間に、付属幼稚園及び併設保育園にて、幼稚園教諭や保育士を目指す生徒対象に実習を実施している。尚、この実習は10年以上継続している。

⑥ 地域の魅力発見

前述した「アドバンスエリア」の一つである「地域デザインエリア」において、地域の活性化を探究し、地元での就職につながるような授業を展開している。具体的には2年次では「郷土料理について」調べることにより、地産地消について考え、3年次では、茨城県の魅力について調べ、その魅力を発信する方法などをプレゼンすることにより、地元への愛着や誇りを感じることができるよう授業を展開している。

【ホームページ】 <http://www.tiuh.ed.jp>

<茨城県> (種別：団体) 筑西市立下館小学校PTA

推薦理由

平成19年度の3学期に、PTA内の組織「おやじの会」の主催で、児童の健全な職業観・勤労観の育成を目指し9名の講師を招いて「職業フォーラム」を開催した。以降、毎年PTAが学校と協働で「職業フォーラム」を継続して開催することで、下館小学校のキャリア教育の目標である「時代の変化やグローバル社会の中で、社会的・職業的自立を実現するための基盤を持つ児童の育成」に向けて大きな役割を担っている。

【特徴】

・PTAが主体的に計画や運営に関わるなど、学校と協働した職業フォーラムである。

【主な取組】

・児童に「将来になりたい職業アンケート」を実施し、その上位の職業の方に講師を依頼している。講師の選定や依頼、交通手段の確認や講話の内容等にもPTAが主体となって関わっており、地域のネットワークを活用し、スポーツ選手やテレビ制作関連など、地域にない職業の方も招くことができている。(例年15業種、20名以上の講師を依頼している。)

・3～6年生の児童を対象に実施しているので、小学校在学中に4回の職業フォーラムに参加することができる。(コロナ禍となった令和2年度からは4年生以上で実施。)発達段階に応じて様々な職業に触れたり、その職業を体験できる活動を実施したりすることで、児童自身が自分のキャリア形成と自己実現に向けて、現在の

生活や学習を振り返る機会になっている。

・コロナ禍となった令和2年度も「コロナ禍で働く人々」をテーマに、感染防止対策を講じながら6業種の講師を招いて実施した。

＜群馬県＞（種別：学校）長野原町立西中学校

推薦理由

西中学校では、人間関係をうまく築くことができない、自己肯定感をもてないなどの生徒の実態から、学校教育全体を通じて、発達段階に応じた組織的・系統的なキャリア教育を推進していくことが必要であると捉え、令和2年度の関ブロ発表に向けて、平成31年度からキャリア教育の推進を進めてきた。その中で、学校の特色や教育目標、生徒の実態に基づいて、作成したキャリア教育全体計画と年間指導計画を職業との関連が図れるよう見直した。それらの計画に基づき、地域・産業界等との連携・協力を主体的に図りながら、職場見学や職場体験等の活動を行っている。

【主な取組】

○農業体験（野菜づくり・酪農）を通じたキャリア学習（1年生対象）

地域の産業である、野菜作り農家での体験活動を行い、農業への理解を深めるとともに、働く人たちとの交流を通じて、その生き方に触れる機会とする。事前学習として地元の農家の方の講話を受け、農家や農業についての自己課題をもち、その課題に基づいた事前の探究学習を行ったり、農家での体験活動などを通して、自己課題の解決を図ったりする。

○職場体験（観光産業など）を通じたキャリア学習（2年生対象）

地域の産業である観光業を中心とした様々な職業の体験活動を行い、地域への理解を深めるとともに、働く人たちとの交流を通じて、その生き方に触れる機会とする。

○講演会（生き方に学ぶ）を通じたキャリア学習（全学年対象）

県内都市地域の異業種（先進的なものづくり産業・サービス産業）の職業人・社会人との交流の機会として、体験活動の前後2回の講演会を実施する。講演やその後の質疑応答等を通して、様々な職業人や社会人の生き方を知るとともに、感想をまとめた手紙を作成することにより改めて地域のよさや産業を見直す機会とする。

＜群馬県＞（種別：学校）太田市立太田中学校

推薦理由

太田中学校は「自ら未来を切り拓く生徒の育成」に力点を置き、キャリア教育をベースとした様々な教育活動を展開することを基本理念としている。6年間というゆとりの中で、自らの将来についてじっくりと考えること、社会体験、福祉体験、自然体験、職業体験などを通して将来に向けて自らの目標を明確にもった生徒を育成することを目指している。また、基礎的・汎用的能力に視点をあてて、授業や学校行事、生徒会活動、委員会活動など様々な教育活動を基礎的・汎用的能力と結びつけることにより、教科横断的な教育活動を展開している。令和4年度は、研修主題を「自ら未来を拓く力を身に付けた生徒の育成～特別活動における汎用的能力に着目した見通しと振り返りを通して～」とし、研究を進めている。

【主な取組】

○キャリア教育カレンダーの作成

キャリア教育の手引きを基に、太田中独自の「汎用的能力」を設定し、全教科の単元ごとに、身に付けさせたい「汎用的能力」を位置付けたキャリア教育カレンダーを作成した。

○キャリア教育カレンダーを活用した授業実践

キャリア教育カレンダーを基に作成した各教科の単元計画に沿った授業実践を行った。授業では、「汎用的能力マグネットシート」を活用することで目標が見える化し、生徒が基礎的・汎用的能力について意識して授業に取り組めた。

○見通しと振り返りを位置付けた「キャリア・パスポート」の日常的な活用

特別活動においては、「キャリア・パスポート」を活用して基礎的・汎用的能力に着目した見通しと振り返り

を行っている。事前にどのような基礎的・汎用的能力が身に付くのかなどについて考えさせたり、事後にどのような能力が身に付いたのかなどについて振り返らせたりしている。

＜群馬県＞（種別：学校）群馬県立富岡高等学校

推薦理由

県立富岡高等学校は、1学年の「総合的な探究の時間」の中心的な取組として「課題解決型インターンシップ」を位置付けており、1学年の全生徒が連続する3日間、地元の企業を訪問し、就業体験活動を行うとともに、地域・業種・各企業の抱える課題を発見し、探究的なアプローチで解決を目指す取組を実施している。

「課題解決型インターンシップ」は今年度（令和4年度）が3年目の取組である。富岡市の中核を担う人材を育成する進学校として、また敷地内に七日市藩の歴史的史跡を有する高校として、以前より地域学習を重視した教育プログラム「黒門キャリアプラン」を実施してきた。「黒門キャリアプラン」は、人間力向上プログラム、サクセスシステム（学習支援策）、ドリームプラン（進路意識高揚策）の3本柱から成り、ドリームプランの1学年の目標が「社会と職業について学ぶ」である。新学習指導要領で総合的な学習の時間が総合的な探究の時間になり、一層探究的な学びが重視されるようになることを踏まえ、目標達成のために新たに企画された取組が「課題解決型インターンシップ」である。

「課題解決型インターンシップ」には、生徒が自身の進路選択の一助とする就業体験的役割とともに、地域・業種・各企業が抱える課題と解決策の体験的・探究的な学習という役割がある。その目的を達成するための事前学習・事後学習を綿密に計画し、事前・当日・事後の学習全体を通じて「自分の未来」と「地域の未来」を探究する計画を立案し、実行しようとしていた矢先、実施初年度からコロナ禍に見舞われてしまった。

実施初年度（令和2年度）は年度当初の4月から一斉休校措置がとられ、事前学習を全く実施できないままに希望調査、行き先の振り分けを行い、厳戒態勢の中でインターンシップ3日間と報告会を実施することとなった。実施2年目（令和3年度）は1学期の事前学習は計画通り実施できたものの2学期最初が分散登校になり、やはり学習計画を何度も延期・変更しながら、なんとかインターンシップ3日間と報告会を実施した。現時点でプログラム全体の効果について結論を出すことは難しいが、就業体験的役割においては生徒の進路選択に有効な取組であると、学校評議委員からも高く評価されている。実施3年目（令和4年度）の今年度は、現在までのところ順調に事前学習を消化できている。

一方、初年度、2年目の2年間の取組を検証し、プログラム内容の改善にも努めている。初年度、2年目は「事前に調べ学習や講話等を実施し、地域・業種・各企業が抱える課題を予想して、解決策を探しにインターンシップに参加する」という計画を立てていた。3年目の今年度は課題解決力の更なる向上を図るべく、インターンシップに参加する中で「地域・業種・各企業が抱える課題を発見し、解決策の仮説を立て、検証して提案に至る」という計画に変更して臨んでいる。

＜埼玉県＞（種別：学校）蓮田市立蓮田南小学校

推薦理由

蓮田市教育委員会より令和2・3年度のキャリア教育研究委嘱を受け、研究主題を「学級活動を核としたキャリア教育の推進」～自己を見つめ、夢の実現に向けて努力できる児童の育成～とし、学級活動の授業を中心に研究に取り組んできた。また、児童に身に付けさせたい力を「人とつながる力」「自分を知る力」「課題の乗り越え方を考える力」「未来をよりよくする力」と児童にも分かりやすい言葉で4つの力にまとめ、全ての教育活動でキャリア教育を行うようにしてきた。

1 仮説の設定

①学級活動を核として、発達段階に応じた身に付けさせたい力を明確にし、キャリア形成を図っていくことで、児童一人一人の資質・能力の育成を促すことができるだろう。

②今の自分を知り、“なりたい自分”を想像し、自分の目指す姿に向けて多様な実践を積み重ねていくことで、夢の実現に向けて努力できる児童が育つだろう。

2 具体的な取組

①全学年授業研究（蓮南小スタイルの確立）

- ②自分のよさを知る、活かす活動（互いに認め合える雰囲気構築）
- ③“なりたい自分”を想像する取組（マンドラートで考える）
- ④将来に希望をもつための工夫（ゲストティーチャー等の活用）
- ⑤学びを楽しむ活動（南っ子自主学习コンクール）
- ⑥実践の継続化（強い決意をもち続ける工夫）
- ⑦児童に身に付けさせたい力の明確化（児童にも分かりやすい言葉）
- ⑧系統性のある指導（6年間のつながり）
- ⑨環境整備（掲示物の充実）
- ⑩児童の実態把握（キャリア教育アンケート実施）
- ⑪キャリア・パスポートの活用（各学年での積み重ね、中学校との連携）
- ⑫各教科、各分野との連携（年間指導計画への位置づけ）

3 成果と課題

成果として以下の2点があげられる。

- ①できるようになったことを確認したり、友達から自分のよいところを教えてもらったりすることで、自分のよさに気づき、自信を持てるようになってきた。
 - ②今、学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えることができるようになってきた。
- 今後は、中学校、高等学校とのつながりを明確にし、系統的な指導を工夫していくことが課題である。

<千葉県>（種別：学校）勝浦市立勝浦中学校

推薦理由

「郷育（さといく）プロジェクト」の展開

1 「郷育プロジェクト」のねらい

- (1) 地域への理解・愛着・誇りを育む教育活動を展開し、愛郷心を醸成する。
- (2) 地域、地元企業、関係団体等とのパートナーシップを構築し、地場産業の体験による職業観を育成
- (3) 地域の資源、課題への探究学習を通して、社会参画の意義や持続可能な社会づくりを考える態度や実践力の育成。

2 地域、地元企業、関係団体等とのパートナーシップ構築の経過

- (1) 平成30年度からの実施（平成29年度の市内3中学校の統合を契機）
- (2) 令和2年度、学校教育目標を「ふるさと勝浦を愛し、未来を切り拓く生徒の育成」に変更しキャリア育成に組織的な取組を展開
- (3) キャリア教育、郷育プロジェクトに係る系統性を整理し全体計画を整備
- (4) 地域、産業界、関係団体との連携強化を進め、豊富な学習メニューの提供

3 業務分担による働き方改革等の推進

- ・市教育委員会の地域学校協働活動推進事業の支援を受け、地域、地元企業、関係団体等との連絡調整等は、市教育委員会担当者の業務

4 具体的な教育内容

- (1) 地元産業の歴史、現状と課題を学ぶ（事前・事後学習：地域、関係団体）
- (2) 地元産業の体験等
 - ①漁業：伝統漁法体験（地引網）、漁業体験、魚裁き体験
 - ②農業：水稻学習（田植え、稲刈り）、房総太巻寿司体験、正月飾り製作
 - ③林業：森林整備学習（地拵え、下草刈り、植林）
 - ④商業：勝浦タンタンメン船団による地域起こし講座、調理体験
 - ⑤観光：ビッグひなまつり観光ガイド体験、ライフセービング体験
- (3) 市内施設見学
 - ・市立郷土資料館、県立海の博物館、海中公園、勝浦宇宙通信所、国際武道大学、漁港施設等の見学
- (4) 社会人職業講話
 - ・地元企業、大学教授、プロ野球監督、元オリンピック選手等の講話

(5) 社会参画活動「かつうら元気プロジェクト」の展開

- ・ J R 勝浦駅の階段アート制作、市役所花壇整備等

＜千葉県＞（種別：学校）木更津市立岩根中学校

推薦理由

●地域の団体や施設と連携し、地域の人材を生かしたキャリア教育を毎年実施し、組織的な取組として定着している。

・ 10年以上継続して『青少年育成岩根東地区住民会議』が主催し「地域の先輩に学ぶ会」を行っている。学校でとった生徒アンケートをもとに、公民館が窓口となって地域住民から講師を依頼している。

●多業種に渡る講師を依頼し、多様な職業に対する理解を深め、生徒の職業選択の幅を広げている。

・ 興味関心のある職種についての生徒アンケートを行い、その調査結果をもとに、コンビニ経営、農業、公務員、石油製油所、自動車整備、市議会議員、図書館司書、音楽家等様々な業種の講師を依頼し、生徒の要望に応えた学習内容になっている。

・ 生徒だけでなく講師にも事後アンケートを実施し、成果と課題を検証して次年度の取組に生かしている。

●中学校3年間を通じて系統的な学習を実践している。

1年次「地域の先輩に学ぶ会」

2年次「職業体験学習」

3年次「進路学習」

上記のように段階的な学習を進めることで、生徒の職業に関する視野を広げ、生徒が将来就きたい職業を見据えて卒業後の進路を考えられるよう3年間の見通しを持ったキャリア教育を展開している。

＜千葉県＞（種別：学校）千葉県立長狭高等学校

推薦理由

＜概要＞

平成24年にコミュニティ・スクールに指定され、平成26年に「医療・福祉コース」が設置された。地域の医療機関や福祉施設の協力を得ながら医療・福祉分野における「系統的・継続的なキャリア教育」を推進するとともに、「実践力を養う」ことの出来るプログラムを実施している。

1 医療・福祉プログラム

1学年では「進路決定のために自己理解をする」を目標に各種ガイダンスなどを行っている。併せて、学校設定科目「生活と医療福祉」（1単位）を通じて、看護師や介護士・保育士など、全13職種の医療福祉専門職員から業務や魅力について講義を受ける。仕事に対する価値観の育成や職種の理解を通して、生徒自身のキャリア選択の幅を広げ指導をしている。また2年次からの医療・福祉コースの選択について考える指導を行い、地域の医療・福祉を担う人材の育成に資するキャリア教育を展開している。

2 医療プログラム ※医療コース選択者

(1) 2学年は「進路目標を明確にし、その実現のための準備をする」を目標に分野別ガイダンスなどを行っている。併せて、学校設定科目「医療基礎」（2単位）を通じて、リハビリや放射線技師、管理栄養士などが実際に働く医療現場の見学を全10回行っている。医療従事者を目指す生徒にとって、他職種の理解や自身の適性を学ぶ場となっている。

(2) 3学年は「進路目標を明確にし、学力を充実させ、進路実現のための努力・準備をする」を目標に各種ガイダンス・セミナーなどを行っている。併せて、学校設定科目「医療体験実習」（1単位）を通じて、8月に2日間のシャドー実習を行い、2年時に学んだことを踏まえて、医療現場の一日を体験することで、高い意欲をもって進路決定に向うことができる。また、医療最前線で働く専門職との関わりを通して、仕事に対する姿勢や思いなどの人間力を育成している。

(3) BLS(Basic Life Support)講習

2年生から3年生にかけて行われるBLS講習を受講することで、人命救助に対する意識を高め、技術を習得する。

3 福祉プログラム ※福祉コース選択者

(1) 介護職員初任者研修

2年生から3年生の8月にかけて、介護職員初任者研修課程に関するカリキュラムを受講する。講師については、地域で働く各専門職の方に御協力をいただき、総勢20名を超える現役職員が担当している。介護や医療現場の最新情報、現場独自の話を聞くことで、より高い専門性を身につけた介護人材の育成をしている。

(2) 地域連携事業

資格取得後の3年生は令和4年9月からは、鴨川市介護サービス事業所協議会との連携により介護人材確保冊子の作成を行っている。介護の魅力を発信するために高校生の視点で大人たちと議論を交わしながら作成をしている。

<東京都> (種別：教育委員会) 世田谷区教育委員会

推薦理由

世田谷区教育委員会では、急激に変化する社会の中で、子供一人一人が社会の担い手として自らが課題に向き合い判断して行動し、それぞれが思い描く未来を実現できる人材を育成するため、「キャリア・未来デザイン教育」を重点として教育施策を展開している。この「キャリア・未来デザイン教育」を実現するためのキーワードの一つとして「キャリア教育」を掲げており、令和4年度においては、最重点の教育課題として推進を図っている。特に、児童・生徒が学ぶことや協働することの意義を実感できるように学校や地域等の実態に応じた特色ある教育活動について以下の取組を通じて充実させている。

1 全小・中学校における年間指導計画をもとにした意図的・計画的な指導

区内全小・中学校において、児童・生徒が協働することの意義を実感できるように、児童・生徒一人一人のキャリア形成の実現に関する体験的な活動の充実を図るなど、キャリア教育の全体計画・年間指導計画を作成し、意図的・計画的な指導を行っている。例えば、区内の中学校では、地域の方々と連携し、「働く」ことは自分にとってどのような意味なのか考え、学習を深めていくなど、これからの社会をどのように生きていけばよいのか主体的に考える力を育む活動を行っている。また、区内の小学校では、身近な自然環境について探究的に学びながら、将来、社会の中で課題意識をもち、自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現できる力の育成を図るなど、各学校の特色に合わせた取組を充実させている。

2 「キャリア・未来デザイン教育」カタログの作成と活用

上記1のような、全小・中学校の取組を「キャリア・未来デザイン教育」カタログとしてまとめ、周知を図った。各学校においては、他校の様々な具体的な取組を参考にしながら、次年度の自校の取組の充実に向けてさらに発展させるよう、教育課程に位置付けた。

3 「キャリア・パスポート」の活用

本区では、「キャリア・パスポート」の効果的な活用と充実に向けて、以下の通り、取り組んでいる。

(1) 例示様式の提示

児童・生徒が「キャリア・パスポート」を活用し、「なりたい自分」を思い描き、そのための具体策を考え、行事や学期ごとに振り返ることができるよう研修会を通じて重要性を伝え、全校で必ず取り組むように指導している。そのために必要な項目については、区として統一し、その上で各学校が学校の特色や児童・生徒の課題に応じた様式で作成するように研修会を通じて伝えている。

(2) 効果的な活用方法の紹介

中学校において「キャリア・パスポート」を三者面談で活用することで、生徒の意欲や安心感が高まったり、保護者へ学校での生徒の様子を具体的に伝えることができたりした好事例を研修会で区内全小・中学校のキャリア担当者へ紹介した。

4 キャリア教育の啓発資料等の作成及び周知に向けた取組

キャリア教育における具体的な取組や児童・生徒の様子について、各学校だけでなく、広く保護者や区民等に対し、映像などを用いたりチラシやカタログなどを作成したりし、効果的に周知し、理解を得られるような取組をすすめている。これまでも、区内中学生の活躍を映像にし、ホームページやイベントなどで紹介することで、区民も含め広く周知することができた。

今年度より新たにキャリア教育を推進するための企画事業チームを立ち上げ、外部委託事業者と協力し、啓発

資料を作成し、年間6回程度電子チラシによる広報を予定している。本啓発資料を通して、学校と家庭、地域が一体となって児童・生徒に効果的なキャリア教育を受けさせることを目指している。

5 研究指定校における推進及び発表

区内小・中学校13校を「キャリア・未来デザイン教育」を研究課題とした研究指定校とし、研究をすすめている。指導主事による訪問指導や講師による指導・助言を踏まえた研究指定校における実践事例の情報発信や授業公開を通してキャリア教育について、全区の展開を図っている。

6 キャリア教育推進体制の構築に向けた充実した研修の実施

各学校においてはキャリア教育の推進役を担うキャリア教育担当者（進路指導担当者）を選任するとともに、担当者を対象としたキャリア教育研修を実施することで、資質・向上を図っている。その他、管理職や教務主任、年次研修受講者を対象とした研修においてもキャリア教育に関する研修を取り入れ、理解促進とともに、推進及び資質・向上を図っている。

7 キャリア教育に関する予算措置

- (1) キャリア教育を推進するための外部事業者を含めた企画事業チームの立ち上げ
- (2) 研究奨励費
- (3) 「キャリア・パスポート」予算の増額

＜東京都＞（種別：学校）青梅市立霞台小学校

推薦理由

霞台小学校は、地域の様々な分野の方と協働し、青梅のよさを生かした商品開発や販売活動を通して児童の主体的に学ぼうとする力を育み、優れたカリキュラムを構築した。

【主な取組】

総合的な学習の時間を中心とした起業家教育等

○目的

・郷土青梅を「青梅学」として学びながら青梅のよさを体得するとともに、「青梅を世界にPR」を合言葉に模擬株式会社「霞カンパニー」を設立しその活動を通して、起業家精神を活かし身に付けていくとともに、郷土愛を育む。

・起業家精神を活かし、子ども自らの行動や考えで会社経営を行い、地域の様々な分野の方々と協働し、青梅をPRする商品開発・販売を実施する。起業家教育を通して、総合的な生きる力の育成を図るとともに、将来の青梅を担う人材の育成と持続可能な地域社会の創造を目指す。

○内容

（1）授業の流れ

授業は、市役所・地元企業や諸団体と協力し、青梅の地域の力を活かし、社長選出・会社設立、青梅学、市場調査、データ分析、商品開発、商品評価プレゼンテーション、株式発行、商品発注・社員の役割決め、セールス活動、商品パッキング、販売活動、決算、利益の活用・社会貢献、の流れで起業家教育を年間通して実施する。

（2）授業のポイント

・リーダーの選出

授業のオリエンテーションののち、会社のリーダーの社長と副社長を選挙で選出し、自らリーダーシップをとり会社経営を行い、授業を進める。子どもたちは社員としてそれぞれの役割を果たす。

・商品開発

「青梅学」で学んだ青梅のよさと市場調査のデータ分析をもとに、グループごとに青梅の魅力をもとにした商品開発を進める。

・商品評価会

商品評価プレゼンテーションで外部評価委員に向けて、各グループが自らのよさを真剣にプレゼンテーションし、様々な分野の方々の審査で選ばれた1つだけが商品となる。

・株式発行

商品発注に必要な資金は、保護者・教員へ「霞カンパニー」の取り組みの説明を子ども一人一人が行い、賛同得て出資してくれた方々に株式発行し資金を調達する。本物のお金が動くことで、子どもたちにとってよりリア

ルな取組になり、責任をもって取り組ませることができる。

・販売活動

販売は、青梅マラソン、市役所、地元スーパー、百貨店、ネット販売と様々な場に販路を広げ、子どもたちが多くの方々に商品と販売を通して青梅のよさを発信し、販売する。販売終了後決算を行い、株主へ返金と利益の使い道を考える。

・利益の使い道

利益に関しては「私たちのため、みんなのため、社会のため」の3つの目的に合わせて、子どもたち全員が協議し活用を決める。

(3) 成果

昨年度の児童アンケートでは、意味のある学習だった95%、青梅のことがより理解できた85%、青梅のことがより好きになった75%、コミュニケーション力が身に付いた67%、お金を得ることは大変である95%、の肯定率であった。

今後更に起業家教育を通して、総合的な生きる力を身に付けさせ、郷土を愛する持続可能な青梅を担う人材育成につなげていく。

＜東京都＞（種別：学校）三鷹市立第四中学校

推薦理由

「三鷹教育ビジョン2022（第2次改定）」に定めたキャリア・アントレプレナーシップ教育に係る施策に基づき、教育支援学級（E組）において、校内で収穫されたかりんの実を活用し、商品化を目指す「四中かりんプロジェクト2022」を、地域と連携しながら継続的・発展的に取り組んだ。また、地域団体が主催・運営する「みたかジュニアビレッジ」（中学生を中心とした子どもたちによる農業を題材とした放課後プログラム事業）に協力した。

【「四中かりんプロジェクト2022」の取組】

○内容

・商品化にむけた課題（かりんを使った商品のリサーチ、レシピ調べ、試作計画、収穫、試作品づくり、製造資格・販売資格取得方法、大量生産の方法、資材調達方法、ラベルづくり）について、専門家や地域の方々の協力を得ながら、取り組んだ。

・プロジェクトを通し、お礼状や送り状、電話のかけ方などのソーシャルスキルを身に付けたり、商品化に向けた知識や技術（ムービー作成、アンケートの入力や作成、食品表示や流通・市場価格・衛生法への理解、クラウドファンディング）を体験的に学び、生徒が試行錯誤しながら主体的に取り組んだ。

○経緯

2020年度に、コロナ禍の影響により地域に出ていく活動ができなくなった際に、毎年学校で実っていたかりんの実を活用して、地域の人に喜んでもらえることはできないかと考え、スタートした。1年目は、かりんジャム40セットを返礼品として作成・配布した。2年目は、ジャム製造を外部委託し、100セットを販売した。さらには、学校に咲く金木犀の花の商品化もスタートし、年々発展を続けている。

○連携団体

東京むさし農業協同組合、福祉作業所、三鷹ジャム工房、ジュニアビレッジ、みたかSCサポートネット、三鷹協働センター、三鷹市緑と公園課、シナリオセンター、三鷹中央通り商店街（※三鷹商店街とは、部活動を中心とした地域活性化の活動でも、連携した取組を行っている。）

＜東京都＞（種別：学校）東京都立第一商業高等学校

推薦理由

東京都立第一商業高等学校は全日制ビジネス科の専門学科高校であり、ビジネスの知識や技能を活かし地域に貢献することをスクールミッションに掲げている。また、3年間を通して＜渋谷＞地域を対象として地域探究学習に取り組み、「ビジネスを考え、動かし、変えていくことができる力」の育成と、卒業後もずっと渋谷で活躍したいと思うような人材を育成している。

(1)大学と連携した地域学（リージョナルサイエンス）の実施「渋谷学」

＜渋谷＞を地域を対象として、歴史学・民俗学・地理学・経済学・宗教学など、「渋谷を科学する」を合言葉として國學院大學が展開している「渋谷学」を、同大学研究開発センター渋谷学研究会の協力を得て教科で実施している。

(2)シブヤビトによるコンソーシアムの形成

渋谷区観光協会、渋谷区未来デザイン、シブヤ経済新聞、渋谷のラジオ、渋谷センター街商店街振興組合、東京商工会議所渋谷支所などの渋谷で活動するNP0や団体、國學院大學研究開発センター、産業能率大学、東急株式会社渋谷開発事業部との共同事業体を形成し、地域探究学習を推進している。

(3)地域に根ざしたビジネス教育の実施「東京のビジネス」

1年生では、「調べる力・まとめる力・伝える力」の基礎をつけるため、「働く人にインタビュー」をテーマにLINE株式会社、FC東京、株式会社バンダイや集英社など地域にある企業を取材し、その内容をまとめてプレゼンテーションを行っている。

(4)＜渋谷＞地域の課題解決に取り組む「ビジネスアイデア」

2年生では、学んだ知識と商業科目で身に付けた技術を生かして＜渋谷＞地域の課題解決に取り組んでいる。1学期は地元企業である東急株式会社からの提示される渋谷に関する課題に対する解決策を考え、発表を行う。また、2学期は各自で地域を調べ、各自でビジネスアイデアを考え実行している。

＜東京都＞（種別：学校）お茶の水女子大学附属高等学校

推薦理由

1. 概要

お茶の水女子大学附属高等学校は、明治15年、今から140年前に東京女子師範学校附属高等女学校として創立された日本で最初の高等女学校である。学習における基礎・基本、自主・自律の精神、互いに協力していく態度を身につけることを教育目標とする全9学級（各学年3学級）規模の普通科高校である。本校のキャリア教育の特徴は、「探究力」育成プログラムと、「連携型」キャリア教育にある。平成26年度から平成30年度までの文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業、令和元年度からは、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業を推進する中で、プログラム開発の重要な要素の1つとしてキャリア教育を位置づけ、教育活動全体を通じて「探究力」を中心とする基礎的・汎用的能力を育む教育実践を行ってきた。加えて、地域・企業、大学・他校など多様な外部リソースを活用した「連携型」キャリア教育の実践で、自己と社会の未来を希望を持って描き、その実現のために協働的行動ができる「協働的イノベーター」の育成を目指している。また、筑波大学附属高等学校との連携・共同で、学習指導要領に示された学力の枠組みに準拠したキャリア教育の効果を測る指標を設定、4カ年にわたる縦断調査を実施し、検証と改善のサイクルを回してきた。開発したコンテンツの普及活動にも力を入れ、本学附属学校園教材・論文データベース（<https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/>）での授業案等の発信や普及用冊子の配布などを積極的に行っている。

2. 主な取組

①「探究力」育成プログラム

自己と社会の未来を創造していく上で重要な基盤となる「探究力」を育成するために、教科融合・学際的な取組をSGH事業前から実践してきた。現在はこれをさらに進化させ、将来の未知なる社会でのキャリア形成、リーダーシップに結びつける取組を実践している。

○学校設定科目「生活の科学」（家庭科・1年次必修）

理数科目への苦手意識を持つ女子生徒が多くいる点をふまえ、実生活での要素を自然科学的な観点と社会的な観点の双方から学ぶことで理数科目の重要性を知り、理系の学びや進路に関する興味を喚起することを目的とする。衣料新素材の開発など身近な分野でイノベーションを起こしている企業経営者の講演や講話をもとにした実習等を取り入れ、起業という働き方の選択肢や経営の視点を知ることなども意図して授業を構成。

○学校設定科目「課題研究基礎」（1年次必修）・「課題研究Ⅰ」（2年次必修）

「課題研究基礎」では、観察や実験、データ処理等の探究的な学習に必要な知識・技能を体験的かつ教科融合的な学習を通して身に付けることを目的とする。理科・数学・情報科の教員が連携して授業を行う。「プレゼンテーション論」「データサイエンス論」などの大学教員や実務家を招いた特別講義も取り入れ、キャリア形成に必要な

スキルの基本を学ぶとともに、将来にわたり考える必要のある社会的課題を学ぶことで、社会の中で活躍するイメージを喚起させる。この授業を踏まえて2年次の「課題研究Ⅰ」では、教科の枠組みに捉われず自身が希望し選択した分野の探究活動を行う。生徒自ら企業や大学・研究所・団体等にアポイントを取り、訪問して情報を得るなど、学外に出て行動する意欲と自信を喚起する機会を取り入れている。

○総合的な探究の時間「持続可能な社会の探究」（3年次必修）

探究学習の総まとめとして、環境・生命・教育・国際分野等における「現代社会において答えの出ない問い」に対して、これまで学んだことや経験したことをすべて活用し、論理的根拠に基づきながら進むべき方向を見出すことを目的とする。授業はグループワークを中心に行う。社会に出て直面し、判断をする立場になったときのシミュレーションを半年かけて行い、未知なる問いに対して向き合うための、技能や知識を組み合わせる使う力や態度を育成する。

②「連携型」キャリア教育

1) 地域・企業との連携

上記『探究力』育成プログラムからさらに深化した活動で、地域や企業との連携が顕著な例を以下に挙げる。

○学校とアパレルブランドによるエシカル教育

1年生全員が、家庭科の授業でアフリカンファブリックを使用した商品を企画し、仕様書とサンプル品を製作。120作品の中から選定した2作品をエシカルブランド「CLOUDY」のガーナ自社工場で実際に商品化し、販売する。売り上げの10%は、会社と生徒が話し合い、同社の連携するNPOが設立した学校の給食や教科書代になる。このように企業における商品開発や社会貢献のプロセスを体験的に学ぶ。

○文京区地域の防災とコミュニティの実態把握と改善提示：「課題研究Ⅰ」の地球環境科学領域での課題研究。生徒たちは文京区の自治会役員のインタビューや住民アンケートを実施し、コミュニケーション活性化のための取組アイデアや現存する文京区の防災アプリケーションの改善案を、文京区役所の助言や情報提供をもとに提案。東京大学主催の「チャレンジ!!オープンガバナンス 2021」最終公開審査において、ファイナリストに選出された(<https://www.fz.ocha.ac.jp/fk/report/ssh/2021/d010564.html>)。

2) 高大連携（お茶の水女子大学との連携）

管理機関であるお茶の水女子大学と連携し、探究力の深化と確かな進路選択の支援を目的に以下の取組を行っている。

○「新教養基礎～問いを立てる～」(1年次必修)

総合的な探究の時間を活用した新構想授業。10回にわたり、イノベーターのロールモデルとなる専門分野の異なる大学教員がゲストスピーカーとして登壇。講演者は自らのキャリア形成の軌跡を振り返りながら、幼少期からの興味関心のありかや、研究者をめざす発端、新たな価値創造のきっかけなどを語り、生徒たちは、専門分野の内容や「問い」をたてる視点と共に、生き方を学ぶ。全講演者の授業において、前半終了後に生徒たちへの「問い」が提示され、ディスカッションを行う。ワークシートを活用した授業毎の事前・前半終了後・最終の振り返りと、eポートフォリオを活用した年間で行う受講前・中間・最終振り返りを丁寧に行うことで、探究学習に対する動機づけと、大学進学後に学びたいと思う学問分野や研究テーマに関する自己理解を深める。

○「附属高校生のためのキャリアガイダンス」

お茶の水女子大学の教員が約30の学問分野に関するガイダンスを実施。生徒は興味がある2講座を受講する。

「新教養基礎」で学問に関する視野を広げた後、興味を持つ学問分野について大学教員から直接さらに深い情報を得る機会を持つことで確かな進路選択を支援する。

○校長との進路面談：大学教員でもある校長が希望に応じて、随時進路相談に応じる。

3) 学校間連携（筑波大学附属高等学校との連携）

第三期中期目標（平成28年度～令和3年度）として、国立大学附属学校間の連携による新たなキャリア教育モデルの設計を掲げ、以下の筑波大学附属高等学校との連携教育プログラムを開発・実施している。

○高校生のためのキャリアフォーラム：合同で実施する両校1年生を対象とした進路行事。講演と質疑応答、両校生徒間での交流・協働プログラムを組み合わせる実施。

○高校生のためのキャリア・カフェ：大学等を経て社会人として働く若手卒業生と自由に話せる自主参加の会。年3回程度放課後に開催。ゲストは、起業家や新規事業開発者、コンサルタント、IT開発者など、新時代のイノベーション創出人材を中心に招聘し職業に関する視野を広げるとともに、高校時代の今、取り組むべきことについて考えを深める。

＜東京都＞（種別：学校）瀧野川女子学園中学高等学校

推薦理由

瀧野川女子学園中学高等学校では、もはや一国の中で描くキャリアは存在せず、我が国の若者も日々変わりゆく国際社会の激しい競争の中で、主導的に自分の人生を築いていく為の、キャリア計画を中高生の内に行い、国際競争力を高めるべきと考え、2016年に、中高6年間週1～2単位の独自必修授業「創造性教育」を立ち上げた。激化する国際競争の中で成功を掴み、望む人生を創り上げ、日本を先進国として成長させるために、創造性と起業家精神を育み、具体的なキャリアビジョン、キャリア計画を自ら創り上げるキャリア教育として中高全校体制で行っている。

2000年代以降の世界は、急激に進む技術革新によって、これまで人類が経験したことが無い速さで変化している。国境を超えて、仕事の新陳代謝が非常に速くなっており、日々、多くの仕事が無くなり、それ以上に新たな仕事が生み出されている。そのため、これからの世界で成功を目指す若者には、世界にはまだ無い、新しい価値を自分の手で生み出し、それを広く世界の人々に届けるために、起業や社内ベンチャーなどで、事業を起こす能力が求められている。そのためには、大学、大学院水準の世界に通用する専門能力を土台に、仕事として成立させる為の創造性と起業家精神を備えていることが強く望まれている。

米国スタンフォード大学やMITなど世界の先端大学において、シリコンバレー生まれのデザイン思考などが取り入れられ、創造性や起業家精神を鍛え、事業を自分たちで立ち上げるために教育が拡充されてきた。日本においても、東京工業大学エンジニアリングデザインコースなどでプログラム化が進められ、世界の大学が、より実社会で新しい仕事を作り出せる若者を育てる教育機関へと質的な変化が進められている。2021年度より我が国で始まった大学入試改革の背景には、欧米の先進大学に追いつき追い越すために、2010年代に急激に進んだ、日本の大学教育改革の成果があり、いよいよ大学入試選抜が、欧米の先進大学と同様に、高校生に自身の明確なキャリアビジョンと、具体的なキャリア計画、そのために準備してきた実績を求めるものへと変わった。

一方で、大学の改革に対して、我が国の中高教育はまだ立ち遅れており、大学は将来の仕事に向けての専門能力を身につける場所であるにも関わらず、その大学を選ぶ際に、多くの高校生は、適性や将来成し遂げたいことを自覚しておらず、大学入学後、更には、社会人として就職後のミスマッチが深刻な社会問題になっている。加えて、中高では将来の仕事及び人生と学校教育との関連が解りにくく、勉強する意味や意義を感じられず、勉強への意欲を欠いた生徒が多いことも深刻な問題である。

瀧野川女子学園中学高等学校の創造性教育によるキャリア教育は、創造性と起業家精神を身につけることで、これらの問題を解決し、若者が中高生の内に、自分の仕事を創り出し、日本と世界を活性化させる能力を身につけることを目的としている。この教育を受けた卒業生たちは、2021年度の大学入試改革初年度に、面接主体となり、キャリア計画が主に問われる様になった総合型選抜において、前年比4倍の合格実績を記録するなど、既に先進教育に取り組んできた大学教員より高く評価されている。

本教育は、人格形成にとって重要な中高生の時期に、段階的に、新しい価値、商品、仕事を産み出す力を身につけます。プログラムの中で、デザイン思考、工学的思考、事業化思考等を、チームで手を動かし、試行錯誤を繰り返しながら実践的に学ぶことが特徴的である。

具体的には、中学1年「理想の街を創ろう」では、生徒たちがチームで創造性と起業家精神を発揮するためのデザイン思考を活用して、まだ世の中に存在しない、しかし、対象となる人達が、こういった街に住みたかった、と言わせる理想の街を、実際にフィールドワークやインタビューで取材した上で、生徒たち自らの手で、チームで創り上げる。これをただ頭で考えただけのプレゼンテーションで終わらせるのではなく、ジオラマを製作しアイデアを形にすることで、より具体的な提案へと試行錯誤しながら創り上げる。その間、教諭はファシリテーターに徹して、生徒たちが自らの力で、自由に発想し、思いを形にする考え方や技法を学び、実践し、世の中に提案することで、チームで創造性と起業家精神を発揮する基礎を育む。

中学2年では、中学1年から独自設置の「情報」の授業で学んだプログラミングを活かして、人を喜ばせることを目的とした自動制御の大道芸ロボットをチームで製作する。デザイン思考に加えて先端テクノロジーを道具としてチームで創造性と起業家精神を発揮し、具体的な技術成果物によるユーザーの感動を創り出すことで、将来、先端テクノロジーを利用した起業や新規事業挑戦へのハードルを下げる。

中学3年では、「中学課程修了研究」としてテーマ自由で自分の面白い、凄だと思うことを指導教員と共に1年間研究する。学問とは、個人の関心から始まり、人類を幸せにする普遍的価値を産み出す営みである。古来優れ

た科学技術の発見や人文的な普遍的な発見が、個人の好奇心から導かれたのと同様に、創造性と起業家精神の根本的な源は、一人一人異なる、興味であり、好奇心であり、更に秀でた独創性は、その人ならではの、強いこだわりや情熱から生み出される。生徒が面白い、凄いと思う事柄には、多くの人にとっても共感できる本質的な感動が潜んでいることが多く、これを学術的なトレーニングを積んだ学士及び修士である教諭たちが引き出し、導き、普遍的な価値にまで生徒たちが辿り着くことは、自分のやりたいことと、世の中が望むことを繋ぐ考え方と力を鍛える。全校生徒を前にした7分間のプレゼンテーションで、生徒個人の興味から始まった研究が多くの人を感動させ、世の中をより良くするメッセージとして伝わった原体験は、創造性と起業家精神、そして、日々の授業で鍛えられている学術的な思考とが矛盾するものではなく、世の中を良くすると言う確信を生徒たちにもたらす。

高校1年になると、社会にどのように向き合うかを意識するようになる。この時期に、デザイン思考を実社会に向かって更に高度に使いこなすべく、「商品企画コンペティション」で、チームで3つのプロジェクトに挑む。まず、最初の課題は「通学体験を再デザインせよ」。自分たちが日々当たり前に行っていることを二手に分かれて、お互いに向かって取材し、掘り下げ、相手が、気がついていないけれど、本当は望んでいるインサイト（本音）を掘り出していく。そのインサイトの中から最も興味深いインサイトを解決すべく、チームでアイデアを創出し、コンセプトを打ち立て、提案するストーリーを組み立て、簡易試作品を創り、多くのユーザーに「体験」してもらい、そこからのフィードバックをもとに何周も試行錯誤を続けて、まだこの世にはない、けれど、これが欲しかったと言わせるユーザー体験を設計、創造する。教諭はファシリテーターに徹して生徒たちを導き、生徒たちは自分たちの手で新しい価値の創造を行っていく。こうして体得したデザイン思考を使って、二つ目の課題「チームでコロナに打ち勝つ。学園祭を再デザインせよ」では、実際に学園祭の企画を立案、制作、出展し、お客さまを喜ばせ、そして最終課題「学生生活を再デザインせよ」では、日々の学生生活をより良いものに変える新商品を開発、試作し、試行錯誤を行い、全校生徒の前での商品企画コンペティションに挑む。

高校2年の「事業化実習」では、これまでの創造性教育はもちろん、人生で学んだこと全てを動員して、約15人1チームで資本金を出し合い、デザイン思考を使って模擬企業を設立する。マネジメント、マーケティング、製造、会計の役割分担を行い、学生生活を再デザインするオリジナルの新商品を開発し、自らの手で製作し、宣伝し、学園祭に出店して販売する。その後、修学旅行にてハワイ大学マノアキャンパスでのチャリティーバザーを主催し、売り上げを現地の教育基金に寄付して本業による国際貢献を行っていく。その後、事業を決算し、IR報告書としてまとめて株主総会で会社を解散するまでを自分たちで行う。オリジナリティある全くの新商品をゼロから開発し、2日間の学園祭で、22万円を超える売上を上げ、現金成長率259%を記録した会社も現れる中、生徒たちはチームで働くとは何か、個々の想い、個性と能力を引き出しチームで働くことの凄さ、株式会社とは何か、資本主義の面白さを学ぶ。そして、実社会での起業に通用する創造性と起業家精神を体得する。また、この取組と並行して担任教諭と共に、将来自分がどのような生活を、どのような場所で、どのような仕事をしていき、どのような人生を送りたいかを、1年間かけて、じっくりと考え、キャリアビジョンへと繋げていく。

そして、高校3年「自分の人生を創ろう」では、教諭たちがファシリテーターとなり、これまでの取組を振り返り、生徒一人ひとりが、将来どのようなチームで、どのように生き、何を成し遂げるために働きたいのかのキャリアビジョンを定め、そのために、大学ではどのような専門能力を身につけるべきかを生徒自らが考え、キャリア設計を行い、まさにこれらキャリアビジョンとキャリア計画が問われる面接が主体となった新しい大学入学選抜を勝ち抜き、望む世界水準の専門能力を身につけ、社会人となった時に世界の中で日本を前に進めるリーダーとなる道を生徒たち自身が切り開けるように導く。

<神奈川県> (種別：学校) 神奈川県立相模田名高等学校

推薦理由

地域団体や小・中学校、大学と協働して、生徒が地域と連携した様々な行事や企画に主体的に関わり、地域への理解と愛着を育み、地域から必要とされる人材となるキャリア教育に結び付けて活動している。

キャリア教育実践プログラムでは、学校の教育活動のあらゆる場面がキャリア教育の現場であると捉えて、計画的なキャリア教育を行っている。生徒会活動、学校行事において、生徒、教員が一体となった「チーム田名」で取り組むという視点で展開することで、学校全体の一体感を出すようにし、自己理解の深化と自己受容、自己表現及び他者理解を3年間かけて学べる工夫をしている。

地域連携行事としては、キウイ収穫祭（部活動演技披露等の地域交流）、ラウンジ展（小中高・地域による美術展）、田名リンピック（中高生のスポーツ交流）、ボッチャ交流試合（高校・福祉施設・地域・支援学校の交流）を行い、主体性や計画性・実行力を育み、社会人としての基礎力を向上させている。また、地域支援活動として、絆プロジェクト宿題お助け隊（小学生対象）、あいさつ運動（小中高連携）、地域貢献デー（福祉施設と清掃活動）、小学校連合運動会練習協力、田名こどもセンターお茶会、公民館子ども食堂等の活動に取り組み、他者理解と多様な視点の獲得、コミュニケーション能力や思いやりの心を醸成している。また、インターンシップ、神奈川工科大学との高大連携講座（PC 組み立て・灯りのデザイン・ロボットプログラム制御）を実践し、職業観・勤労観の確立を図っている。特に令和3・4年度は、コンソーシアムサポーターの配置校としても地域のインターンシップ参加校の取りまとめをし、地区全体のキャリア教育活性化に寄与している。

年度末には、校内で**地域連携活動発表会**を行い、全校で活動の成果を共有して次年度に継承し、多年にわたり活動を発展させている。

＜新潟県＞（種別：教育委員会）小千谷市教育委員会

推薦理由

「おぢやしごと未来塾」について

小千谷市では、平成27年度から小千谷市内全中学校の生徒1・2年生を対象に、ふるさと小千谷を牽引する地域の産業や市内の魅力的な企業・事業所を理解し体感する機会として、キャリア教育推進事業「おぢやしごと未来塾」を毎年開催している。

「おぢやしごと未来塾」は、小千谷市、小千谷市教育委員会、市内の2つの高等学校、市内の産業界が連携して実施している。未来塾では、市内の企業（約40社）と県内大学を紹介するブースを設けたり、高校生による職場体験発表や企業代表と高校生によるパネルディスカッションを行ったりするなど、産学官連携によるキャリア教育を推進し、県内から注目を集めている。

今年で8年目となるが、参加した生徒の感想には「小千谷市に素晴らしい企業がたくさんあることが分かって良かった」「将来、小千谷で働きたくなった」「高校生の体験や企業の方の話がたくさん聞けて参考になった」などの声が毎年、寄せられている。また、未来塾での体験が、高校卒業後の就職に繋がっているケースも現れ始めている。

「その他のキャリア教育推進事業」について

小千谷市教育委員会では、全市で取り組む学校教育の指針として「おぢやっ子教育プラン」を定め、各学校で取り組む柱の一つにキャリア教育を位置づけている。市内すべての中学校では、「おぢやっ子教育プラン」を踏まえ、1年生で企業訪問、2年生で職場体験活動、3年生で大学や専門学校等のキャンパス訪問を実施している。

また、2つの中学校では市内の2つの高等学校の教員を招き、出前授業を行っている。この他、地域の方々や学校OBを招き、各先輩の生き方に学ぶ学習会「ようこそ先輩」などにも取り組んでいる。

＜新潟県＞（種別：学校）長岡市立関原中学校

推薦理由

関原中学校は、令和2年度よりキャリア教育を教育課程の中核に据えた教育に取り組んでいる。令和3年度からはパナソニック教育財団特別研究校の指定を受け、「自己の生き方を追求し、よりよい社会を創ろうとする能動的学習者の育成」～知・徳・体を総合的に育むICTを活用したキャリア教育～という研究主題のもと校内研究を推進している。令和4年度は、コロナ禍のなかで取り組んできた教育活動の経験を踏まえ、ICTを活用しながら地域との連携及び協働を重視したキャリア教育に取り組んでいる。

1) 全校で取り組む「自分の生き方を考えるキャリアウィーク」（3日間）

1学年 ⇒ 地域と職業を学ぶ職業講話・職場訪問

事業所の希望に応じて、職業講話・職場訪問を実施した。

2学年 ⇒ 地域に貢献！3日間の職場体験学習：関中・ジョブチャレンジ

学校と保護者、商工会議所（地域）が連携・協働して事業所開拓を行い、学区周辺地域と連携、3日間の職場体験を実施した。実施にあたり、地元の事業所と作成した「のぼり」の設置、学生の職場体験のPRをとおして、町全体を盛り上げた。

3学年 ⇒自らの進路を切り拓く上級学校訪問

2 大学、工業高等専門学校、食育・保育の専門学校で体験活動を行い、自らの進路と真剣に向き合った。

2) 地域PR商品の開発・販売による郷土愛を育む起業体験活動

地域資源である縄文土器に着目し、地域の企業と協働しながら、地域をPRする商品開発に取り組み、地域のよさを再認識する活動を行った。オリジナル商品の開発、販売を通して、会社経営や働くことの意義に気付くなど将来の職業や生き方について理解を深めた。

3) 知・徳・体を総合的に育むICTを活用した「キャリア・パスポート」

学びと生活や社会、職業とのつながりを振り返る「学びのポートフォリオ」や、毎日の生活（起床、就寝、学習時間等）を振り返る「生活理解シート」やICTを用いた「キャリア・パスポート」等を活用することで、一人一人のキャリア発達を促している。

4) ICTを活用したキャリア教育の授業改善とカリキュラム・マネジメント

授業改善にあたっては、ICTを活用しながら学びと生活や社会、職業をつなげる視点と、指導過程において基礎的・汎用的能力を活用する視点の2つに重点を定めた。また、キャリア教育のカリキュラム表の作成にあたっては、学ぶ目的や意義を共有できるよう、「職業との関わり」「他教科との関わり」「SDGsとの関わり」を明記した。

5) 道徳教育の内容項目と関連付けたルーブリック表による基礎的・汎用的能力の評価

キャリア教育で身に付けたい基礎的・汎用的能力を12項目に整理し、すべての教育活動で育成するようにしている。また、それぞれの力を道徳教育の内容項目と関連付け、ルーブリック表を作成し、より客観的な自己評価を促し生徒の自己評価能力の育成を図っている。

<新潟県>（種別：学校）新潟県立柏崎翔洋中等教育学校

推薦理由

柏崎翔洋中等教育学校は、平成29年度から総合的な学習（探究）の時間や特別活動等において、地域に根ざした学びを進める「かしわざき学」を設定し、全学年で系統的な取組を展開している。6年間を通して地域との関わり方を自ら考え、実践、貢献できる人材の育成と、地域の課題から自分の将来を考え、その実現に必要な資質・能力を身に付けることができるよう、地域や外部人材との連携を図り、地域を支える人材として積極的に挑戦する態度を育むキャリア教育を実践している。

【主な取組】

1 「かしわざき学」の学び

「ふるさとへの愛着と誇りをもったグローバル人材の育成」を目標に、「総合的な学習（探究）の時間」を計画的、系統的にデザインして学校・家庭・地域・産業界・行政等と連携し、生徒が学び方やものの考え方、論理的な思考力、表現力を身に付け、主体的に学ぶ意欲を高める取組となっている。

かしわざき発見～地域に学ぶ・地域で学ぶ（1年）

・地域社会で活躍している人から望ましい人間関係づくりについて学び、地域理解に結びつける。

自分発見～職業・人・生き方～（2年）

・地元企業での職場体験や修学旅行をとおして地域と自分を理解する。

提案！私の未来とかしわざき（3年）

・地域住民に取材をする等の生の声のもとに自治体と意見交換を行い、地域課題の解決を目指す。

道徳教育の視点から地域防災の提案（4年）

・中越沖地震の教訓を生かし、他者を思いやる視点から自分たちにできる地域防災について考察する。

発信！かしわざき発見ノベーション（5年）

・世界が目指す未来（SDGs）の視点から、地域の未来を考察する。

学びの成果を進路につなげる（6年）

- ・5年間の探究活動で得た知見や学びをそれぞれの進路実現につなげる。

2 LFE※活動

全校縦割り班(異学年交流)を編成してテーマ別の探究活動に取り組む活動は、他者と協働する力や、上級生のリーダーシップ育成にもつながり、校内の異学年交流が活発になるなど、よりよい人間関係の形成に結びついている。

※LFE:Leadership、Followership、Entrepreneurship

3 「ほんちようマルシェ」への参加

生徒会を中心に青年会議所と協働して行う地元商店街の定期市「ほんちようマルシェ」の企画・参加は、地域の風土や歴史を理解し、地域の一員としての自覚を高めている。

上記の活動を年間を通じて実践し、地域、大学、NPO法人、地元企業等との連携・協力の下、生徒の発達段階に応じたキャリア形成の成果が教科の学習態度にも着実に現れている。

<富山県> (種別: 学校) 滑川市立北加積小学校

推薦理由

様々な教育活動の中で「キャリア・パスポート」を有効に活用し、「振り返り」と「見通し」を繰り返して子供たちが自己の生き方や進路を真剣に考えることができるように工夫している。

キャリア教育で目指す子供像を「社会的・職業的自立に向け、夢や希望をもって努力し、意欲をもって学び続ける子供」とし、Ⅰ「人間関係形成・社会形成能力」Ⅱ「自己理解・自己管理能力」Ⅲ「課題対応能力」Ⅳ「キャリアプランニング能力」の4つの身に付けさせたい力を決め、系統立てた指導計画に基づいた教育活動を進めている。

地域の企業や商店の協力を得て起業体験を行うなど、地域の諸団体と連携して数々の体験活動を行う中で、児童は地域のすばらしさを知り、地域を誇りに思う気持ちを高めている。また、地域が抱える課題やその課題解決のために尽力している大人の存在に気付き、自分たちにできることは何かを考え、追究活動を進めている。調べたことをまとめ、提言という形で地域に発信することで、地域の中の一員として自分の役割と責任を果たすことの大切さを学んでいる。

特別な教育課程である科学の時間や総合的な学習の時間、特別活動など、日常の学校教育活動を通して、目指す子供像の実現を目指して取組を進めている。

【各学年の主な活動内容】

H25 年度から、教育計画に位置付け、特別活動を要としつつ、キャリア発達を促す特徴的な体験活動を生活科と総合的な学習の時間で実践している。

【取組(R1～)】

◎第6学年「なりたい自分探しの旅」

- ・地域のJAや洋菓子店の協力を得て、地産物を利用した食品を市のイベントや市内の商業施設で販売し、地域の良さを広く知ってもらった。(R1・2)
- ・地元放送局で働く先輩をゲストティーチャーとして招き、働くことや夢について話してもらい、卒業前に学校のためにできることを企画し実践した。(R3)

○第5学年「発見! 発信! とやま自然PRプロジェクト」

○第4学年「共に生きる」

○第3学年「目指せ、北加積マスター～北っ子探検隊～」

○第2学年「町たんけん1・2」

○第1学年「見つけたあきであそぼう」等

<富山県> (種別：学校) 砺波市立庄川中学校

推薦理由

四つの基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）をバランスよく育成するため、各学年における具体的な方策を系統付けて明確にし、学校教育活動全体を通じて地域との連携等を生かしながら、組織的、継続的に行っている。

1 「なりたい自分」を目指す系統的なキャリア教育【3年以上継続して実施(R2～)】

自分の将来や生き方について考え、「なりたい自分」を目指して具体的に考え行動する生徒を育成するために、学年の発達段階を踏まえた系統性のある取組を行っている。

1 学年〈自己理解、夢や目標の設定〉

2 学年〈自己啓発、働くことと社会の一員としての自覚〉

3 学年〈自己実現、個に応じた進路の選択〉

(1) 働くことや様々な職業への興味・関心を高めるための取組

……保護者アンケートの実施、冊子の作成 (R3・2 学年 PTA 活動)

(2) 講師派遣事業 講演会の実施 (R2・2 学年)

(3) 企業見学事業 企業見学の実施 (R3・2 学年)

(4) キャリア教育・マナー講座の実施 (R4・2 学年)

(5) 生徒会主催 地域でのボランティア活動「庄中エンジェル」(H15～)

2 「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育【16 年以上継続して実施(H17～)】

総合的な学習の時間のテーマを「ふるさと庄川」に関連付けたものとし、各学年の学習内容を系統的に進めている。PTA の協力で体験活動を実施している。

〈R4 1 学年テーマ〉郷土の宝を再発見！～ふるさと庄川を見つめ、考えよう～

〈R4 2 学年テーマ〉未来社会で働くとは～郷土で生きる人々から学び、考えよう～

〈R4 3 学年テーマ〉郷土のために私達ができること～ふるさと庄川を盛り上げよう～

(1) 地元伝統工芸の挽物木地体験 (R4・1 学年 PTA 活動)

(2) 他市の伝統工芸見学 「能作」での見学と鋳物体験 (R4・1 学年)

(3) 働くこと、職業について話を聞く「親子座談会」の実施 (R4・2 学年 PTA 活動)

(4) 庄川峡遊覧船乗船体験、鮎釣り体験の実施 (R4・3 学年 PTA 活動)

3 「ふるさと学び教室」におけるキャリア教育【16 年以上継続して実施(H17～)】

H17.12～R1.4「庄川つ子育成会」、R1.5～「庄川地域教育支援協議会」と連携し地域の人材を活用した「ふるさと学び教室」を実施している。地域の工場見学や体験学習の他、出前授業として座談会を行っている。

(1) 地域内職場見学 (R2、R3・2 学年)

(2) ふるさと学び講演会 (R2・1 学年)

(3) ふるさと学び座談会 (R2、R4・3 学年)

<富山県> (種別：学校) 富山県立桜井高等学校

推薦理由

普通科、土木科、生活環境科からなる総合制高校として、各科が自治体や企業等と連携した地域課題の解決に取り組み、学校教育活動全体を通してキャリア形成に向けた学びを深めている。

1. 職場見学・職場体験・インターンシップ

普通科では、令和3年度から地元企業での職場体験活動等を実施するほか、1 学年全員が福祉・介護体験や保育実習を行うなど、進学後の将来を見通したキャリア教育を積極的に行っている。

土木科・生活環境科では、関連企業等でのインターンシップを実施している。特に、生活環境科では、新型コロナウイルスの感染対策を行いながら、赤ちゃんふれあい体験や保育体験を行うとともに、福祉教育の推進に熱心な高等学校として、本県社会福祉協議会より「高校生介護等体験特別事業」の指定を受け（令和3年度～令和5年度）、高齢者や障害者の介護等体験を行うなど、社会での実践力や将来の自己のあり方・生き方を主体的に考える力を育んでいる。

2. 地域と連携した取組や地域課題解決に向けた取組

普通科では、「黒部をHappy にしようプロジェクト」と題して、1 学年が地元の自治体等と連携し、観光、食、福祉など様々な視点から地域の活性化を図る取組を行った。

土木科では、地域の企業等と連携し、職業人等を招聘しての出前講座等を積極的に行い、専門技術の向上や地域人材の育成を図っている。

生活環境科では、地域と共に学ぶというコンセプトのもと、学習全般にわたって地域の人的・物的資源を生かしながら、生活産業のスペシャリストとして活躍できる人材を育てている。商品開発では、地元の飲食店と連携して廃棄食材を用いたメニューの考案・限定販売を行うほか、3 年前には、県産食材を活用した「お好み焼き甲子園 in 富山」で優勝を果たし、レシピの紹介や食育推進、地元食材の魅力等をテレビやラジオで発信した。また持続可能な社会に向けた学習を重視し、一昨年には、地域のエシカル消費の取組について富山県環境保健衛生大会で発表するとともに、富山県食品ロス・食品廃棄物削減優良活動表彰を受賞した。

【ホームページ】 <https://www.sakurai-h.tym.ed.jp>

＜石川県＞（種別：団体）石川県高等学校定時制通信制教育振興会

推薦理由

【本会の目的】

石川県下の各高等学校定時制及び通信制教育振興会相互の連絡を密にし、相協力して、定時制教育及び通信制教育の振興向上を図ること。

【キャリア教育の充実に係る取組】

①定時制通信制高校生を対象とした企業ガイダンスの実施

- ・県が実施している「高校生を対象とした企業ガイダンス」は、参加生徒の大半が全日制高校の生徒であるため、定時制通信制の生徒が参加しやすくなるように、平成29年より対象を限定した企業ガイダンスを企画、実施している。
- ・令和3年度から、いしかわ就職・定住総合サポートセンター（ILAC）と連携し、卒業生の進路状況やメッセージを載せたリーフレットを活用して企業に対する出展依頼や開催の周知を積極的に行ったことにより、出展企業が増加し、これまで金沢近郊が中心であった出展企業が県内全域から集まるようになった。加えて、ガイダンスの内容を全学年対象としたことで、県内の定時制通信制すべての高校から多くの生徒が参加するようになり、キャリア教育の支援の充実と強化につながった。

②石川県定通教育研究会への支援

- ・定時制通信制の各校が、就労支援に関する取組など自校の現状や課題等について報告し、協議や情報共有を行う会の運営費の補助を行っている。また、振興会の役員は各校の取組発表に対する助言なども行っている。

③石川県定通生徒生活体験発表会『青春のこだま』主催

- ・県内の定時制通信制高校の生徒が、学校生活を通して感じたこと、学んだ体験を発表し、人々に共感と学校生活や将来への励ましを与えることを目的として実施している。最優秀者は全国大会への代表者となる。

④その他の就労促進対策支援・補助

- ・定時制高校が就労支援施設や事業所の見学、講演会を実施するための補助を行っている。各高校は、学年に応じて職業適性診断や職業疑似体験、求人情報の検索、マナー講話などの内容で実施できるため、職業観、勤労観の育成につながっている。

＜福井県＞（種別：教育委員会）鯖江市教育委員会

推薦理由

鯖江市教育委員会学校教育課は、児童生徒の勤労観・職業観の育成を図るため、地場産業を柱としたキャリア教育を、小学校から継続して取り組んでいる。

【取組】

1. 「産業を体験し、理解を深める事業」の実施

市内の三大地場産業（眼鏡、漆器、繊維）への理解を深め、興味を高めることをねらいとし、市内の児童全員が小学校3年生から5年生の間に、地場産業を2つ選択してものづくりを体験する事業を、10年以上実施している。コロナ禍においては、体験先の施設を訪問せず、市教委が各学校に講師を派遣している。

2. コロナ禍で実施できない職場体験学習等の代替事業を、市商工会議所と連携して実施

中学校1年生は、例年、地場の職業について学ぶ場として「さばえものづくり博覧会」に参加してきた。感染拡大による博覧会開催中止のため、代替として、市商工会議所が中心となり、市JK課（地元の女子高校生による市民協働推進プロジェクト）がリポーターを務めWeb上で工場見学が体験できる動画を作成。全中学校において、この動画を活用したキャリア教育を実施している。

中学校2年生は、職場体験学習を実施してきたが、感染拡大で受け入れが困難になったことから、代替として、令和2年度に「起業セミナー」を開催した。企業コンサルタントを全中学校に派遣し、生徒自身が社長になったつもりで将来のビジョンを考えるセミナーを実施した。また、令和3年度には「起業セミナー」に合わせて「マナー講習」を開催した。生徒は、立ち方や座り方、名刺交換の仕方などのマナー研修を行い、社会人としての心構えや立ち振る舞いを学んだ。

<福井県>（種別：学校）福井県立若狭高等学校

推薦理由

福井県立若狭高等学校は、創立120年を超える伝統校であり、『「異質のものに対する理解と寛容の精神」を養い教養豊かな社会人の育成を目指すこと』を教育目標として掲げている。地元貢献できる人材の育成を目指し、地元と連携した実践を行っている。

【取組】

・1～3年生 「地域課題の解決」

全学年全学科で学校設定科目「探究」において地元企業や自治体と連携し、地域課題の解決に取り組んでいる。3年生3名は小浜市御食国大使を拝命し、食のまち小浜の魅力を市内外に伝える活動に取り組んでいる。また、海洋科学科では地元企業と連携し、地域課題の解決に取り組んでおり、地域企業と連携した宇宙鯖缶、三方五湖の鮎缶製造のほか、海で回収したプラスチックごみを活用した箸などを商品化している。（地元企業と連携した商品開発）

・2年生（海洋科学科）「就業体験」

海洋科学科が5日程度の就業体験を行っている。

・「就職志望者対象研修会」の実施

地域を支える人材育成を目指し、就職志望者の課外授業や内定者研修で、地元企業人を講師に招き「地域を支えること」について考える研修会を行っている。

<福井県>（種別：学校）福井県立丸岡高等学校

推薦理由

福井県立丸岡高等学校は、創立110年を数える伝統校であり、地元への誇りや愛着を涵養し、自己肯定感・自己有用感の高い生徒を育成することを教育目標として掲げている。文部科学省研究指定「地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型」の取り組みを発展させたカリキュラムや教育活動全体を通して、生徒が自らの可能性や変化を発見していく実践を行っている。

【取組】

・1学年「地元企業調べ」

地元の企業に取材に行き、紹介ポスターを作成、プレゼンテーションを実施している。

・1学年「地域の担い手づくりプログラム」

「あわら坂井ふるさと創造推進協議会（アズAS）」と協力して、地元企業約30社と小グループに分かれた活動を行っている。

・1学年「キャリア教室」

多様な職種の社会人（主に卒業生）を招き、職業講話を行っている。

・1、2年学年「職業体験講座」

約20職種の講師を招き、関心のある講座を受講する。

・2学年「UIターンパネルディスカッションセミナー」

「あわら坂井ふさと創造推進協議会（アズAS）」と協力して、福井大学のキャリアカウンセラーおよびUIターンした地元企業の方とのパネルディスカッションを行っている。

・2、3学年「地域活性化に関する探究活動」

「総合的な探究の時間」において、各自が地域活性化のための探究活動を行っている。3年次には提案にとどまらず実践につなげる「地域活性化に関する探究活動」に取り組んでいる。

＜山梨県＞（種別：学校）山梨県立北杜高等学校

推薦理由

1 取組の概要

山梨県立北杜高等学校は県の最北に位置し、大正5年に開校した「北巨摩郡立農学校」を前身とした、創立107年目を迎える県内有数の歴史と伝統を持つ高校である。平成13年に総合学科と普通科を併置した北杜高校が誕生し現在に至る。

平成28年、北杜市と北杜高校の包括的かつ永続的な連携により、豊かで活力ある地域社会の形成とふるさとを愛する豊かな人づくりを図り、相互の発展を目指すことを目的とした「北杜市と山梨県立北杜高等学校との包括連携に関する協定書」が取り交わされ、より実践的なキャリア教育活動が行われている。

2 取組内容

平成30年度から、包括連携協定の取組みの一つとして、北杜市及び北杜高校、独立行政法人中小企業基盤整備機構関東本部（平成30年度のみ）が連携し、高校生と中小企業者による地域資源を活かした共同商品の開発、同商品の都内プロモーション・地元常設販売に取り組む「住み続けられるまちづくり推進プロジェクト」（名称「食杜北杜」（しょくとほくと））を実施している。持続可能な開発目標（SDGs）の「目標11住み続けられるまちづくりを」の達成を視野に入れ、これまで地元の16事業者と協力し64商品を開発している。販売実習、広報活動、実践発表会等を通じ、広く研究成果の周知に努めており、県内高等学校のキャリア教育の充実に寄与している。

3 まとめ・課題等

・北杜市役所、地元事業者、北杜高校の三者により、社会のニーズやブランド調査、材料確保、調理方法等、年10回程度の商品開発ワークショップを実施し、商品の流通、販売実習、インターネット販売など、授業で学んできた知識や技術を生かした実践的な学びの場となっている。

・「食杜北杜」は総合学科総合情報ビジネス系列の取組みとして始まったが、現在はフェスタ杜のきらめき（北杜高校収穫祭）などを通じて、総合学科の他系列や普通科への普及も進んでいる。生徒が地域や課題を知ることと、地元北杜市や山梨県に誇りを感じる機会となっており、将来の進路選択に大いに役だっている。

・事業の現状と課題を分析し計画を見直したり、「総合的な探究の時間」の地域課題解決と結びつけ研究を深めたりするなど、キャリア教育の一層の充実を図っている。

【学校ホームページ】<http://www.hokutoh.kai.ed.jp/>

＜山梨県＞（種別：団体）富士川町立増穂中学校PTA

推薦理由

1 取組の概要

子供たちが自立した社会人となるための基盤をつくるためには、学校の努力だけではなく、子供たちにかかわる家庭・地域が学校と連携して、同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。増穂中学校では、2005年度より、働く親の背中から将来の在り方や生き方を考えさせることを目的に「親の背中出前講座」を実施し、本年度で16回目を迎えている。

例年、その年に在籍している生徒の保護者を講師として10前後の講座が開設される。取組は、PTAと教職員が協働する中で、組織的・計画的な取組となっており、キャリア教育の充実につながっている。

2 取組内容

「親の背中出前講座」は、「増穂中学校PTA親の背中実行委員会」が主体となり実施している。実際の出前講座は、講師になる保護者が、それぞれの職業の仕事内容の説明から始まり、働くことで得られる喜び等を通して自身の職業観や人生観についても語る内容となっている。令和4年度も6月に、保健師、保育士、ジャグラー、郵便局員等、多業種にわたる11人の保護者による講座が企画され、全学級（11学級）において授業が実施された。

受講後の生徒の感想には、様々な職種の方々がそれぞれの役割を果たすことで社会が成り立っていること、また、自分の特徴を生かし社会との関わりの中で役割を果たすことのできることの価値についての言及が見られた。

コロナ禍により、昨年一昨年は、実施できなかったが、17年前より続く伝統的な行事として受け継がれており、PTAの学校への積極的な関わりが効果を上げている。

3 まとめ

本取組は、学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」につながる実践であり、生徒の職業理解を深め、キャリア形成を支援する上で大きな役割を果たしている。また、生徒にとって最も身近な存在である地域の大人との関わりにより、生徒の地域理解を促すことにもつながっている。

<長野県>（種別：学校）長野県須坂創成高等学校

推薦理由

長野県須坂創成高等学校は、平成27年に須坂園芸高等学校と須坂商業高等学校を統合して開校した総合技術高校であり、農業科、商業科、創造工学科を設置している。

キャリア教育の指導方針として、生徒がつながりを意識できるようになることを重視しており、1年次の学習と2年次・3年次の学習のつながり、インターンシップの事前・事後指導とのつながり、学んでいることと社会とのつながり、自分自身と家庭や地域社会とのつながりなどを体験できるようにしている。これらの学習や体験を通して、生徒が仕事や社会で必要となる力に気づき、自己の勤労観や職業観を形成するよう促している。

具体的には、農・工・商の3学科を有することを生かし、教育課程では、1年次に学校設定科目「産業基礎」を設置し、2年次・3年次には他学科の科目を学べるようにしている。「産業基礎」では学校の教育目標を示し、3年間の学びを経てどのようにその目標を達成していくのかという道筋を明らかにし、農・工・商の枠を超えて学ぶ意義を教え、産業人としての基礎力を養っている。商業科の実習の場である「創成フェア」は、農業科と創造工学科と連携し実践的な学びの場として10月に開催している。

創造工学科の3年生は地元企業・須坂市・学校が連携したデュアルシステムによってインターンシップを週に1回、10週間ほどにわたり行っている。特に事後指導を重視し、事前に各自が設定した目標課題を達成することができたか、インターンシップを通してどのような力を身につけることができたかを振り返り、報告会や企業担当者との懇談会で他者と共有している。生徒のアンケートの回答によれば、7割ほどの生徒が企業での研修を通して、学ぶことの必要性、働くことの厳しさと楽しさなどを感じ、進路選択に対して前向きになり、満足して学校へ帰っていることがわかる。

学年を超えて学びをつなげる縦のつながり、校内での学科を超えた横のつながり、校外での企業との横のつながりをつくっている。

<長野県>（種別：団体）塩尻市立桔梗小学校コミュニティ・スクール

推薦理由

開校35年を迎える当校校区は商工業施設が市内他校と比較し多いが、歴史的教育資源は少ない。平成29年度に策定された「育てたい子供の姿」は次の3点である。これは地域学校協働本部の総会においても提示され、共有された。

- 心身ともに健やかで明るい子供〈自尊感情の育成、健康的に生きる力の育成〉
- 笑顔があふれ、心が優しい子供〈前向きな生き方・人間関係構築力の育成〉

○憧れを持ち、夢に向かう子供〈より高い生き方を求め行動する力の育成〉

この3点の実現を目指し、学校の可能性を広げ、新たな保護者・地域とのつながりを開拓し、みんなで創り上げる過程を楽しむことを願い「H29CSの起爆剤」と位置付けて取組をスタートさせたのが「キッズお仕事チャレンジ」である。CS組織内のキャリア教育支援部やPTAなどで構成される「実行委員会」が企画運営している。

◆第1回目：平成29（2017）年度 10月7日（土）開催。全17講座。参加児童数は約200人（全学年希望参加）

＊校内に各講座でブースを設置し、1講座25分で一人3講座選択。講師は地域の方・保護者・塩尻商工会議所青年部の方等。講話と演習を組み合わせ、講座の最後に「仕事の意義と学校生活との結びつき」を話し締めくくりにした。

◆第2回目：平成30（2018）年度 「キッズお仕事チャレンジの深化・拡充」がテーマ。17講座開設し10月13日（土）開催。参加者約160名。当校CSの中核活動となる。

＊参加者の声「講師をやった私自身が楽しかった。」

＊学校の声：誇りをもって仕事をされている大人と接することを通して、子供たちが将来への夢や憧れを抱く良い機会となっている。地域の方とのふれ合いにより、自分たちの街のことを知り、自分たちの街を誇りに思えるというCSのねらいに迫る活動として定着しつつある。

◆第3回目：令和元（2019）年度 台風19号により延期。12月24日の平日開催に変更。

＊変更の際はは度度も実行委員会で協議を重ね、期日・時間・講座数を決め、本番を迎える。

◆第4回目：令和2（2020）年度 CS活動を「コロナ禍でもできること」にシフトする。

＊「スタンプラリー」：校内各所に地域の事業所・施設・商店を紹介するポスターを展示。各展示場所には模様が異なるスタンプを用意。児童は所定の用紙に押していき、マスが埋まったら校長先生から記念品をいただける、といった工夫を施す。

＊新体育館建設現場見学会の実施：市の新体育館が校区内で建設中のため、見学会を企画し、班別（希望者）で実施した。

◆第5回目：令和3（2021）年度 講座の場所を校内から校外に変更。「ウォークラリー」という名称で実施。

＊「（コロナ感染対策で）校内がだめなら、校外で実施すればよい」と実行委員会で結論付け、校区で活動可能な事業所・施設・商店を探し、内容等を依頼。当日は当校体育館を発着点とし、午前中の半日をかけ班ごと設定されたコースに沿って事業所等を見学した。見学の引率は、地域・学校・PTAのボランティアで行った。CS会長の声「準備段階から今日までの活動を通して、我々スタッフの方が今まで知らなかった地域の人をよく知る素晴らしい勉強になった。」後日、CS役員と校長とで受け入れ先を回り、感謝状を渡して歩いた。

○その他地域と学校との協働による活動（教育課程内活動）

＊チャレンジクラブ（4～6年生で縦割り）

地域の方が講師となり、4～6年生縦割りのクラブ活動を行っている。（太鼓、バドミントン、手芸、フラワーアレンジ、サッカー、パソコン、ダンスなど）

＊高校（塩尻志学館高校）との連携による活動

野菜の栽培活動を通じた交流活動を行っている。高校の校長は当CS学校運営協議会の委員。

＊その他キャリア教育に関連するCS活動

- ・様々な季節行事の支援（鯉のぼりの設置、七夕の竹準備、クリスマスツリーの設置・装飾）
- ・読み聞かせ活動・安心安全確保（通学路の見守り、交通安全教室支援、水泳学習支援、地域探検引率など）
- ・学校施設・環境整備（樹木の剪定、高枝・枯れ枝の除去、放課後の廊下等の消毒作業、本の消毒など）

○活動の広がり

当校の「キッズお仕事チャレンジ」と「チャレンジクラブ」等CS活動は、当校児童が進学する広陵中の活動にもつながり、「カリヨンタイム」（総合的な学習の時間を活用した課題・テーマ別ふるさと学習）として発展・展開され、成果は地域に発信されている。

また、塩尻志学館高校との連携による更なる活動も見通しながら活動の深化・拡充が計画されている。

以上のように、CSを基盤に「育みたい子供の姿、資質・能力」を地域と学校とが共有し、協働して取り組む当CS活動は、キャリア教育を通して育成すべき「基礎的・汎用的能力」の育成に密接に結びついている。

＜岐阜県＞（種別：学校）揖斐川町立谷汲中学校

推薦理由

【商品開発、事業アイデアの検討・実施及び店舗での販売体験】

(1) 地元起業家との連携によるオリジナル商品の開発と製造販売ノウハウの習得

現在総合的な学習の時間で取り組んでいる、「地域の魅力を発見・発信する」という学習において、地域の特産品を使ったオリジナル商品の開発と販売を行いたいというグループが、地元で起業しオリジナルの「岐阜コーラ」を製造販売している起業家の方と提携し、商品開発を進めている。具体的には、地域で採れる素材をミックスしたオリジナル岐阜コーラと、同じく地域で採れる素材を使ったオリジナルジャム作りを進めている。

(2) 地域で開催される「フリーマーケット」販売体験の実施

地域で開催される大規模フリーマーケットで、中学生用のブースを用意してもらい、自分たちで集めた不要品や、総合的な学習の時間でお世話になっている企業の商品、地域の物産品などの提供を受け、店舗形式による販売体験を行った。値段付けや配置レイアウト、PRポスターの作成など、より多くの商品が売れる工夫について考えるとともに、お客さんとのコミュニケーションの取り方などについて学ぶことができた。

【職場体験及び職業講話の実施によるキャリア教育の推進】

(1) 中学2年生による教員体験（授業実施体験）

コロナ禍により、各種事業所での職場体験ができない状況が続いている。そんな中、生徒にとって最も身近な職業である「教員」の体験ができるプログラムを開発した。具体的には、2年生生徒が、校区の小学校に出向いて算数の授業を行うというものである。4つのグループに分かれ、小学2～5年生までの各学年で、算数の授業を1時間行う。小学校にも協力を仰ぎ、教材の選定をしてもらい、決まった教材をどのように授業にしていけるか、教育実習生のレベルで中学生が教材研究を行い、授業案を作成した。何度も模擬授業を繰り返しながら発問を吟味し、板書方法も考えた。教員志願者が減少している中、教員という職業の魅力を感じてもらえる機会とするとともに、働くことの大変さややりがいを実感できるよい体験となった。

(2) 職業講話の実施

いろいろな業種の方から話を聞くことができるように4つの業種の方を学校に招き、自分の興味のあるブースで話を聞いたり、体験をさせてもらったりした。

＜岐阜県＞（種別：学校）郡上市立郡上東中学校

推薦理由

郡上東中学校は岐阜県中央部に位置する山間の小規模中学校である。今年度の全校生徒は40名で、今後も生徒数の減少が予想されている。地域の行政機関や団体と連携して、ふるさと郡上の歴史や伝統を学び、将来に生かす「郡上学」を通してキャリア教育の充実に取り組んでいる。

（1）系統的に学ぶ体験学習

1年次【自然の中で生きる】ふるさと研修での体験活動や地域自然に関わる学習の調査や情報収集、分析を通して、自分たちの地域の環境、文化、歴史について考える。

- ふるさと研修（1泊2日で郡上市内の文化・景観の見学・体験）
- 植林体験（地区の共有林についての座学と植林体験）
- マイ下駄づくり（郡上おどりで使う下駄を作る体験）
- 鮎の友釣り体験（地元漁協等と連携「和良鮎」ブランドの保護）

2年次【地域に生きる】若狭研修での体験活動や地域での職場体験学習をもとに、さまざまな職業や人の生き方を考える。また、地域の現状に目を向け、地域や人々とともに生きる方法について考える。

- 漁村体験（1泊2日）
- 職場体験（地元の事業所での体験）

3年次【未来をともに生きる】市の現状や修学旅行をもとに、地域の特徴や課題を考えることを通して、地域のために自分たちができることを提案し、行動する。また、自分の将来の生き方を考える。

- Good 郡上プロジェクト（まちづくりの企画・提案）
- 修学旅行（2泊3日 まちづくりについて情報収集）

○ 卒業プロジェクト（地域貢献活動の企画）

（２）縦割りによるふるさと学習

陣屋太鼓・神楽笛・お囃子・陶芸・茶道など、地域の伝統文化を受け継ぎ、各地の祭礼等で披露している。

❖関係機関・団体

郡上市和良振興事務所、和良おこし協議会、和良川漁協、和良鮎を守る会、和良森林組合、和良町林業経営研究クラブ、郡上市役所観光課、郡上市市民協働センター、和良町民センター、西和良公民館

【成果】

地域との関わりによって実現した多様な体験活動を通して、自分たちの住む地域の現状を理解し、まちづくりの将来について考えることを通して、これからどう生きるかを具体的に考えることにつながった。

＜岐阜県＞（種別：団体）大垣市PTA連合会

推薦理由

大垣市内の小学校・中学校では、これまでに学校外から講師を招き、「キャリア講演会」や職業体験活動が授業に取り入れられ、児童生徒が職業について触れる機会が設けられていた。しかし、令和２年以降、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、外部講師を招き入れることや職場体験が困難な状況になってきた。

そこで、大垣市PTA連合会では、令和２年度から、児童生徒の職業観を育み、進路について考える機会として活用してもらうためのキャリア教育動画「人生の選択～夢へのトビラ～キミはどう生きる」を制作してきた。地元で活躍する社会人に、体験談を交えながらインタビューに応じてもらう動画を視聴することで、児童生徒たちが、よりリアルな現実社会を知り、「生き方」について考える機会としたいと考えた。

【動画内容】

出演者に「学生時代に刺激を受けた人」「学生時代にやっておけばよかったと思うこと」「いま社会が求めている人材とは」「将来について考え出したきっかけ」などをインタビューする。

（動画尺 一人約７分～１０分程度）

【出演者】地元で活躍する社会人

（令和２年度２２名 令和３年度７名）

【動画視聴方法】

一人一人の動画と全編収録した総集編のYouTubeアドレス、QRコードを各学校に配付した。また、市内の学校のみがアクセスできるネットワーク内にデータを保存し、市内すべての教員が共有できるようにした。

＜静岡県＞（種別：教育委員会）牧之原市教育委員会

推薦理由

１ 牧之原市における「起郷家教育」の背景と課題

牧之原市では、市内の８小学校２中学校が、2030年度に２校の義務教育学校に再編することが計画され、新しい移転候補地が計画されている。

このような状況の中、学校教育内容の充実と地域の維持発展という課題に対応するため、牧之原市第３次総合計画（令和５～12年度）において、「起郷家（きごうか）教育の推進」を核とするキャリア教育の推進を掲げ、学校・地域・行政が一体となって取り組んでいる。「起郷家教育」とは、「起郷家＝郷に学び、将来を見通し、自ら行動を起こす」人材を育成するために体系立てられた、牧之原市版キャリア教育の総称である。

２「起郷家教育」の体系と推進体制

牧之原市「起郷家教育」においては、義務教育９年間で育成すべき資質・能力を発達段階に応じて系統的に整理している。さらに、小学校５年から中学校３年までの５年間においては「地域の再発見」（小５）、「命と防災」（小６～中１前期）、「社会の仕組みと勤労」（中１後期～中３）、の３つのテーマについてプロジェクト型学習（PBL）を計画し、これを核としてキャリア教育を展開することとしている。

PBLのプログラムの開発や実施については、令和３年度から「キャリア教育プロジェクト部会」を立ち上げ、静岡大学教職大学院と連携体制を構築し、理論的バックボーンを確立しながら推進している。これら３つのPBLの内容は、児童生徒の体験的な学びに重点を置き、学習指導要領で育成する資質・能力と共に今求められてい

る基礎的・汎用的能力を養うものである。同時に、地域住民の学校教育活動への参画を高めつつ、教員の負担を軽減するための取組が進められている。

3 各プログラムの開発・実施状況

「地域の再発見」については、「アースランチ創作」が3年目を迎える。令和4年度は、市内全9小学校が参加し、5年生を中心に他の学年もこれに協力して実践されている。

「命と防災」については、令和4年度から開発中であり、小学校から中学校を一貫する学びで、防災教育としての自助・共助の視点に加え、命の大切さと学力の向上の視点を併せ持つプログラムを検討している。

「社会の仕組みと勤労」については、中学校1年生の後半から3年生の前半にかけて行われる「自分の仕事と価値」プログラムが開発され、既に市内の各中学校で試行に入っている。プログラムの中身は、一部の授業や教材作成において学校間で実践を共有し、かつ外部人材を効果的に活用し、教員の負担軽減を図るものである。

以上、核となる3つのプログラムでの学びを通して、将来の夢や職業選択に留まらず、新たにモノ・ことを創り出し、幸せに生き抜いていくための新たな時代のキャリア教育を実施している。

<愛知県> (種別：教育委員会) 東海市教育委員会

推薦理由

東海市教育委員会では、実際に見て、話を聞き、触れ合うことで、心を揺さぶり、感動することを通じたキャリア形成を促すことを目指し、姉妹都市交流事業や企業・大学連携、職業講話などの体験活動を重視したキャリア教育に取り組んでいる。

1 自己管理能力の育成

姉妹都市交流事業では、郷土の偉人である細井平洲先生と、師弟関係で結ばれた上杉鷹山公のゆかりの地として山形県米沢市を市内小学5年生の代表児童24名及び中学3年生全員が訪問し、先人の教えや250年以上続く平洲先生と鷹山公との心のつながりの深さを学んでいる。沖縄県沖縄市との交流では、市内中学2年生全員が訪問し、沖縄市内の中学生との文化交流等をおこなっている。さらに、渡嘉敷島の集団自決碑や平和祈念公園などを見学し平和についての考えを深めている。岩手県釜石市との交流では、市内小学6年生の代表児童24名が訪問し、いのちをつなぐ未来館の見学や津波避難体験により防災意識の向上や命の大切さを学んでいる。このような体験活動を通して、自身の考えを広げ、自己理解、自己管理能力の育成に努めている。

2 人間関係形成・社会形成能力の育成

企業・大学連携では、日本製鉄株式会社名古屋製鉄所による小学3年生対象の出前授業の実施や、愛知製鋼陸上競技部など、市のふるさと大使である企業スポーツ部による小学生へのスポーツ出前授業等を行い、地域産業で活躍する人々から様々なことを学んでいる。また、不登校傾向にある児童生徒への進路講演会「自立と未来を語る会」や、適応指導教室における宿泊行事「青空教室」において、近隣大学の学生から話を聞いたり、一緒に過ごしたりする経験を通して、身近な大人と触れ合う中で人間関係形成・社会形成能力の育成に努めている。

3 キャリアプランニング能力の育成

さらに、全中学校において「社会人講話」や「教師の講話」、「マナー講座」等、多岐に亘る職業講話を実施し、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解といったキャリアプランニング能力の育成に努めている。

<愛知県> (種別：学校) 蒲郡市立三谷小学校

推薦理由

家庭、地域との連携を図り、様々な体験活動を取り入れることで、夢や希望をもって、意欲的に学び続ける児童の育成に取り組んでいる。また、児童に育みたい資質・能力を明確にし、系統的、段階的に指導を進め、児童の社会的自立に向け、確実に取り組んでいる。

<令和3年度の実践>

(1) 「SDGsは地球みんなの目標」(5年)

①米作り(田植え～稲刈り 5月～2月)体験と講師による講話

講師の鈴木さんには、米作りを始めたいきさつや、米作りの作業について教わった。毎日『お米観察日記』をつけ、水温の管理や虫食いなどの課題が生まれると、調べたり、鈴木さんに尋ねたりしながら、解決していった。

また、稲刈りの時には、鈴木さんから、稲は白米として食べるだけでなく、わらや糠、もみ殻等、刈り取ったものすべてが有効活用されることを聞き、自分たちが調べてきたSDGsとのつながりに気づくことができた。

②SDGsを学んでいる人との交流（11月、1月）

SDGs活動を推進している地元の高校生、SDGs公認ファシリテーター、そして市内小学生と交流する機会を設けた。子供たちは、様々な取り組みや見方・考え方をすることで、活動の幅を広げたり、これからの活動に生かしたりした。市内小学生との交流では、ICT機器を活用し、リモートで互いの取り組みを発表した。質疑応答も同世代のために積極的に行われた。

(2)「12歳のドリームマップをつくろう」（6年）

①蒲郡で夢を叶えた方のお話を聞く会（6月）

『人とのつながりを大切に、ないものはつくればよい』をモットーに平屋をリフォームしてカフェを開いた小田さん、陶芸に魅せられ、北海道から引っ越してきた西浦さん、園芸の家業を継いだ石田さんに、子どもの頃の夢を語っていただいた。「やりたいことは、やりたい。夢はあきらめなければ叶う」「夢は何度かわってもよいし、夢をもつのが遅すぎることはない。大切なのは、やる気と努力」と、心に響く言葉を聴き、自分の将来を考えるきっかけとなった。質疑応答も、同世代のため、積極的に行われた。

②ドリームマップを紹介しよう（12月）

個々に作成したドリームマップ（将来の夢とそこまでの道のり）を、プレゼンソフトを使ってまとめ、友達や家族に紹介する機会を設けた。後輩たちへ伝える機会も設定したが、コロナで中止となったことは残念であった。

<愛知県>（種別：学校）犬山市立東部中学校

推薦理由

中学校3年間を見通し、系統的・継続的にキャリア教育に取り組んでいる。また、令和3年度から新しい生活様式を踏まえ、異校種間連携の一環として地元の名古屋経済大学と連携し2年生において大学訪問学習を実施している。

1 主な取組

【1年生】中学校の学習や生活の内容を知り、これからの3年間に前向きに取り組む姿勢を育てる。
・「働く人に学ぶ会」：自分の興味・関心のある職業について調べたり、働く人に話を聞いたりして働く意義を理解する。

【2年生】1年時の中学校生活の反省をふまえて生活目標を立て、進路選択の意識を高める。
・「職場訪問学習」「大学訪問学習」「マナー講座」を通して、将来の職業に向けて働くことや学ぶことについて実際の体験を通して考え、礼儀やマナーを学ぶ。

【3年生】中学校生活のまとめの1年として、自分を見つめ直し、進路決定への見通しをもつ。
・「進路学習会」「体験入学」「マナー講座」を通して、卒業後の進路を前向きに選択し、社会の一員として力強く生きるための方法や心構えを学ぶ。

2 犬山市立東部中学校キャリア学習・大学訪問の取組

【ねらい】新しい生活様式を踏まえた中で、上級学校での学びを体験し、キャリアへの関心・意欲を高める。

【対象】対象学年：2年生 訪問大学：名古屋経済大学

【内容】

- (1) 中学生によるSDGsに関するプレゼンテーションと大学教員によるその講評
- (2) 大学生と大学教員によるキャリア教育に関するセッション
- (3) 大学教員によるキャリア学習講座
- (4) 大学生によるキャンパスツアー

<三重県>（種別：学校）亀山市立白川小学校

推薦理由

亀山市の北西部に位置し、創立123年目をむかえる全校児童48名の小規模校である。

学校教育目標を「であい、ふれあい、そして未来へ～自分を発揮し、求め続ける白川っ子の育成～」とし、山間部の豊かな自然の中で地域と密着した体験学習や交流活動を経験することで、未来を逞しくしなやかに生きる力を備え、自分の持つ力を発揮し、自分の思いを追い求める児童の育成に取り組んでいる。

1. 炭の製作、商品化、販売を通じた起業体験

キャリア教育の一環として、入学時から様々な体験活動に取り組み、5・6年生の「総合的な学習の時間」において、まとめの活動として、起業体験活動を実施している。

昔から炭焼きが盛んな地域であり、平成14年に地元のことを知ってもらうため近隣の住民らによって校庭に炭焼き窯がつくられ、平成19年まで使用していた。その後、劣化により放置されていたが、平成29年に小学校の財産として修復を行い、現在は小学校と地域が一体となって炭焼き窯を利用した事業を展開している。

児童は、白川地区まちづくり協議会を主体とした地域の協力のもと、窯での炭焼き、商品化、パッケージ作業、チラシ作成、販売等を行っている。

これらの活動をとおして、よりよく販売するための課題発見やその解決策を考える力、解決策を実行することで諦めずに粘り強く取り組む力、考えを深めるために自分の意見を整理して伝えたり他人の意見を積極的に聞いたりできるコミュニケーション力を育成している。

2. 地域と密着した体験活動・交流活動

全校生徒で行う稲作体験、1・2年生での地域の方が所有する畑で行うサツマイモの苗植え・収穫体験や地域の方の指導による蛍籠づくり、3・4年生での地域のソバ畑で行う種まき・収穫体験や地域のお年寄りのお宅訪問、5・6年生での地域の障害福祉サービス事業所との交流活動や民生委員を講師とした福祉の仕事について学ぶ授業等、多岐にわたる体験活動・交流活動を行っている。これらの活動は、地域や身近な生活などへの興味・関心・意欲の向上や、地域の方と関わることで生まれる社会性の向上、教科の内容の確認・実践化につながっている。さらに、事後の活動として、体験・交流したことをまとめ、発表する活動を行い、表現する力を育てている。

3. 取組の成果

学校評価として保護者に行っているアンケートでは、「学校は、体験活動・児童集会等で、子どもの創意を引き出し、達成感が味わえる活動を行っている」「地域の方との交流や地域に親しむことで、地域への学校の教育活動の発信、地域を大切にする心や勤労生産を大切に思う心の醸成を行っている」の項目において、高い評価が得られている。

また、全国学力・学習状況調査及び、みえスタディチェックの質問紙調査において「失敗を恐れずに挑戦している」「地域の行事に参加している」といった項目の肯定的回答が平均値を大きく上回っており、炭焼きをはじめとする多岐にわたる体験活動や地域と連携したキャリア教育を実施してきた成果と考えることができる。

【ホームページ】<http://www.kameyama-mie.jp/kblog/shirakawa/>

<三重県> (種別：学校) 四日市市立橋北中学校

推薦理由

橋北中学校は、四日市市中心市街地の北に位置し、創立76年目をむかえる各学年単クラスの小規模校である。めざす生徒の姿として「自律」「協働」「創生」の3つを掲げ、これからの社会を生きる生徒にとって必要な力の育成に取り組んでいる。また、キャリア教育を学校経営方針の重点取組とし、基礎的・汎用的能力を『4つの力(※)』として生徒に提示している。

(※) つながる力…自分の考えや気持ちを他人に伝えて、協力する力

見つめる力…自分のよさに気づき、社会の一員としての自分らしい生き方を考える力

うごく・いかす力…課題を発見・分析し、計画的に解決する力

めざす力…自分の将来を切り拓いていく力

1. 『4つの力』とキャリア教育の取組

橋北中学校では、全教育活動をキャリア教育の視点で捉え『4つの力』を育成することに取り組んでいる。具体的には、修学旅行、職業体験学習、自然教室などの各学年の行事や取組では、『4つの力』を意識させ、取組を通してどのような力を身に付けることが重要かを、生徒が主体的に考える学習を行っている。

活動後の振り返りでは、生徒が取組を通じて伸ばすことができた『4つの力』を自己評価し、学んだことや身

に付けた力を新聞やプレゼンテーションソフトにまとめ、他の学年や保護者、関わった事業所等へ報告を行っている。

他に、キャリア教育の取組としては、年間10人以上のゲストティーチャー（学生起業家、文部科学省職員等）を学校へ招聘（オンライン接続を含む）し、授業や講話を実施している。

また、学期末には、「キャリア・パスポート」を活用し、これまでのキャリア教育の取組を振り返り、自らの変化や成長を認識することで、将来についてより深く考えられるよう取り組んでいる。

2. 地域密着の職業体験学習と ICT 活用

生徒が地域の多くの大人と触れ合い、多くの大人に認めてもらうことで、自己肯定感を高めるとともに、地域を知り、地域の魅力を発信できるよう、これまでは市内全域で行っていた職業体験学習を、校区内の事業所に限定して行っている。

校区内の事業所には、日常的に職業体験学習等のキャリア教育の取組を回覧板や学校だよりで周知しており、生徒自身が職業体験学習の受入事業所を開拓し、受入れの依頼を行うなど、これまで以上に主体的な職業体験学習を実施することができている。

また、1人1台端末を活用し、前年度に職業体験学習を経験した先輩とオンラインでの相談会を実施し、不安や疑問点を解消している。さらに、職業体験学習期間中には、毎日クラス全員が自宅から報告会をオンラインで開催し、良かったことや反省点について共有することで、翌日の体験活動の充実を図っている。

3. 園・小・中が連携したキャリア教育

当該中学校校区では、こども園、小学校、中学校が一体となって、「キャリア教育」、「行事交流」、「ICT教育」の視点で、子どもの連続した育ちを考える、「学びの一体化」の取組を行っている。

「キャリア教育」の連携では、合同の研修会、公開授業、実践発表・交流会、中学校教員による小学校での授業を行い、生徒の主体性、多様性を育む教育・保育の推進を行っている。

園・小・中が連携したキャリア教育は、小中学校教員が、こども園で育みたい力を知ったことで、職業観・勤労観を育成することに主眼を置いた教育から脱却し、子どもたちの個々の特性に応じた主体性、多様性を育む教育へと変化し、数年来継続して取り組んでいる。

4. 取組の成果

全国学力・学習状況調査において、「自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」「課題を立てて情報を集め整理し、発表する活動に取り組んでいる」「将来の夢や目標を持っている」「失敗を恐れず挑戦する」「地域社会をよくするために何をすべきか考える」といった項目の肯定的回答が全国値を上回っている。

キャリア教育の活動を『4つの力』と結びつけて、めあてを立て、振り返りを行うことに加え、地域密着や異なる校種で一体的に子どもを育む取組を推進することで、多くの大人が子どもの活動の成果を認めることにつながり、肯定的な回答の向上につながっていると考えられる。

【ホームページ】 <http://www.yokkaichi.ed.jp/~kyohoku/cms2/htdocs/>

<三重県>（種別：学校）三重県立水産高等学校

推薦理由

今年、創立120周年を迎える県内唯一の水産に関する専門高校で、海洋・機関科と水産資源科を設置する歴史と伝統のある高等学校である。古くから水産業（漁業、養殖業、海女漁等）が盛んな志摩半島に位置しており、地域で活躍する人材を育成することを目的に設立された学校である。3年間の本科課程に加えて2年間の専攻科課程も設置し、地域の基幹産業である水産業の発展に寄与するとともに、卒業生は全国の港湾や内航船・外航船の航海士、機関士等として活躍している。「かけがえのない海を護り、命を尊び、海の恵みを活用する豊かな人間性を備えた人材を育成する」という教育目標のもと、地域や大学等と連携して実践的な教育に取り組んでいる。

1. 各学年での取組

高等学校の共通教科のほか、水産の専門的な学習を1年生では週8～10時間、2～3年生は週12～17時間（各科・コースによって異なる）実施している。

（1）1年生の取組

共通科目公民科の「公共」では、志摩市議会を傍聴するなど地域が抱える課題を調査し、令和3年度（科目「現代社会」で実施）には「磯焼けによる漁獲量の減少」「空き家問題」「地域公共交通」といった課題の解決に向

け、大学教授等専門家の助言を得ながらグループで解決策を協議した。年度末には具体的な改善策を志摩市長に提案（プレゼン）し、その結果、路線バスにUSB 充電端子が設置されることとなった。

（２）２年生の取組

学校設定科目「アクアデザイン」において、令和３年度には姉妹校であるパラオ共和国高等学校とオンラインで意見交流を行った。水産資源科の生徒がパラオと日本の歴史、パラオオウムガイの生態、日本とパラオの文化や海洋環境について意見交換を行い、お互いの文化や環境の違いについて理解を深めた。また、令和３年３月末で休館した志摩マリンランド（水族館）から飼育されていた国の天然記念物「ネコギギ」を譲り受け、水産資源科の生徒が生態の研究を行うとともに種の保存に取り組んでいる。

（３）３年生の取組

専門科目の「課題研究」において、各科・各コースで学んだ知識と技術を活用して持続可能な地域づくりに貢献するための取組を行っている。

- ・海洋・機関科の海洋コースでは、志摩市からの依頼を受けスクーバダイビングの技術を活用して、安心して海水浴を楽しめるよう海水浴場等でガンガゼ（ウニの一種）の駆除を行っている。また、アワビの稚貝の放流やその後の定着についての調査研究も志摩市と連携して行っている。

- ・海洋・機関科の機関コースでは、昨年度、溶接などの金属加工の技術を活用して生徒がガンガゼ駆除のための磯ミノを開発し、地元の海女さんに提供した。本年度は、生徒が行った磯ミノの使用についての聞き取りをもとに軽量化などの改善を行い、より多くの方々に使ってもらうため地元の漁業関係者へ配付した。

- ・海洋・機関科の水産工学コースでは、東京海洋大学、企業、志摩市と産官学連携を行い、ROV（水中ドローン）を活用した海洋環境のモニタリングやガンガゼ駆除について実証事業を実施している。

- ・水産資源科のアクアフードコースでは、地元のマグロ養殖業者や漁協と連携し、マグロの廃棄部位（心臓や肺等）を活用した商品（缶詰）開発を行っている。

- ・水産資源科のアクアデザインコースでは、三重大学や漁協と連携し、漁獲量が激減しているクロアワビの養殖やマナマコの増殖に向けた調査研究を行っている。また、地域の方から真珠養殖の知識と技術を学ぶとともに、生徒が講師となり地元の中学生に対して出前授業等を行っている。令和３年度には、志摩市や真珠についてのPRイベント「パールズコレクション2022 OSAKA」の開催に大阪夕陽丘短期大学と協力して取り組んだ。

２．取組の成果

地域の課題について考え、水産の専門的な学びを活用して課題解決に向け主体的に取り組むことにより、当該校が目指す「考え抜く力」「チームで働く力」「前に踏み出す力」を持った生徒の育成が推進されている。

また、パラオの高校生との交流や大学教授、関係企業との取組を通じて、身近な地域だけでなく世界の海洋環境や水産業についての関心も高まり、学んだ知識と技術を活用することで課題解決につながるという実感につながっている。生徒アンケートでは「自分という存在を大切に思えますか」という問いに対して、前年度61.7%から71.0%に上昇し、生徒の自己肯定感が高まったといえる。

今後も、地元漁業関係者や地域、大学や自治体と連携し、生徒が主体的に地域の課題や水産業の課題について取り組み、社会に貢献できる人材の育成を進めていく。

【ホームページ】 <http://www.mie-c.ed.jp/hsuisa/>

＜滋賀県＞（種別：学校）甲賀市立朝宮小学校

推薦理由

【取組概要】

甲賀市立朝宮小学校には学校茶園があり、一年を通して「朝宮茶」の栽培を子どもたちの手で行っている。また、総合的な学習の時間「茶の花タイム」を中心に「朝宮茶」を切り口に地域学習を進めてきた。３・４年生では、朝宮茶の製造過程について、５・６年生では、朝宮茶の歴史を学び、その魅力を発信してきた。地域の特産であり、自分たちで育てている「朝宮茶」を学び、発信することは、子どもたちがふるさと朝宮に愛着や誇りをもつことにつながるとともに、朝宮の地域おこしにもつながると考え、取組を進めてきた。

令和３年度からは、これまでの学習から一歩進め、５・６年生を中心に、朝宮茶の活用方法を子どもたちが考え、製造や販売等の体験を通じた学びを進めている。

【朝宮茶で地域を盛り上げようプロジェクト】

給食で出た他の地域のお茶を使ったプリンを食べながら「なんで朝宮茶のプリンはないの?」「朝宮茶を使ったスイーツも広めたらいいのに」という子どもたちのつぶやきから、学校茶園で育てた朝宮茶を使ったスイーツを開発することになった。スイーツの開発には、朝宮地域の茶葉専門店「山本園」さんの協力を得ることができた。

学習の流れは以下のとおりである。

- 高める
 - ・朝宮茶の歴史について学ぶ。
 - ・茶農家さんから栽培方法や栽培への思いを聞く。
 - 他の地域のお茶と朝宮茶の飲み比べをして、朝宮茶の特徴やよさを知る。
- つながる
 - ・朝宮茶のよさを活かしたスイーツを考案する。
(7種類のスイーツを考案)
 - ・山本園さんへプレゼンを行う。
(7種類の中から朝宮小の〈ゆるキャラ〉チャップマンとチャッピーがモチーフになったクッキーとお茶マカロンの2種が採用された)
 - ・採用されたスイーツを作る。
- 認め合う
 - ・これまでの活動の経緯と朝宮茶の魅力を伝える掲示物を作成する。
 - ・作成したスイーツを販売する。
(材料費や光熱費、人件費などの諸経費について学び、価格設定は子どもたちが行った。また、販売会会場には、子どもたちが作成したこれまでの活動の経緯と朝宮茶の魅力を伝える掲示物も展示した)
 - ・これまでの活動を振り返る。

令和4年度は、「朝宮茶」をさらに多くの人に知ってもらうための広報活動や、朝宮地域のシンボルマークの作成など、新たなテーマで取組を進めている。

＜滋賀県＞（種別：学校）滋賀県立瀬田工業高等学校

推薦理由

瀬田工業高校では、「質実剛健」を校訓に掲げている。全日制課程には機械科、電気科、化学工業科の3科を設置し、定時制課程には機械・電気科を設置している。基本技術から先端技術までを習得し、将来社会に貢献する職業人を育成することを目標としたキャリア教育の充実に努めている。

第2学年で実施している就業体験事業は、地域や職業について理解したり、自立のための能力の育成につながっている。コロナ禍においても、全学年生徒の約86%が、就業体験に取り組んだ。

第3学年で実施している求人応募前職場見学会は、就職に対する意識の向上につながっている。また、近隣の中学校に出向き「パンク修理教室」を開催するなど、地域に根差した活動も実践している。

また、滋賀県教育委員会の「産業人材育成プロジェクト事業」指定校として「滋賀の産業を支える職業人の育成」、「知識・技能を身につけ、何事にも意欲的に取り組む職業人の育成」、「協調性やコミュニケーション能力の高い人材育成」を目的とし、①生徒・教員の企業・大学・地域との連携事業、②技術者による学校での実践的指導、③講師招聘事業を通じて人材育成事業などを、実践・研究している。

具体的には、企業や大学等と連携し、専門的技術を習得したり、SDGsの視点から地球環境について考え行動できる力を養ったりしている。

更に、第32回全国産業教育フェア青森大会に、災害時には太陽光発電で発電し非常電源車として利用するとともに散水用のタンクに貯めた水をろ過して飲み水に利用することができる自動車（「地域災害時非常電源車」）を出品するなど先進的な取組も積極的に行っている。

以上のように、瀬田工業高校は、地域理解・職業理解をすすめる取組や、社会的・職業的な自立に向けて必要となる資質・能力の育成を積極的に進めている。

【ホームページ】 <http://www.setatech-h.shiga-ec.ed.jp/>

＜京都府＞（種別：学校）京都府立桂高等学校

推薦理由

京都府立桂高等学校は、普通科と農業の専門学科の併設校として創立74年目を迎え、地域に愛される地元の高校として周知され発展してきた。特に近年は、専門学科において、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定（H25.4～H30.3）の研究活動から端を発した、地域や企業との連携など様々な取組が評価を得て、この課題研究活動の根幹となっているTAFS（Training in Agriculture for Future Specialists）プログラムを醸成してきた。

令和2年度からは、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」事業特例校に認定。独自のカリキュラム・マネジメントを展開し、キャリア教育に力を入れている。また、普通科においても課題研究型の学校設定科目、KRP（桂リサーチプロジェクト）を導入し、桂高校全体として積極的にキャリア教育を推進し、主体的な課題解決能力や創造性を育てている。

（1）農業技術系科学の専門教育と課題研究体験

ア 各学科各コースでの取組

植物クリエイト科では、主にバイオテクノロジーの技術を用いた育種や増殖、またシードバンクとしての、京野菜の栽培と普及に取り組んでいる。園芸ビジネス科では、施設園芸を主として養液栽培や鉢物を栽培するだけでなく、フローラルアートなど付加価値をつける取組を行っている。

イ 課題研究活動の成果

○農業クラブ連盟大会

プロジェクト発表や意見発表での活躍。今年度はプロジェクト発表1チームが全国大会に出場する。

○環境系コンテスト

①気候変動アクション環境大臣表彰 ユース・アワード（令和3年12月）

研究内容：コーヒー残渣を基材としたきのこの菌床栽培とその廃菌床の堆肥化について

②Green Blue Education Forum コンクール 環境大臣賞（令和3年11月）

研究内容：資源循環を促進する！～汚泥回収リンMAPの活用法～

③京都環境賞特別賞（環境担い手賞）（令和4年2月）

研究内容：廃棄物の二次利用によるCO2削減と循環型社会の構築

④脱炭素チャレンジカップ2022 セブン-イレブン記念財団 最優秀地域活性化賞（令和4年2月）

研究活動：京の伝統野菜栽培にゴマの搾りかすを肥料とする地域循環の構築

⑤関西SDGs ユースアイデアコンテスト 準グランプリ（令和4年2月）

研究内容：シロバナタンポポの栽培とコーヒーの商品化

○ビジネス系コンテスト

①高校生ビジネスプラン・グランプリ 優秀賞（令和4年1月）

研究内容：梅酢を活用した濃厚トマトの栽培

②東和薬品 未来と健康のための高校生ビジネスコンテスト ファイナリスト賞（令和4年3月）

研究活動：菌活で人も地球も健康に！

○その他科学コンテスト

①京大宇宙ユニットシンポジウム ユニット長賞（令和4年2月）

研究活動：桂ウリを使用した宇宙食スイーツの開発

②高校生科学教育大賞 最優秀賞（令和4年7月）

研究活動：伝統菊の保全と重イオンビームによる新品種の育成

ウ 学校設定科目での取組

・園芸ビジネス科3年生での選択授業として設定している「地域マネジメント」において、地域の課題や特産などに目を向け、地域活性を目的としたビジネスプランをグループで作成し、マーケティングや経済学も取り入れながらコンテストにチャレンジさせることで、より具体性のあるアントレプレナー精神を養う。

・普通科のKRPでは、1年次の基礎プログラムで探究の「型」を学び、2年次の実践において学んだ探究の「型」を用い、課題解決を進める。

- ・これらの成果を校内や対外的な場で発表し、これからの社会で求められるプレゼンテーションやコミュニケーション、資料作成などの能力を高めることができる。
- ・これらの研究活動や成果を通して、実践を踏まえた様々なスキルを身に付けており、社会の即戦力としての力を養っている。

(2) 地域連携と出店体験

- ア 梅小路公園「グリーンフェア」での花の販売と説明
- イ 山田製油での「朝市」にて野菜販売
- ウ 高島屋京都店地下食品売り場でのコラボ商品の開発と販売
- エ 下桂御領神社での桂女祭にて野菜や花の販売
- オ 品川駅での京野菜のリモート販売
- カ 無印良品主催の「つながる市」にて花の販売とみつろうラップのワークショップ開催
- キ 阪急電鉄洛西口駅事業部との連携事業
秋の即売会とボランティアグループを含めた年3回の花壇定植

(3) 産学連携と開発体験

- ア 無印良品の野菜栽培キットを用いた栽培日記をHPに掲載
- イ 丸和商业(株) 提供の風呂敷の端切れを用いたみつろうラップの開発
- ウ 武田薬品工業京都薬用植物園での堀川ゴボウの植え付け体験
- エ スター食堂グループなどへ極太九条ネギを中心とした京野菜の出荷
- オ 山田製油と連携、ゴマの搾りかすを肥料とした京野菜の栽培と研究
- カ 小川珈琲と連携、コーヒー残渣を活用した菌床栽培と堆肥化の研究
- キ Plus Nuts(株) と連携、京の伝統野菜である桂ウリを用いたドライフルーツの開発
- ク コトハとの連携による観葉植物の栽培

(4) 学校間連携と交流体験

- ア 小学校との連携
 - ①川岡小学校 本校にて栽培体験学習を行う。本校生徒が指導。
 - ②境谷小学校 寄せ植え指導
- イ 中学校との連携
農業教育体験学習会を設け、実際の作業や高校生の研究に触れてもらう。
- ウ 高大連携
 - ①包括協定 龍谷大学、京都産業大学
 - ②研究協力 京都府立大学、東北大学、近畿大学
- エ 地域との交流
桂周辺自治会とのプランターづくりや即売会、また京都の伝統的な販売手法である「振り売り」を通じて、常に地域とのコミュニケーションを密にし、交流を深めている。

<大阪府> (種別：教育委員会) 摂津市教育委員会

推薦理由

摂津市教育委員会は、市教育委員会、NPO 法人、小中学校教員で組織する「キャリア教育推進委員会」を設置し、市のキャリア教育スタンダードの作成、課題の調査・分析等を実施するとともに、キャリア教育の取組みの推進を図っている。また、教職員を対象としたアンケートを実施し、学校現場の声をもとに、教員が必要としている研修の企画や環境整備をおこなっている。

市内全中学校において下記のような「職種体験プログラム」の取組みを実施している。

<職種体験プログラムについて>

【プログラムの目的】

社会貢献活動に取り組む職業人とともに、課題や問いを立て、他者と協力しながら考えをまとめ行動する体験を通し、自己理解を深め、自らが望む生き方を実現していくことができる力を育む。

【プログラムの目標】

- ・「働く」とはどのようなことなのかについて、考え行動し、自分の変化に気づく。
- ・「対話」で本質を問い、「多様性」を認め、問いに対し自分ごととして考え、他者との「協働」で実現する。

【プログラムの流れ】（取組み期間：4～9月）

- ①対象学年は中学校第2学年。生徒は興味のある企業等を選択し、5名程度のグループにわかれる。
- ②生徒は、選択した企業等の協力者から、仕事についてヒアリングを行い、勉強や働くことの意味を学ぶとともに、「企業等が抱える課題に対する提案」や「摂津市が抱える課題」に対して、自分たちに何ができるかを考える。
- ③設定したテーマに関する情報を収集し、グループ内または企業等協力者とディスカッションを行う。
→考えを深め、企業等からの課題等に対する「納得解・最適解」を見つける。
- ③営業の方から、話し方のレクチャーを受ける。
資料の作り方、効果的なプレゼンテーションの方法などを学ぶ。
→チームで考えなどをまとめ、協力企業に対して行うプレゼンテーションに向けた資料を作成する。
- ④グループで考えた内容（納得解・最適解）について、実際に学校や企業等で体験活動をしたり、地域の方にインタビューしたりするなどのフィールドワークを実施。途中経過を企業等に報告し、アドバイスを受けて再検討する。
- ⑤企業ごとに各グループがそれぞれプレゼンテーションを行い、企業等が審査を行い、それぞれの企業別優秀チームを決定する。
- ⑥各企業等の優秀チームがそれぞれの代表として、同じ学校の仲間に対して、自分たちがどのような企業等と関わり、どのような体験、取組みの提案等を行ってきたのかをプレゼンテーションする。

本取組みは、子どもが他者と協働しながら実社会とのつながりを体験できるものであり、主体的に社会参画しようとする力の育成につながると考える。

＜兵庫県＞（種別：学校）兵庫県立農業高等学校（定時制課程）

推薦理由

兵庫県立農業高等学校では、三修制が始まった平成25年度から、社会的に自立し「志」の実現に挑戦する人間育成を目標に掲げ学習活動に取り組んできた。この目標を達成するため、「県農定時制キャリア教育プログラム」を策定し、生徒に社会人基礎力を身につけさせるための教育を実践している。

【本校キャリア教育の課題】

＜生徒＞

- ・就労について考える際に、アルバイト中心の考え方となっており、アルバイト先の職種の枠を超えた勤労観・職業観の育成ができていない。

＜教員＞

- ・アルバイトを就業体験と同様にみなしてしまう傾向にあり、インターンシップの意義を伝えることができていない。

【県農定時制キャリア教育プログラムの特長】

（1）組織的・系統的なキャリア教育の取組

- ・基礎的・基本的な知識・技能を定着させる学習、思考力・判断力・表現力を向上させる学習とともに、「総合的な探究の時間」「学校行事」での社会人基礎力をつけるプログラムを1学年から卒業まで系統的に取り組む。
- ・教員全員がキャリア教育の企画・実施を行うだけでなく、生徒と一緒に職場見学等に参加し、実態を把握して検証に役立てている。

（2）生徒一人一人の社会的・職業的自立に向けた取組

- ・社会的・職業的自立に必要な社会人基礎力を身につけさせるため、探究型学習や生徒が希望する講師との双方向型学習、事前調査等の自主的学習を通して、生徒本人の「気づき」を大切にした主体的な学習に取り組む。

(3) PDCAサイクルを取り入れた職場見学の実施

・事業所説明会や職場見学に教員が企画から携わり、生徒と一緒に参加することで、実施後に検証・改善を行っている。

(4) 地域・産業界等との連携・協力体制の構築

・社会貢献する意識・ライフプラン・進学・就職等について多角的な視点による意識付けを行うため、NPO や地元企業等と連携・協力体制を構築している。

【県農定時制キャリア教育プログラムの成果】

- ・3カ年計画のキャリアプラン「県農キャリア教育プログラム」の確立と実践
- ・インターンシップ参加者の増加 (R1 3 人、R2 0 人、R3 58 人、R4 58 人)
- ・新規就職先の増加 (R3 17 社増)
- ・離職者の減少 (H31 15 人 R2 9 人 R3 3 人 R4 0 人)

【今後について】

本プログラムを進化・深化させるために、インターンシップ受入先での在学中アルバイト実施を可能とする「県農定時制版アルバイトインターン制」を広げ、さらなる離職率の低下を目指す。

＜兵庫県＞（種別：学校）兵庫県立阪神特別支援学校

推薦理由

兵庫県立阪神特別支援学校は創立 58 年目を迎える知的障害特別支援学校である。学校教育目標は「児童生徒一人ひとりが、自立と社会参加を目指し、主体的な行動力が身につけられるよう必要な知識・技能・態度及び習慣を養う」である。「キャリア教育全体計画及び発達段階表にもとづき「キャリア教育で育てたい4つの力」を基盤として、児童生徒が社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現できるよう、小～中～高等部（職業コースを含む）一貫して教育活動全体を通じた段階的・系統的な指導を進めている。

＜特色ある取組＞

【小学部】

〈日常生活の指導〉身近自立に重点を置いている。係活動や遊びたいこと、拭き掃除やランニングの回数等を自分で選び決定し、最後まで取り組めるように指導している。

【中学部】

〈職業・家庭〉家庭でも挨拶ができたり、マナーに気を付けたり、洗濯や掃除が進んでできるよう学んでいる。
〈作業学習〉

生徒一人ひとりの適性と実態に応じて、編み物・さをり織り・紙すき・リサイクル等の作業に取り組んでいる。その際、作りたい製品の形や色を自分で決め、作業量を自ら調整することも取り入れながら、働くことについて意識を高められるよう指導するとともに、高等部の「職業」「家庭」「作業学習」への連続性を考え、系統的な指導内容を設定している。

【高等部】

〈作業学習〉社会のニーズや卒業後の進路を見据えた作業種目を設定している。

スクールメンテナンス：手順通りに清掃作業をすることを通して、道具の取り扱いや安全面への配慮等

総合サービス：a) 物流・品出し部門（バックヤードの商品陳列等）

b) 喫茶サービス部門（接客やコミュニケーション、衛生面での配慮等）

他にも、手工や紙すき等がある。

1 年次に複数種目を体験し、2 年次に特性や意欲等を踏まえて、一つの種目を選択する。3 年次は引き続き実践的な場面でのスキルアップを図る。選択にあたっては、キャリア教育の観点の一つである自己選択・自己決定を尊重して決定している。スクールメンテナンス、総合サービスの物流・品出しと喫茶サービスの3つは、校内代表が臨むアビリンピックや兵庫県特別支援学校技能検定で県の評価基準により技能について1～10 級の認定を受ける機会がある。積極的に参加を促し、達成感や充実感を味わうことにより自己実現を図れるよう取り組んでいる。また、学校独自に作成した、生徒の実態を踏まえた評価表をもとに校内検定も実施するなど、スモールステップで働く意欲とスキルの向上を図っている。

【職業コース：高等学校内分教室】設置8年目(平成27年設置)であり、①地域・企業での体験・実習、②実践的・体験的学習、③高等学校との交流及び共同学習の3本柱で進めている。

〈先輩からの指導〉職業の授業において上級生が下級生とともに活動する中で、授業に向かう姿勢や技術などを指導している。上級生にとっては自分たちが学んだことを教えることでより学びが深まっている。また下級生は上級生をロールモデルとすることで、より具体的な成長目標を立てることができる。

〈出張喫茶〉近隣地域の集会所で、出張喫茶「TARO COFFEE (タロウコーヒー)」を月に4回程度実施し、地域コミュニティの活性化に貢献している。授業では経験できない臨機応変さや、生きた接客技術を習得し、サービス業への興味関心や就労への意欲を高めている。

〈近隣の大学キャンパスでの出張清掃〉

授業で学んだ清掃の技術等を学校と違った環境でも状況に応じた段取りを組み、効率的な作業を実践している。

〈高等学校との交流及び共同学習や地域での活動〉

高校生との日常的な交流や、地域で行われている祭りやイベントに出店したり、ボランティアとして参加したりしている。同年代や様々な年代の方々との交流から、実践的なコミュニケーション力を身につけている。

※兵庫県特別支援学校技能検定を積極的に受検するとともに、卒業後も働きながら、個人として継続してアビリンピックに出場するなど、学び続ける卒業生もおり、在学中のキャリア教育が生涯学習にも繋がっている。

＜島根県＞（種別：学校）島根県立浜田高等学校

推薦理由

島根県立浜田高等学校は、平成30年度に「キャリア・パスポート調査・研究事業」、令和元年度から令和3年度に「キャリア・パスポート活用・研究事業」の県指定を受け、育てたい生徒像に向けて生徒に身に付けさせたい具体的な資質・能力を設定し、様々な教育の場面で育成することを目指した取組を行うなどキャリア教育の充実を図っている。

1 「キャリア・パスポート」の効果的な活用方法の提案

(1) 自己の成長を可視化するためのワークシート作り

変容に気づきやすい仕組みが必要だと考え、過去に実施したワークシートを見返すことで自己の成長に気づくことができるよう、レイアウトを大きく変更し、入学前と入学後の変容を含め、3年間を通じた定型を完成させた。これにより、生徒自身がそれぞれの場面での変容に気づきやすくなった。

(2) 志望理由書や面接への活用

(1)において改善を図ったワークシートをもとに、資質・能力ベースでの振り返りを蓄積したキャリア・パスポートを作成した。また、それを進路ポートフォリオの作成と関連づけることで、生徒の進路実現において「キャリア・パスポート」が有効であることを実証した。

2 全教職員で取り組むキャリア教育

キャリア教育を推進する中で、教育活動の見直しを行うとともに資質・能力に着目し、そのつながりを明確にした。さらに、職員同士の研修会等を実施し、生徒の成長のために校内をあげてキャリア教育の充実に努めている。

これらの取組により、各教育活動の目標を明確化したり、振り返りを有効に活用できるようになったりした。

＜島根県＞（種別：学校）島根県立吉賀高等学校

推薦理由

島根県立吉賀高等学校は、令和2年度から令和3年度にかけ島根県教育委員会「キャリア・パスポート活用・研究事業」の指定を受け、「小・中・高の連携」や、『教科学習や探究学習と「キャリア・パスポート」とを資質・能力ベースで関連づける研究』を通して、キャリア教育の充実を図っている。

1 育成したい資質・能力の共有化

育成したい資質・能力を設定し、ルーブリックを作成し、教職員と生徒で共有した。このルーブリックを生徒は自己評価の際に活用し、効果的に振り返りと目標設定を行っている。

2 「キャリア・パスポート」の活用場面（アウトプット場面）の創出

「キャリア・パスポート」の活用場面について見直しを行い、アウトプットする場面を設定し実施した。

主に自分のため：大学入試、就職試験

主に他者のため：3年生が1・2年生へ3年間の学びの発表、小学生との交流(先輩トークの実施)

3 小・中・高の連携強化

「キャリア・パスポート」を切り口に小・中・高の連携を図るため、町教委と連携し、「キャリア・パスポート」担当者会を計画し、地域で子どもを育てる環境づくりを行っている。

4 校内研修の充実、校内体制でのキャリア教育の推進

「キャリア・パスポート」をより活用するためにカリキュラム・マネジメントの視点を持ち、「キャリア・パスポート」と教科学習とをつなげていけるよう校内研修を実施した。また、校内プロジェクトチームを結成し、キャリア教育の推進に努めている。

上記の取組を通して、生徒は学びを振り返り、次の目標設定を行う力を高めることができている。

<岡山県>（種別：学校）早島町立早島中学校

推薦理由

めざす子ども像「地域とつながり 未来を拓く はやしまっ子の育成」を具現化するため、中学校で起業体験活動を導入し、ESD の視点に立ったキャリア教育を推進した。自ら課題を発見し解決しようとする意欲・態度、批判的に考える力、未来像を予測する力、自分の将来に夢を持ち主体的に行動する力を身に付けさせる取組を行った。

○主体性、実行力、課題発見力、計画力、創造力、チームで働く力の向上

花ござピンポン世界大会、はやしま CAFE の企画・運営、地元企業と協働した商品開発などに向けて、課題を発見し、限られた時間で計画的に他者と協働する必然性を持たせた。そのことを生徒に意識させることにより、課題発見力、計画力、チームで働く力などが養われた。また、学年実行委員・生徒会活動等と関連付けることにより、生徒が主体的・意欲的に取り組む態度が身に付いた。

○キャリア教育と ESD を両輪とする単元学習プログラムの作成

キャリア教育の基礎的・汎用的能力と ESD において付けたい力との関係性を明確にした上で、育てたい力を示した単元学習プログラム及び能力・態度を5段階に具体化した評価基準表を作成し、キャリア教育と ESD を両輪とした探究的な学習を充実させた。地域の抱える問題を自分事として捉え社会貢献意識が高まるとともに、自己の夢や生き方を見つめる力ややり抜く力の向上につながった。

○地域や地域の人々とのつながり

花ござピンポン世界大会、はやしま CAFE の運営、地元企業と協働した商品開発などを通して、地元の人々や企業の方々と触れ合い実際に社会の一員であることを体感し、地域の人々や高校生などと協働することで、他者と協力する態度や他者とのつながりを尊重する態度、主体的に取り組む態度を養うことができた。また、町役場、地元企業、商工会等の協力を得て活動を行うことで中学校・町教委・町役場・地域の強いつながりを構築できた。

○生徒の変容等

取組の効果を検証する目的で実施した3年生対象のアンケート調査の結果からは、物事を多面的に見たり、批判的に考えたりすることが定着してきていることや、課題や目標達成のために試行したり、工夫したりしながら、積極的に挑戦していく力が育ってきていることが伺える。

<岡山県>（種別：学校）岡山県立津山東高等学校

推薦理由

岡山県北部に立地した普通科と専門科(食物調理科・看護科)の併設校である。「行学一如」を校是とし、地域コーディネーターと協力しながら地域に根差した教育活動を展開しており、総合的な探究の時間(校内名称:「行学」)

における地域と連携した探究活動とキャリア教育とを一体的に推進することで、自ら主体的に考え行動し、他者と共に課題解決できる力を身に付けた、社会に貢献できる人材を育成している。

○キャリア教育と一体的に進める探究活動

地域で学ぶ課題解決型の探究学習である「行学」では、自己の在り方・生き方と関連付けた課題を設定し、普通科では3年間を通して系統的に取り組み、専門科では2年次の「行学」が3年次の課題研究の専門性向上に資する内容となるよう工夫している。

また、「課題発見・設定力」「情報収集・整理・分析力」「発表する力」「学びに向かう力～将来設計の力～」 「つながる力～社会参画の力～」の「行学」で身に付けさせたい五つの力を生徒と共有し、ルーブリック評価による振り返りを通して、生徒自身に自己の成長を認識させている。こうした取組により、生徒の自己肯定感が高まり、主体的な進路選択につながるなど、キャリア形成に有効に作用している。また、地域と関わることで、地域理解が深まり、地域の活性化や魅力化に貢献しようとする生徒が増加した。

○地域の企業に関するプロモーション動画作成

「行学」の取組の一つとして、津山市と連携し、2016年から毎年、地域の企業の魅力を伝えるプロモーションビデオを制作しており、専門家の指導のもと、撮影やインタビュー、編集に取り組むことで、魅力発信に寄与することはもとより、地域の企業への理解が進み、地域貢献への意欲を醸成することにつながっている。

○地域特産品を活用した商品開発

食物調理科の課題研究等では、ショウガや黄ニラ等の地域特産品を活用したレシピや弁当等を考案し、地元企業や観光施設と連携して販売したり、生徒が手作り料理を振る舞うイベントを企画・運営したことで、地域特産品の消費拡大や地域活性化につながり、地域に貢献できる人材の育成に資する取組となっている。

○地域医療を支える人材の育成

5年一貫の看護科・専攻科は、津山市医師会等の全面的な協力のもと充実した臨地実習を行っている。実習では看護に関する多様な課題を発見し、看護の職業倫理を踏まえて解決策を探究し、合理的かつ創造的に解決する力を育成している。卒業生の多くが地域の医療機関で看護師として働いている。

<岡山県> (種別：学校) 岡山県立倉敷まきび支援学校

推薦理由

○地元企業や団体と連携した取組

地元企業の技術協力のもと、パンの製造販売を行っている。校内に設けた販売所「Dream」でのパンの販売だけでなく、百貨店や倉敷市役所真備支所など学校外でも販売を行っており、校内外問わず購入のために多くの人が並ぶなど、高い評価を得ている。また、スーパーでのピッキング体験や高齢者施設での清掃作業体験、校内実習等で行う作業の提供など、多くの地元企業の理解と協力のもと、キャリア教育に取り組んでいる。実際にお客様に対面したり、社会に出ていく製品を扱ったりすることで、就労に対するイメージをもったり、意欲を育てたりすることができた。

平成30年の西日本豪雨での被災をきっかけに地域の方々との絆が一層深まり、学習場面での協力だけでなく、学習の場の提供や活動の提案等があり、地域の清掃や花壇の手入れ等の活動に取り組むなど、キャリア教育の推進につながった。また、地域の商工会との連携により、被災地域の企業が参加した百貨店での物産展に参加し、多くのお客様に生徒が作った製品を生徒自身で販売することができた。学校運営協議会を活用し、学校と地域が連携し、組織的・系統的に地域課題の解決に取り組んだり、地域の人材を育成したりしている。

○顧客のニーズを意識した製品づくり

令和3年度に県教育委員会から「プロに学べ！作業学習ブラッシュアップ事業」の指定を受け、地元企業の協力を得てネームホルダーやキーケース等の革製品の製作販売に取り組んでいる。企画段階から企業の方より直接アドバイスをいただき、「売れる製品とはどんな製品なのか」を生徒自身が考え製品の質を上げていくことで、ものづくりの過程を学ぶだけでなく、自分たちが考え製作した製品が売れる喜びを経験している。机上の学習ではなく、「本物」の体験をすることで働く喜びを感じ、自己肯定感を高めることができた。

<広島県> (種別：学校) 三原市立大和中学校

推薦理由

●取組内容

企業と共同した体験活動（昨年度までは、新商品の開発体験。今年度はイベント開発体験。）

●取組概要

- ・平成 30 年度に、三原市キャリア教育推進事業を受け、(有)共楽堂・NTT 西日本・三原市経営企画課と協働し、広島県再開発・再発進のコンセプトのもと、「スマイルレモン広島ショコラ」などのスイーツを開発し、三原市の祭りである神明祭や修学旅行先である東京での販売体験を行った。
- ・平成 31 年度と令和元年度は、大和町の菓子店エトワール大池・三原市大和支所と協働、大和町の産品を生かした「レンコン入りクッキー」などのスイーツを開発し町内各所で販売体験を行った。
- ・令和 2 年度は、大和町の、はとむぎ茶屋・JA 広島中央・三原市大和支所と協働し、大和町の農産物を生かした総菜メニューや給食メニューの開発、白ネギの販売促進のためのキャラクターづくりを行った。
- ・令和 3 年度は、大和町のおこめん工房・道の駅「よがんす白竜」・三原市大和支所と協働し、米粉を使った商品開発に取り組み、道の駅「みはら神明の里」「よがんす白竜」で販売体験を行った。パッケージデザイン、動画 CM を作り、クラウドファンディングも有効活用した。
- ・令和 4 年度は、大和町の果実の森という観光農園と協働し、1 日イベント開発を行う予定である。
- ・地域の方との関係者会議を随時行い、キャリア教育の取組について意見交換をしている。新しいアイデアや人材活用について有効に機能している。
- ・イベントの企画運営者やデザイン・広報などの専門家を招き、外部人材の活用をすすめている。
- ・事前の現地調査や取組内容の中間報告を行うなど、体験活動を重視し、育成すべき資質・能力の向上に努めている。
- ・活動後の生徒アンケートの結果では「今住んでいる地域が好きである」「将来も今住んでいる地域に住みたい」等の質問項目に対する肯定的回答が向上するなど実績があり、キャリア教育の充実発展に寄与している。

<広島県> (種別：学校) 広島県立宮島工業高等学校

推薦理由

宮島工業高等学校は、全日制機械科、素材システム科、電気科、情報技術科、建築科、インテリア科の 6 学科及び定時制機械科の 1 学科を併設した専門高校である。工業高校の専門性を生かし、地域との連携を深め、様々な取組を通して生徒の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成している。

1 主体的に課題を発見していく力や創造性を育む取組

学科等の特色を生かしたカリキュラム開発に取り組んでいる。その核となる学習は“未来創造学習”である。「宮島工業高校で学ぶことは自分の将来にどのような価値をもたらすか」を本質的な問いとして「自己を理解する」ことから「何のために学んでいくのか」、「自己の将来はどうあるべきか」、「宮島工業高校で学ぶことで、自分はどのように進化するのか」など、自己の在り方生き方を考えさせるとともに、専門的な知識や技術を活用することや他の生徒と協働することを通して、課題を発見し解決していく力等を育成している。

2 他校種と連携した取組

(1) 夏休み子供教室

地域の小学生を対象に、生徒を講師としたものづくり教室を実施している。小学生にとっては、ものづくりの楽しさや製作後の達成感を味わう機会となり、生徒にとっては、講師として参加することにより、ものづくりに対する自信や誇りをもつことにつながっている。また、異年齢の児童と交流することでコミュニケーション力を高める機会となっている。

(2) 中学生に対する出前授業

地域の中学校と連携し、ものづくりの指導や工業高校の教育内容の説明を生徒が行う出前授業を実施している。この取組は、中学生のものづくりに対する興味・関心を高め、職業観を育むキャリア教育を支援するとともに、身に付けたものづくりに係る知識や技術などの工業の専門性を発揮する場となっている。

3 地元企業や自治体等と連携した取組

(1) 地域産業との連携及び大学等のオープンスクールへの参加

生徒の視野を広げ、自分自身の適性を考える機会とするために、各学年において、次のような外部機関等と連携した取組を行っている。

1 学年：卒業生による講話

2 学年：インターンシップ（就職希望者）

3 学年：職場見学あるいは職場体験、大学等のオープンスクール参加

(2) 伝統工芸と最先端の技術を融合した商品開発

“木のまち” 廿日市市の伝統工芸である組子細工に取り組んでいる。令和3年度に設置した最先端のラジアルソーを活用し、幾何学模様の組子細工コースター3種類を考案した。これを地元“宮島土産”の新定番として広く発信するため、はつかいち観光協会と連携して、観光客にコースターを組み立ててもらう体験教室を開催した。

(3) 地域・地元の民話等の伝承

授業で身に付けてきたデザイン力を生かして、地域の伝説、民話、昔話を題材とした絵本を3種類制作した。この絵本を、はつかいち観光協会と連携して製本し、地元の小学校に寄贈した。この取組を通して、児童には、地域への愛着を育み、生徒には、地域への貢献意識を高めることができた。

(4) 生徒のまつり参画による地域活性化

「大野みんなのまつり」（大野町商工会主催）では、地元関係者の集まる会議に生徒が主体的に参画し、大型フィールドアスレチックの企画・運営を行った。授業で身に付けた三次元CAD設計等の技術を生かしてアスレチックを製作した。この取組は、地元の活性化、参加した人たちの絆を強める等、地域貢献の一助となった。

(5) 地産地消の商品開発

地域の食材「ルバーブ」を生かした「宮工クッキー」、宮島牡蠣しょうゆと地元産の米粉を使った「マドレーヌ」の商品開発に取り組んだ。「宮工クッキー」の開発においては、家庭クラブはレシピ研究、工業クラブの機械科はクッキーカッターの製作、素材システム科はルバーブを使用したジャムの研究、インテリア科は商品ラベルのレーザープリント等、各学科の生徒の専門性を生かし、協働して取り組んだ。「マドレーヌ」の開発においては、レーザー加工機を用いて、“牡蠣がら”の形の型枠を製作した。これらの商品を、はつかいち観光協会や大型書店等と連携し販売した。地元の食材のよさを発信することで、地元の活性化につながった。

<広島県>（種別：学校）広島県立広島北特別支援学校

推薦理由

広島北特別支援学校高等部生徒と、県立加計高等学校芸北分校生徒（以下、芸北分校生徒）は、地域の特産品である「芸北リンゴ」を架け橋として9年間、交流及び共同学習を継続して行ってきた。芸北リンゴの収穫作業や共同での製品開発・販売等を通して、両校生徒は、互いを知り、互いの良さを認め合い、自身の考えを深め、自校の活動に主体的に生かしたり、地域を改めて見つめ直し、自らの生活や将来についての考えを深めたりしている。これからの共生社会の実現を目指すに当たって、他に類を見ない県内随一の取組であり、可能性と汎用性のある、まさに、インクルーシブ教育及びキャリア教育の理念に則ったものであると言える。

1 参加型活動から共同製品開発・販売活動へ

就学区域内にある芸北分校の生徒が芸北リンゴの栽培を行っているを知ったことをきっかけにして取組が始まった。平成25年度から芸北分校が栽培する芸北リンゴの収穫作業や袋かけに参加し、これまで継続して取り組んできたパン製造と関連させ、「リンゴパン」の製品開発を行い、校区のコミュニティセンター、地域の福祉センター、広島県庁などで販売実習を行った。平成27年度から、広島県庁で行う販売実習に、芸北分校が参加し、高等部はパンとお菓子、芸北分校は完熟芸北リンゴを販売した。平成30年度は、芸北分校生徒が来校し、共同でアップルパイ等の製品開発を行い、地元企業での共同販売を行うまでに拡大した。

2 課題発見解決型学習による両校生徒の変化

生徒は、より良い製品を作るために、両校生徒同士で積極的に意見を出し合って製品や販売の仕方を改善しており、回を重ねるごとに自信をもって製品づくりや販売をする姿が見られている。同世代の高等学校生徒が作業する姿は、自らの卒業後の働く姿を具体的にイメージすることにつながり、広く自らの将来について考えを深めていくきっかけとなっている。芸北分校生徒は、自分たちが手塩にかけて育てた芸北リンゴを、高等部生徒がど

うしたらもっと多くの人に知ってもらえるか、どうしたらお客様に喜んでもらえるかと真剣に考え奮闘する姿から、障害者への理解を深め、自らを振り返り自身の活動に生かすとともに、地域をより意識し、これからの生活を考えるきっかけとしている。

3 深化する交流及び共同学習

現在、両校の生徒はコロナ禍にあっても学びを止めることなく、オンライン交流も活用しながら、取組を一層深化させている。本取組を交流及び共同学習として年間指導計画に位置付け、「地域」を共通のキーワードとして、取組の継続と発展を図ることができるよう組織的・計画的に進めている。

<山口県> (種別：学校) 岩国市立由宇中学校

推薦理由

由宇中学校では、中学校区共通の教育目標「夢や希望をもち、主体的に学び、たくましく伸びてゆく由宇っ子の育成」を目指し、地域とともにある学校づくり、誇りと「由宇愛」溢れる生徒の育成に努めている。由宇中学校区には、由宇中学校を核とし、3つの小学校と3つの保育園、こども園、地域とを結ぶ「結愛ネット（由宇地域協育ネット）」があり、今年で発足10年目を迎えた。その中に教職員と各校の学校運営協議会委員からなる「由宇学校教育連携協議会（以下「由宇学連」）」もあり、岩国市全体で進めている「小中一貫教育」（本中学校区では「保園小中一貫教育」）推進の母体と位置付けている。本校では、中学校区での「4つのつながり」である「教職員・組織」・「学び」・「児童・生徒」・「家庭・地域」を意識した取組を各小学校と協働体制で進めている。特に「キャリア教育」は各取組の主軸とし、温かい自然豊かな由宇町の特性を生かしながら、由宇町全体を「学びの場」とし、生徒と共にその推進に向けて取り組んでいる。

1 保園小中一貫教育の推進

(1) 保園小中での「結愛ネットランドデザイン」の作成、共有

由宇学連において、それぞれの発達段階を踏まえた目指す姿を共有し、それをリーフレットやクリアファイルとしてまとめ、教職員のみならず町内の各家庭に配付し、共に15歳の姿を共有するものとした。

(2) 「由宇中学校区学校・地域連携カリキュラム（キャリア教育の視点を踏まえて）」の共有

由宇学連において、3つの小学校と共に中学校区でのキャリア教育の重点を定め、各小学校から中学校までの学びのつながりを明確にした。これにより、中学校の取組を各小学校が踏まえた取組や小小連携の推進に繋がっている。

(3) 「伝える力」の育成（伝える力の指標の活用・研修の充実）

由宇中学校では、中学校区の児童生徒の課題を踏まえ、小中共通の研修主題を「自ら学び続ける由宇っ子の育成～『伝える力』を育むための支援のあり方を探る～」とし、「伝える力」を主軸にした研修を進めている。そのために低・中・高・中学校と発達段階を踏まえた「伝える力の指標」を作成し、授業改善の視点としている。

2 生徒の主体による生徒会活動の充実

(1) 「生徒総会」から「子どもの学びプロジェクト会議」の運営

生徒会の運営する「生徒総会」での協議事項を各小学校でその卒業生である生徒が説明、さらに、各小学校で中学校につながるためにできることを考える授業を生徒主体で実施している。今年度は、児童生徒が地域の駐在所の方々から実際の社会の課題について講話を受けるなど協働活動が進み、夏休みには「由宇中学校区 SNS トラブル防止子どもサミット」が実施されるなど広がりを見せている。

(2) 結愛セミナーの実施・運営

生徒会が、由宇町におられる方々を講師としたセミナーを主催し、運営している。事前の打ち合わせから案内、会の進行、御礼まで、生徒が主体的に取り組んでいる。これは、教職員にとっても、地域の人や思いを知れる機会となっている。

(3) 結愛ボランティア活動の推進

由宇中学校では、地域のニーズに中学生として、生徒会が「結愛ボランティア100%」を目標として募集し、活動につなげている。コロナ禍で、募集が激減した時期もあったが、昨年度から徐々に募集件数も増えている。地域のハイキングの支援や、駅や文化会館の花壇の植え替え、子ども食堂、各イベントへの支援、社会を明るくする運動」への協力、老人ホームの慰問等年間を通した活動が続けられている。

3 地域連携教育の推進

(1) 由宇学連での「拡大子どもの学びプロジェクト会議」の実施

今年度、新たに「由宇中学校区学びのプロジェクト会議」と地域の方々との「熟議」を実施した。小学校毎のブースに中学生、地域の方々、教職員が一同に会し、「学びのプロジェクト会議」で協議された内容やその後取り組んできたことを共有し、その地域で何ができるかをアドバイスしていただいた。児童生徒は、学校に関わってくださる地域の方々の思いを知る機会となった。

(2) 学校支援（由宇中学校 文化祭講座への支援）

由宇中学校では、文化祭前に地域の方を講師とした「文化祭講座（12講座）」を実施している。文化的な素養の深化も図ることと共に、「地域の方々の思いや生き方」を学ぶ場ともなっている。

(3) 職場体験学習

由宇中学校では、第2学年で地域の各事業所での職場体験学習を実施している。地域を知り、キャリア教育の実践の場として位置付けている。

<山口県>（種別：学校）宇部フロンティア大学付属香川高等学校

推薦理由

1 推薦校概要

明治36年に創設者香川昌子により「香川裁縫塾」として始まった宇部フロンティア大学付属香川高等学校（以下「香川高校」）は、当初から「実学を重んじる」ことを是とし、その教育目標も「健康で実力のある、社会に貢献できる人材の養成」としている。

現在香川高校には主として大学等の高等教育機関への進学を目指す「普通科」と、デザイン、調理、保育といった専門的職業技術を学ぶ「専門科」の2つの部門があるが、近年の教育環境のグローバル化やICT化などに対応した学習システムとして、平成28年度にニュー・フロンティア・スタイルとして「Global」「Science」「ICT」「Frontier Learning」「Active Career」からなる「改革の5本柱」を打ち立て、生徒の将来のキャリアに繋がる教育を推進している。

このうち「Active Career」については、「社会的・職業的自立に向けて基本的能力、生きる力を育む」ことがその目標とされ、これまでも専門科生徒を中心に各種コンクールやコンテストにチャレンジを行い、全国的な表彰も数多く獲得している。

2 主な取組について

(1) 学校グッズ商品開発の経緯

普通科の生徒から「自らの手で商品開発を行ってみたい。商品の企画から資金の調達、販売まで自分たちで行うことを通じ、地域社会との結びつきを強めながら起業家マインドの醸成を図りたい」という声が上がリ、総合的な探究の時間を活用してその具体化に取り組むこととなった。

普通科教員グループも生徒の意向を尊重し、実現に向けたサポートを行うため令和2年度に「総合的な探究の時間」を活用した教育課程の編成を行うとともに、地域の商工会議所を通じての民間の協力企業の確保やクラウドファンディングの可能性調査などを実施した。

現在計画は3年目に入っており、通常の授業では得ることのない様々な経験をしながら、「香川高校の学校グッズを開発し、香川高校のPRを行う」という生徒が設定した目標の実現に向けて一歩ずつ進んでいるところである。

(2) 起業家教育の必要性について

香川高校の専門科には「生活デザイン科」「食物調理科」「保育科」の3科があり、これまでもそれぞれの科が地域と連携して学びの場づくりを行ってきた。例えば生活デザイン科は地元自治体である宇部市と連携し、市のプロモーションビデオ作成や郷土芸能（神楽）の保存活動に関与、食物調理科は地域の高齢者グループとの料理講習会を開催、保育科は保育施設や高齢者福祉施設との交流など様々な活動を行っている。

今回の普通科での起業体験学習は、これまでの専門科での取組を踏まえながら更に一歩踏み込んだ活動、即ち母校をPRするための商品の企画から、資金調達、製造（高校であるのでこの部分は委託実施）、販売戦略といった一連のメカニズムを学ぶことで将来のキャリア形成に役立つことが期待される。特に地方では高齢化の進展に伴う後継者不足や、IoTの加速による市場の寡占化などから廃業・開業が進み、地域の活力低下のひとつの原

因ともなっており、高校生の段階から起業家マインドに触れ、自らのキャリア形成の選択肢に起業を加えることは極めて意義あることと考えられる。

（３）地域の中での学校教育

上述のように、これからの地域社会の活性化を図るためにも起業家マインドを持った高校生人材をキャリア教育の一環で育成することは学校の役割であるが、そのためには現実問題として適切な助言・指導者（メンター）の存在が欠かせない。教員は指導カリキュラム（教育課程）までは作成できても企画書の作り方や販売戦略の立て方、資金調達の方法などを具体的に教えることは困難である。

香川高校ではその対策として地元商工会議所への相談を行い、そこからデザインやマーケティング戦略に造詣の深い専門家の紹介を受け、商品の企画段階から実際の商品化まで、生徒たちに適切なアドバイスや指導を折々に行ってもらったこととした。

また商品を実際に（委託）製造し、販売に至るためには資金が必要となるが、その方法の一つとしてクラウドファンディングが考えられることから、地元金融機関関連会社の専門家に企画発表審査段階から参加を得て、クラウドファンディングを活用する場合のポイントの指導を受けている。

これら地域の専門家の協力により、生徒が作成した商品アイデアのプレゼンテーション（審査会）が行われ、実現可能性の高い企画として「健康体操を行うためのオリジナルタオルの製作」が取り上げられた。専門家からは「単に体操とタオルを組み合わせるだけでなく、そこにストーリー性を持たせることが商品化の肝。知恵を絞ってはどうか」の示唆がなされ、後日生徒たちからオリジナル健康ダンスの開発や卒業生によるダンス曲の制作が提案された。

（４）今後の取組

令和３年度においては第２年次生徒によるタオルとダンスの開発が進められた。タオルについては、タオルサブリーダー班を中心にデザインを考案し、プロのデザイナーのアドバイスを受けながら完成させた。ダンスについてはダンスサブリーダー班を中心に振り付けを考案した。

また、資金調達のためのクラウドファンディングについては、クラウドファンディング運営会社の協力のもと、令和３年１２月２４日から令和４年２月２８日にかけて、目標金額９０万円を掲げて実施した。１月末の時点で目標額の３分の１に満たない状況であったが、学校ホームページやSNSの活用、香川高校同窓会や地元商工会議所への周知などを通じて支援額を増やした。さらに、２月に入って地元新聞社・テレビ局の取材を受け、夕刊掲載やテレビ放送されることで認知度が高まった。２月末のクラウドファンディング終了時には目標額を大きく上回る１０２万７千円の支援をいただくことができた。

クラウドファンディングと並行して、地元企業に依頼してオリジナルタオル生産を進めており、２月末に完成した。オリジナルタオルはクラウドファンディング返礼品として支援者に贈呈するとともに、タオルダンスの普及に向けて本校生徒や地域の方々へ配付した。

さらに、商品のセールスポイントとなる「タオルとセットとなるオリジナル健康ダンス」についても、これまで香川高校と様々な連携を行ってきた地域の保育施設や高齢者福祉施設等において披露することで、商品にストーリー性と親和性を持たせ、付加価値を生むこととしている。

令和４年５月には、第３年次生徒がレコーディングスタジオにおいてタオルダンス用に開発されたオリジナル曲のレコーディングを実施した。作曲は香川高校卒業生が、作詞・歌唱は本校普通科の生徒が行った。６月には、香川高校文化祭においてオリジナル曲を全校生徒の前で披露した。７月にはタオルダンス動画撮影を実施し、編集作業を経て９月に動画を完成させた。

今後は、動画を有効活用しながら、「香川高校オリジナルのタオルを使った健康ダンス」を宇部市民の方々に広く普及させていきたいと考えている。

＜山口県＞（種別：団体）山口県立徳山総合支援学校PTA

推薦理由

徳山総合支援学校PTAでは、長年、家庭と学校が連携して児童生徒のキャリア教育の充実とともに、多くの保護者が不安や困難さを感じている「安心・安全な生活」「将来の豊かな生活」の実現に関する取組を重点的に進めてきた。

1 安心・安全な生活の実現

(1) 緊急時に対応する取組

毎年6月に保護者を対象としたAED講習会を企画し、地域の消防署員から胸骨圧迫（心臓マッサージ）等の心肺蘇生法やAEDの使い方などについて継続的に学んでいる。

(2) 防災への取組

PTAに防災・広報部を立ち上げ、防災だよりの発行や防災グッズの校内展示を行っている。特に、令和4年度は、保護者のアンケート結果に基づく防災用品の購入、児童生徒一人ひとりの防災リュックの製作と運用規約の作成など、恒久的に活用できるシステムの構築と、児童生徒及び保護者、教職員の防災意識の高揚を図っている。

(3) ヘルプカードの作成

周囲の人に依頼したい配慮や手助けの内容を記載した「ヘルプカード」を、すべての児童生徒について個別に作成するとともに、カードの意義や活用方法を広く周知するなど、手助けが必要な人と、手助けをしたい人を結ぶ活動を実施している。

(4) 新型コロナウイルスへの対応

コロナ禍においても学びを止めないよう、運動会や文化祭での消毒活動や3密回避活動等について、PTA内で協議し、学校の取組を積極的に支援している。

2 将来の豊かな生活の実現

(1) 生涯学習につながる取組

地域の演奏家等（管弦楽団、和太鼓、地元歌手等）を招き、障害のある児童生徒が様々な感性を磨くとともに、将来に渡って音楽に親しむことを目的とした、ふれあいコンサートを、毎年実施している。

(2) 将来の生活について考える取組

福祉事業所や研修施設への視察、外部講師による性に関する指導や障害者年金等をテーマとした保護者対象の研修会を実施している。また、毎年度末には「卒業生の保護者を送る会」を実施し、和やかな食事会を通して、卒業後の生活に向けた不安の軽減や、保護者同士のつながりの強化を図っている。

(3) 地域とのつながり

PTAが集めた新聞紙で児童生徒がリサイクルごみ袋を製作し、地域に配布する活動により、地域住民から感謝の声を得ている。

学校に対する理解を一層促進するための情報発信として、学校ブログ（「とくそう最前線」）内にPTAのカテゴリーを設定し、写真や文章を積極的に、継続的に投稿している。

上記のように、多くの特別支援学校の重要なテーマとなっている「安心・安全な生活」「将来の豊かな生活」の実現に焦点化し、毎年度、企画・立案・実行・評価のPDCAサイクルに沿った主体的・組織的な取組の実践は、他の特別支援学校のPTA活動充実の参考になる。

<徳島県>（種別：学校）勝浦町立横瀬小学校

推薦理由

勝浦町立横瀬小学校では、地域や専門家との関わりを通して、主体的に地域の課題解決を図る中で児童の判断力や実行力を育て、地域評価から自己肯定感を高めることを目標としたキャリア教育に学校全体で取り組んでいる。令和3年度は「100年先を創る起業家育成事業」（徳島県教育委員会）の研究校として指定され、みかんや恐竜など地域の特産・特徴を生かしたものづくりと販売活動を実践した。

【 具体的取組 】

(1) 3年生の取組

生産者としての願いや消費者からの声を児童全員で歌詞にし、地元の声楽家に作曲していただき「かつうらみかんの歌」としてCDを製作した。

(2) 4年生の取組

身近な環境問題やSDGsについて学び、廃棄されるみかんの皮で染めたエコバッグを製作し、環境保全の大切さを地域に呼びかけた。

(3) 5年生の取組

古代米を使った「田んぼアート」(図柄を恐竜の足跡)を製作し、観光スポットとしてのPR活動を展開した。収穫した古代米は地元ケーキ店と連携し、クッキーにした。

(4) 6年生の取組

恐竜化石で町おこしをしている勝浦町を応援するため、恐竜の研究や市場調査を行い、木製の恐竜キーホルダーなどのオリジナルグッズの開発に取り組んだ。

(5) 横小マルシェの開催

各学年が学習の中で作成した成果物を商品として、JA産直市で販売した。その売上金から地元病院に歩行器を寄贈し、社会貢献活動へとつなげることができた。

【 成 果 】

横瀬小学校のキャリア教育は、主体的に地域の課題に向き合い、地域貢献活動を行うことにより、他者評価を得て自己への肯定的な気付きを促し、児童のキャリア意識の醸成や自己肯定感の向上に効果的な役割を果たしている。また、本県小・中・高等学校教員対象の「キャリア教育推進フォーラム」においても、活動内容を動画配信にて発表するなど、その成果の普及にも努めている。

＜徳島県＞(種別：学校) 松茂町立松茂中学校

— 推 薦 理 由 —

松茂町立松茂中学校では『近未来の社会を力強く生き抜く、自立した生徒』の育成(具体的な目標は以下(1)～(3))を目指し、キャリア教育を学校全体で実践している。令和3年度は「100年先を創る起業家育成事業」(徳島県教育委員会)の研究校として指定され、STEAM教育や「松茂プライド・プロジェクト」を中心とした組織的・系統的な取組を継続している。

- (1) 異年齢者との幅広い交流や豊かな体験活動を通して、夢や目標をもって努力し、主体的・協働的に学び続ける生徒を育成する。
- (2) 地域の人・物・自然・産業等、郷土について深く学び、豊かな人間性、社会性、望ましい職業観をもつ生徒を育成する。
- (3) STEAM教育(令和3年度導入)を通して、おもに6つの力〈協力してつくる力・伝える力・知識と論理的思考力・批判的に考える力・創造(想像)する力・失敗を恐れない気持ち〉を育成する。

【 具体的取組 】

(1) 松茂ゆめ・ミライ塾の開催(令和元年度より開始)

様々な分野で活躍する魅力的な大人との出会いから生き方を学ぶことや未来の自分を思い描き、自己と真正面から向き合う時間を積み重ねることを通じ、近未来を力強く生き抜く自立した生徒の育成を目指す。

(2) 松茂プライド・プロジェクト(全学年PBL化)

STEAM教育がねらいとする課題解決能力・論理的思考力・チームで取り組む経験・プレゼン能力の向上等を旨とし、教科横断的な学びの中で「ゼロから1を生み出す学び」を体験する。また、全学年プロジェクト化することにより学びの方向性を明確にし、すべての生徒のゴールに向かう推進力を生み出す。

①第1学年…「防災リーダー育成プロジェクト」

災害に遭遇した際に自分が生き残ったり、自分の大切な人を守ったりすることができる力を身につけるために、多様な角度から災害や防災について考える。

②第2学年…「松茂町魅力化プロジェクト」

公認キャラクター「まっちゅん」の商品化に向け、アイデアを出し合う。

③第3学年…「松茂町課題解決プロジェクト 松茂町議会～15歳の提言～」

各学級4つの党と8つの委員会を組織し、松茂町の近未来に関心を持ち、現状把握・分析を経て課題解決策を考える。

(3) 地域連携の取組(放課後や松茂町交流拠点施設マツシゲートを活用した取組)

校外における異年齢者との幅広い交流を通して、ふるさと松茂の良さや課題を再発見するとともに、町の魅力発信や課題解決への実践力を身につけ自分自身が魅力的な大人になろうとする意識を育てる。

①「語り愛スペース」の開催

多感な思春期を生きる子どもたちにとっての心の憩いの場所づくり。

②「松茂中イノベーション・ラボ」の設立

町交流拠点施設マツシゲートを活動拠点とし、外部人材の協力により運営する。

ロボット製作、3Dプリンター、ドローン、映像編集等の技術習得等

③松茂マルシェ出店に向けた商品作り・販売活動

干し芋づくり（紅はるか苗植え&収穫ボランティア）

松茂マルシェで販売する商品づくり・販売活動ボランティア

売り上げの一部を車いすの寄付やベトナムタンソン村への支援に活用

④高校と連携した取組

藍の苗植え体験&阿波藍のたたき染体験（城西高校との連携）

⑤「松茂ではちみつを採ろう！」プロジェクト

SDGsの一環でレンコン畑に蜂箱を設置し蜂蜜を採取（商品化へ）

ミツバチの働きを知ることにより、環境の重要性、食の大切さ等を学ぶ。

【 成 果 】

地域や関係機関との連携を強化し、学校全体で組織的・系統的なキャリア教育を実践することで、生徒に「近未来の社会を力強く生き抜くための資質・能力」を育成し、自立心の向上や将来を見通したキャリア意識の醸成を図っている。3年間の体系的なプログラムをとおして、常に課題意識を持ち、社会の変化に対応する資質の向上がみられ、自分の在り方、生き方など将来の自分について真剣に考える生徒が増えるなど、本プログラムは生徒の成長に大きな役割を果たしている。

また、本県小・中・高等学校教員対象の「キャリア教育推進フォーラム」においても、活動内容を動画配信にて発表するなど、その成果の普及にも努めている。

<徳島県>（種別：学校）鳴門教育大学附属中学校

— 推 薦 理 由 —

鳴門教育大学附属中学校で「総合的な学習の時間」の総まとめとして3年生によって行われる「徳島未来構想—徳島の未来のために模擬県議会を開こう—」は、今年で28回目の開催となる。これは、平成6（1994）年度に文部省（当時）から「教育課程の基準改善のための教育研究開発」の研究指定を受け、教育課程に位置付けた「未来総合科」における取り組みの一つとして、平成8年度より立ち上げた「徳島独立計画」を原形とする。それから2年をかけて授業の方向性を見直し、平成10年度から現在の形となった。

この授業は、15年後のより良い徳島県を築くために、様々な視点から徳島の未来について考え、中学生なりに政策を構想・提言して議論を行うものである。「模擬県議会」当日は体育館を会場に、終日3年生全体で議論し、保護者にも公開している。また、活発に意見を交わす3年生の様子を2年生が見学し、次年度の活動に引き継がれることで、もはや伝統的な活動の一つとなっている。

この取組については、例年のように地元テレビ局や新聞社などの取材を受けて広く報道されているほか、昨年度には徳島県議会議員が視察に訪れ、高い評価をいただいた。

【具体的取組】

各クラスで模擬政党を作り、まず党首を中心に党名（ふきの党・模範解党など）や党の理念を考える。そして、10の委員会（教育、観光、産業、文化、医療、環境、福祉、運輸・通信、安全、労働）に分かれて、新聞記事や県・各市町村のホームページなどの記事を広く集め、徳島の現状や課題を調べ、多面的・多角的により良い徳島を築くための政策を考え、議案書にまとめる。「模擬県議会」では、その議案書をもとに、各クラスから2～3の委員会が登場して政策を発表する。その後、その提言に対して全体で質疑応答を行う。建設的で活発な議論するために、生徒は、各党（クラス）・各委員会の中で十分に調査・検討し、政策を練り上げていく。このような

活動を通して、予測の難しい現代社会が抱える課題を解決していく力を育成している。

【成果】①生徒一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な、基盤となる能力や態度を育成し、②主体的に課題を発見していく力や創造性を育み、③地元自治体等と連携し、地域社会の課題解決に取り組む等、生徒の地元への理解・愛着・誇りを育んでいる。

＜香川県＞（種別：学校）観音寺市立豊浜中学校

推薦理由

豊浜中学校は、全校生徒169人、8学級（各学年2、特別支援学級2）の学校である。教育目標は、「志をもち、高さを求めて自ら考え行動する生徒の育成～学びに喜びを感じ、豊かに表現する生徒の育成をめざして～」である。生徒の実態は素直で従順であり、大人や教師の指導について指導にそのまま従い自らの考えをもち判断することは少ない傾向にある。これからの予測不能な社会を力強く生き抜く生徒を育成するには、自ら考え行動する生徒の育成が求められる。そこで「生徒主体の学校」を中心に据え、教育活動を進めている。また、令和2、3年度の2年間、県のキャリア教育モデル校事業の研究指定を受け、テーマを『未来を見つめ、自己の生き方を主体的に選択できる生徒の育成～実質的なキャリア教育の実践と「キャリア・パスポート」の活用の工夫を求めて～」とし、研究に取り組んできた。その目標は、次の3点である。

- （1）生徒一人一人に正しい社会観・職業観を育て、望ましい社会人としての資質を養う。
- （2）生徒一人一人が自分の進路を積極的に開拓していこうとする強い信念と意欲をもち、個性を生かした将来の進路を主体的に選択し、決定できる能力や態度を育てる。
- （3）生徒一人一人が将来に夢や希望をもち、その実現に向けて努力するよう、発達段階に応じた組織的・系統的なキャリア教育を推進する。

また、これらを達成するための重点指導項目は、

- （1）「学習と社会を結び付ける」各教科におけるキャリア教育の推進
- （2）「体験と学びを結びつける」キャリア教育の要としての特別活動
- （3）「過去と未来を結び付ける」キャリア・パスポートの充実

としている。

今年度も香川県中学校教育研究大会特別活動部会の研究発表校として、研究を継続している。

研究組織は「地域を拓く」「なかまと拓く」「未来を拓く」の3つのプロジェクトから構成されており、感染症の影響を受けたとはいえ、校内に閉ざされることなく地域や異校種間の交流等にも取り組んでいる。

また、本研究校の特徴は、取組の日常化とも言える。取組そのものが、特別なことを新たに始めるのではなく、これまであった資源や取組を当該校生徒の強みと課題を分析し、目標とする生徒の姿と照らし合わせて、これまでの取組を検証、再考し研究している。「課題を見だし」「話し合い」「合意形成を図る」「意思決定をする」経験を通して、生徒一人一人が学校生活での課題を自分事としてかかわり、主体的に活動するよう中学校生活の3年間を見据えた取組となっている。

＜愛媛県＞（種別：学校）四国中央市立三島東中学校

推薦理由

四国中央市立三島東中学校では、キャリア教育の中核として総合的な学習の時間を「いぶき」と名付け、全校のテーマを『豊かな生き方を考える探究活動』と設定し、取り組んでいる。

平成28、30、令和3年度には公益社団法人愛媛県紙パルプ工業会が主催する「四国中央市ものづくり体験講座ワークショップ等開催業務」事業の各講座を1年生が、各年9回受講した。その他、愛媛県総合科学博物館学芸員・愛媛県紙産業技術研究所紙産業技術センター研究員・愛媛大学大学院農学研究科教授・大王製紙株式会社シニアアドバイザー等による講義や、製紙・加工業者への工場見学、水引細工を作る体験講座、リージョナルデザイン株式会社による発表ワークシート作りの指導等、充実した内容の講座を実施した。地元の代表的な産業である紙産業の一連の仕組みを系統立てて体験・学習できるプログラムなど地域の伝統や文化・産業に直接接し、現状や課題について探究し、地域との関わりについて具体的に考える時間になった。

令和4年度は、1年生では、1人1台端末を活用して、職業の適性検査を行い、「自分について知る」ことを中心に学習を進め、関心のある職業や進路について調べ学習を行った。また、2年生は、少年の日の記念行事として、『自分の将来について考えよう』を題材に、株式会社四国中央キャリアのコーディネートにより、生徒が興味関心のある職種を選択できるよう、屋台村方式による市内各業種の講演等を行い、仕事について考えさせる予定である。

また、2年生での職場体験学習実施に当たり、コロナ禍においてどれだけの事業所が受け入れ可能か、どのように考えているのかを知るために、これまでの受入事業所等と新規の事業所等、約40か所にアンケートを送付し実態把握に努めた。その結果、ほとんどの事業所等は、「できる」と返答があったため、今年度は5日間の「職場体験学習（えひめジョブチャレンジU-15事業）」に取り組んだ。3年生では、総合的な学習の時間を人権・福祉・環境問題や地域文化を考え、地域の一員として地域の諸問題を捉え、自分との関わりの中でよりよい解決を目指して行動できる生き方を考える時間としている。

これらの取組は、学校と地域との信頼関係や連携を強化し、生徒一人一人が夢や希望を持ち、主体的に未来を切り拓き、社会に貢献できる職業人として自立することができる力の育成につながっている。また、これらの取組を積極的にホームページで発信することで、地域や保護者の理解や協力を得ることができている。

＜愛媛県＞（種別：学校）愛媛県立長浜高等学校

推薦理由

愛媛県立長浜高等学校は、小規模校であることを生かすとともに、生徒の発達段階に応じて、きめ細かなキャリア教育の推進に取り組んでいる。特に、長高水族館の活動や地域活性化の取組を通して、生徒一人ひとりの将来の目標達成に向けた取組を実践している。

○インターンシップの実施

2年生の就職希望者全員が4日間のインターンシップを実施し、望ましい職業観・勤労観の育成を図る取組を行っている。

○企業見学の実施

2年次に全員が企業見学を実施し、早期に将来の職業について体験する機会を設けるとともに、就職試験前にも企業見学をさせることで雇用のミスマッチを解消し、離職率を低減させる取組を行っている。

○長高水族館の活動

水族館部のみが活動しているのではなく、特色ある学校づくりの中核として教育活動に位置付け、学校全体で取り組む活動を通して、キャリア形成につなげている。

○キャリア教育に係る情報発信

進路課通信を毎月発行しているほか、進路状況等についても、ホームページに内容を掲載するなどして保護者にも情報発信している。

○地域活性化の取組

地域の土産物の情報発信を強化する企画を考案したり、地元魚類の有効活用を研究したりすることで、生徒目線から過疎化に悩む地元地域の活性化に取り組み、将来、地域を担う人材の育成を図っている。

＜愛媛県＞（種別：学校）愛媛県立今治特別支援学校

推薦理由

○キャリア教育の全校体制による取組

学校マニフェストに年齢段階に応じたキャリア教育の推進を明記し、小学部から高等部までの組織的・系統的なキャリア教育全体計画を作成している。職員会議や研修会等で評価、分析を行い、教師の指導力を高めるとともに、各学部の実態に応じた指導の促進を図っている。

卒業生の職場定着支援についても、地域の相談支援事業所や障害者就業・生活支援センター等への情報提供だけでなく適時関係機関と連携した支援を行い、アフターケアに努めている。その結果、平成30年度から令和2年度までの3年間に高等部を卒業して就職した32名のうち、離職したのは4名で定着率は87.5%と高い水準を保っている。

○地域に貢献する体験活動の実施

毎年1月に開催される市内防災フェスティバルで使用する灯籠ろうそくや、結婚式場を会場としたイベントで使用するキャンドルを高等部の作業学習(キャンドル工芸班)で作成し、納品している。生徒たちは、自分たちの製作物が地域の行事に貢献しているという意識をもって製作に取り組んでいる。また、インターハイの記念品(タオルハンカチ)の袋詰め作業など、県全体で取り組むイベントにも貢献している。

○他校種等と協力したキャリア教育の推進

生徒が身に付けた作業能力を生かし、他校との交流及び共同学習、後輩への出前授業等を実施している。

高等部においては、勤労の意義について理解するとともに就労に必要な知識や技能の習得を目指し、愛媛県特別支援学校技能検定の各種目に係る活動に取り組んでいる。飲み物を提供する接客サービスや生鮮食品を袋詰めする販売実務サービスに係る活動を、他校生徒との交流及び共同学習において実施し、生徒が習得した知識や技能を他校生徒へ説明したり、役割分担して練習に励んだりしている。また、自治体や企業に納品しているキャンドルの作り方を小学部中学部の児童生徒へ指導するなど、就労に必要な態度や技能の指導の充実を図っている。

<高知県> (種別：教育委員会) 香美市教育委員会

推薦理由

香美市では、「郷土を愛し、未来を拓く人づくり」～学び、つながり、未来を拓く～を基本理念として、地域住民が「探究」を合言葉に生涯にわたって学び続ける人を目指す「香美市よってたかって教育」を進めている。そして「キャリア教育」を中心に据え、他の2つ(コミュニティ・スクール、小中一貫教育)とともに香美市の教育の基盤として、様々な教育課題解決に向けて教育施策を実施している。

また、平成25年度から3年間、本県「キャリア教育推進地域事業」の指定研究を受け、市内全小中学校を「キャリア教育推進校」と位置付け、研究を進めてきている。この実践の中で、香美市の教育的資源(人・自然・伝統・産業・保育所から大学まである教育的環境など)を活用し、「学力向上」「基本的生活習慣の確立」「社会性の育成」を3本柱として取り組んでいる。

以下、代表的な取組である「キャリア・チャレンジデイ」を紹介する。

キャリア・チャレンジデイは、市内3中学校2年生(当初は1・2年生)を対象として、職業観や勤労観を育むことを目的とした体系的なキャリアプログラムで、「職業の役割とそれに必要な能力との関係」について考え、出会った人々の生き方や考え方に触れる機会とすることをねらいとしている。事前プログラム実施後、コロナ禍以前は、高知工科大学を会場に、市内外から20数社の講師(すべてボランティア)による対面での特別授業を行った。(R2中止、R3オンラインによる実施、R4ハイブリッドにより開催予定)

事後プログラムにおいては、振り返りとともに、自分の現状と将来について、「意思・役割・能力」の視点で見つめ直す機会となっている。

また、チャレンジデイ当日は講師陣をはじめ、地元山田高等学校生や高知工科大生、PTA、民生委員、議員、市役所の職員など約100名が、サポーターや案内係といったボランティアを献身的に行っている。この活動は、まさに香美市が目指す「よってたかって教育」の代表的な学習の場となっている。

この他にも、小学校版チャレンジデイであるキッズチャレンジデイや地域の更なる魅力を発見する「ふるさとプログラム」など多くの事業を実施することにより、系統的にキャリア教育の充実を図っている。

<高知県> (種別：学校) 高知県立室戸高等学校

推薦理由

室戸ユネスコ世界ジオパーク、日本ジオパークに認定されている高知県東部の室戸市に位置する高知県立室戸高等学校は、地域への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、グローバルな視点をもって地域の発展に貢献できる人材の育成を目指している。

地域唯一の総合学科高等学校として、「産業社会と人間」や学校設定科目「ジオパーク学」など特色ある科目を設置し、保護者、関係機関、地域の方々の多くの支援と協力のもと、地域資源を有効活用しながら、体験的な地域理解や地域の課題発見解決学習に取り組んでいる。さらに、令和元年度より3年間、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、ESDの視点による地域貢献活動の体系化等を通じたキャ

リア教育の充実が図られている。

(1) 核となる地域との協働による探究的な学び

1年次の「産業社会と人間」では、特にジオパークに関連する学習を「室戸学」と名付け、生徒同士が意見を出し合い、多面的に地域を認識する活動や、体験を踏まえて地域資源の活用法について考える活動、自分の将来と地域との関わりについて考える活動などを、地域や産業界等とも積極的に連携を図りながら行っている。各活動は、身近な事柄に目を向け、改めてその価値を見いだすなかで、地域に対する興味・関心を高めるとともに、地域の課題に対して「自分にできることは何か」など、自らの将来や自己の在り方を考えるきっかけにもなっている。

2年次の「続・産業社会と人間」（総合的な探究の時間）では、RESAS（地域経済分析システム）を活用したデータ分析の手法により、根拠を示して地域課題の解決策を提案する「室戸市活性化アイデアコンテスト」等の実施を通して、郷土への理解をより深化、発展させている。また、2年次の学校設定科目（選択）「ジオパーク学」では、世界ジオパークや自然、歴史・文化遺産、地場産業について学び、その資源を最大限活用した地域活性化の方法について考える取組を室戸ジオパーク推進協議会の全面協力のもと実施している。

3年次の「課題研究」（総合的な探究の時間）は、「地域に関わることをミッションとして、生徒が自分で決めたテーマについて調査・研究し、様々な課題の解決に取り組み、その成果を発信することで、多様な他者との関わりの中で、自己の将来の生き方や進路について深く考える取組となっている。令和3年度には、「地域の特産品『サンゴ』の認知度を上げる」、「室戸市の空き家活用法を提案する」、「室戸の産業を小学生に広める教材を作る」、「室戸の海岸から環境問題について考える」等のテーマが設定された。事後のアンケートでは、「将来、室戸で生活したい、何らかの形で地域に関わり、貢献したい」等の肯定的回答が約8割を占めるなど、着実に地元への理解・愛着・誇りが育まれていることがうかがえる。

(2) 地域貢献活動の推進

その他、防災教育を軸とした地域との連携も積極的に行っている。平成28年度より各クラス2名の生徒からなる防災委員会を設置し、避難訓練や校内防災意識アンケート調査の企画・実施を行うなど、生徒の視点を生かした防災活動を実施している。さらに、室戸市防災対策課へのインターンシップや「避難所一日宿泊体験」、「高校生津波サミット」などの校外活動にも積極的に参加し、体験から得た知識やアイデアをもとに、地域の防災活動活性化に向けた情報発信等も行われている。

また、女子硬式野球部の地域清掃ボランティアや美術部の子ども食堂の看板制作、生徒会による交通安全活動など、生徒主体となる地域貢献活動も継続的に行われている。これらの活動は、生徒に地域社会との関わりをより深く意識させるとともに、生徒の地元への愛着や地域活性化への意識の向上につながっている。さらに、高校生による入試説明会や小学生対象イラスト教室、保育園への手作りマスクのプレゼントなどの異年齢との交流は、地域のコミュニティづくりの一翼を担うと同時に、豊かな人間性を育む大切な機会ともなっている。

<福岡県>（種別：学校）吉富町立吉富小学校

推薦理由

研究主題「なりたい自分をめざし、深く考え、よりよく生きていく児童・生徒を育成するキャリア教育の在り方～キャリア教育の視点を生かした教育活動を通して～」を設定して下記の取組を行った。

(視点1)小・中学校の系統性を重視したカリキュラム・マネジメント

(1) キャリア教育の視点に立ったカリキュラムの明確化

全職員が「いつ、どのような学習を行い、どのような力を付けるのか」を意識して指導することができるよう年間指導計画を作成した。

(2) キャリア教育の視点を明確にした授業づくり

令和元・2・3年度福岡県重点課題研究指定・委嘱地域（校）

（重点課題：社会の創り手を育むキャリア教育の推進）

研究発表会を実施した。

(3) 「キャリア・パスポート」を活用した学級活動（3）の授業づくり

「自己評価」「他者評価」の観点から「キャリア・パスポート」を活用した学級活動（3）の授業づくりの

方策を整理した。

(視点2)地域と連携した教育活動の推進体制づくり

(1)小・中学校の連携を円滑化する推進体制の確立

小学校と中学校において共通する3つの部会「カリキュラム部会」「授業づくり部会」「学活、キャリア・パスポート部会」を立ち上げ小・中学校全職員がいずれかの部会に所属し研究を推進する体制を整えた。

(2)地域と連携した取組の推進

地域で活躍するひとを招聘するなど、キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」を育成することができるよう人的環境の整備に向けて関係機関との連携強化を図った。

3年間の取組により、キャリア教育における基礎的・汎用的能力が高まり、なりたい自分を目指し、深く考え、よりよく生きていく児童の育成に資する価値ある研究となった。

<福岡県> (種別：学校) 吉富町外一市中学校組合立吉富中学校

推薦理由

なりたい自分をめざし、深く考え、よりよく生きていく児童・生徒を育成するキャリア教育の在り方
～キャリア教育の視点を生かした教育活動を通して～

子どもたちが自己の将来の夢や目標と日々の学習をつなぎ、目標の達成に向けて自分にできることを考えて努力したり、自分の成長や課題を振り返って、次の学習につなげたりすることができるように、以下のような子どもの姿を目指した。

- 他者の考えを理解して、自分の考えを伝え、協力・協働する子ども
- 自分のよさを理解して、個性を発揮する子ども
- 課題を発見して分析し、計画を立てて見通しを持って実行しながら振り返る子ども
- 働く意義を理解して将来をイメージし、情報を収集しながら主体的に進路を決定する子ども

キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力である「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を基に、具体化した資質・能力をキャリア教育の視点として意識しながら次のような取組を進めた。

- 小・中学校の9年間の系統性を意識するため、共通様式にしたキャリア教育年間指導計画を付加・修正しながら完成させた。
- 学びを自己の将来につなげるとともに、日々の学習や生活を大切にする気持ちが育つように、日々の授業や生活を振り返る「ふりかえりノート」で、毎日の授業や生活で何を学んだのか、何ができるようになったのかという短期的な振り返りを積み重ねた。教師は、めあて、まとめ、振り返りのある授業、キャリア教育の視点を意識した授業を実践した。
- 外国語科(英語科)の授業で作成した「地域を英語で紹介したパンフレット」を町役場で展示してもらい、生徒に達成感を味わわせた。
- キャリア・パスポートにおいて、「なりたい自分」について深く考えることができるように、生徒の記述に対する教師のコメントを工夫したり、様式をよりよく変更したりした。

また、小学校・中学校の連携及び地域との連携・協働を推進するため、次のような取組を進めた。

- 小・中学校の3部会長が集まり、情報交換を行うことで連携を深めた。
- コミュニティ・スクールと連携した「ようこそ先輩プロジェクト」を立ち上げ、地域の方々に仕事や職業について講話をしてもらう出前授業を行った。
- 校内の「花いっぱい」の取組の中で、地域の方々の協力を得ながら、校舎内外の花壇づくりを行い、「きれいな町づくり」に取り組んだ。
- 毎年開催される、吉富町の海岸清掃活動(ボランティア活動)に、たくさんの児童生徒が参加し、地域の方々と一緒に活動した。

＜福岡県＞（種別：学校）福岡県立朝倉東高等学校

推薦理由

福岡県立朝倉東高等学校では商業に関する学科の目標として「進路実現に向けて主体的に学習に取り組み、挑戦する生徒の育成」、「職業人として必要なアントレプレナーシップや豊かな人間関係を構築する力の育成」、「地域社会から信頼され、地域経済の活性化に寄与できる生徒の育成」を掲げている。

この目標達成の一環として、令和4年1月11日に、生徒が主体となって運営する「株式会社 Easter Inc.」（イースター・インク）を設立した。高等学校の株式会社設立は国内で5例目、本県では初の取組であり、今年度から本格的に活動を始めている。商業に関する学科で学ぶ生徒全員が株主となり、在学中に様々な場面で経営に携わっている。経営理念に「笑顔・創造・志」を掲げ、高校生ならではの目線で未知のものを創造し、誇りとやりがいを持ち、活動を通じて地域に笑顔を届け、地域貢献に努めることを目指している。

今年度の具体的な事業活動としては、

- ① 地元朝倉市の「道の駅原鶴ファームステーションバサロ」における販売（月2～3回、土曜日）をはじめ、各種イベントの運営・出店
- ② 地元企業と連携した商品開発
- ③ 朝倉市原鶴での音楽イベントの企画・運営
- ④ 地元バス会社との連携による旅行プランの作成
- ⑤ 地元企業からの依頼によるアプリ開発

等が挙げられる。3年生の生徒が中心となり、「課題研究」の授業の中で担当部署ごとに課題を設定しその解決に向けて活動している。特に、商品開発では、生徒がアイデアを考え試作まで行った後、地元企業への協力依頼から打合せ、改良を重ねていく。このため、企画した全てのアイデアが商品化に至る訳ではない。生徒にとって実際のビジネスの場面を想定した実践的・体験的な学習活動となっている。現在は、令和2年度に福岡県の六次化コンクール奨励賞を受賞した「メシダマル」（加工みそ）や、令和3年度新商品の「朝倉ドレッシング」、「くろっきー」（クッキー）を中心に、常設店舗や地域のイベントで販売している。

株式会社の運営を通して、生徒は様々な課題に直面し試行錯誤する場面がある。そこで、当該校では、朝倉市役所、朝倉市商工会、久留米大学をメンバーとした「朝倉東高等学校地域連携協議会」を立ち上げている。それぞれの立場からの提案や、高校生が抱えている課題への助言を受ける等、生徒にとって自らの考えを広げ深める学習活動となっている。

以上のように、当該校は地域を舞台にして生徒の課題発見能力や創造性を育てており、本県のキャリア教育の発展に大きく寄与していることが認められる。

＜福岡県＞（種別：団体）久留米市立南筑高等学校PTA

推薦理由

（1）「保護者のための進路ガイダンス」実施の経緯

南筑高等学校では、PTAと学校が連携するキャリア教育の一貫として、PTA主催による大学訪問を実施してきた。しかし、令和2年度はコロナ渦により実施不可能となり、令和3年度も引き続き中止となった。そこでPTA学年委員と進路指導部が何度も協議を行う中で、単なる中止ではなく行事内容そのものを見直し「何がキャリア教育となり、生徒の役に立つのか」を模索し続けた。その結果、「生徒向けに行っている進路ガイダンスを保護者に対して行うことで親子間の進路意識と知識を近づけることができるのではないか」という結論に至り、「PTA主催の校内進路ガイダンス」を企画立案した。

（2）実施方法

外部業者の協力を得ながら、本校生がよく進学する大学・短期大学・専門学校及び警察や自衛隊といった進路先にも協力・参加して頂くことができた。大学等の調整は外部業者に依頼し、聴講希望は進路指導部と学年会がとりまとめ、当日の司会や受付などの会の運営はPTA役員を中心に行った。

また、感染対策の一環として全体会は各教室を結んでのリモート形式で行うことにした。これは国の補助で賄えなかったHR教室にPTAの補助で令和2年度テレビモニターを設置されたことが活動の後押しとなったといえる。

(3) 実施状況

令和3年8月に初めて「保護者のための進路ガイダンス」を計画したところ全学年で140名の参加希望があったが、福岡コロナ特別警報それに続く緊急事態措置の実施により中止となった。しかしながら学年委員の熱意により、令和3年11月に3年生保護者を対象に実施し84名の参加があった。コロナ禍で保護者が来校する行事や機会がなくなっていたこともあり、参加者からはガイダンスの内容も含めよかったと感謝の言葉を聞くことができた。本校は前述の大学訪問のほか、視察研修や人権講座への参加、学食試食会や正門への門松設置等これまで多くの活動が行われてきた。これまでも学校の教育活動に積極的にかかわってきたというPTA役員の思いが学年委員を中心に動き出し、令和4年3月には2回目の実施となった。この時は1・2年生を対象に63名の参加があった。

そして大学等からの説明を直接聞くことができるということで保護者からの要望も大きくなり、令和4年度は7月に全学年を対象に「保護者のための進路ガイダンス」を実施した。3回目となった今回も学年委員を中心に実施計画が練られたが、それ以外のクラス委員も活動に参加するなど活況を呈した。これまでの大学訪問は毎年1大学1専門学校の訪問で、必ずしも保護者のニーズに応えるものとはなっていなかった。コロナ禍で変更せざるを得なかった企画であるが、結果的には多くの保護者のニーズに応えるものとなり、今後新たな活動として定着しつつある。また、この活動を機にPTA活動も再び活動的になりつつあり、就職希望者へのPTA面接指導や学校祭でのPTAバザーの実施など新たな取り組みで学校を盛り上げてくれている。

<佐賀県> (種別：学校) 鹿島市立西部中学校

推薦理由

1 学校の教育活動について

西部中学校は、「豊かな心をもち自らたくましく生きる生徒の育成」の学校教育目標のもと、教育活動に取り組んでいる。生徒自身に「足りないものは何か」「身につけたいことは何か」について学級力アンケートを行った。自分たちの学級の状況を客観視させ、改善点を考えさせることで、生徒自身のメタ認知能力を高め、生徒が見つけだした学校の弱点をもとに、「生きる力」をまとめた。キャリア教育を通して育む「生きる力」について、3年生時点での「社会にでる準備」を最終ゴールとして整理し、自己理解や地域から学ぶ活動を1年生時から計画的に取り組むことができるよう、キャリア教育の構想図を示しながら望ましいキャリア形成を図る生徒の育成を目指している。

2 「キャリア教育の視点」を明確にした授業実践

4つの基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）をそれぞれ3段階に分け、キャリア教育を通して身につけさせたい力を「西部中のキャリア教育の視点2021年度版」としてまとめ、それを全職員に周知し、「キャリア教育の視点」を日頃から意識した授業実践を行い、互いに授業を公開し事後研究会を開き、授業改善につなげた。

3 地域・産業界等の連携協力

- (1) 新聞社から講師を招き、新聞を手掛かりとして「見出しの付け方」「記事のレイアウト」等を学び、総合的な学習の時間に学んだ内容をまとめた新聞や報告書をまとめる際に役立てた。
- (2) 囲碁発祥の地といわれている鹿島。伝統ある囲碁を受け継ぐこと、自分で考え、自分で判断し自分から実行する力を身に付けることを目的に地域の囲碁関係団体の協力を得て行った。囲碁を学ぶことを通して囲碁の楽しさだけでなく、礼儀、主体的に行動することなど、学校生活をより良くするためのものを学んだ。
鹿島市から講師を招き、鹿島の偉人である「田澤義鋪」の生き方についての講演を行い「ふるさと鹿島」を知り、愛する心を育んだ。
- (3) 鹿島市役所から講師を招き「鹿島市でのSDGsの取り組みについて」という内容で講演を行い、自分たちが住んでいる「ふるさと鹿島」をよりよくするためにはどのような方法が考えられるのか、問題点や利点について他の地域での取り組みなどを参考にしながら提言をグループでまとめた。
- (4) 働き方改革・改善に取り組んでいる地元企業のご厚意で、職場の環境改善を指導しているコンサルタントを派遣していただき、教職員の業務や生徒会の活動について継続的に指導をいただいている。

以上、述べたような活動を地域・産業界と連携協力しながら、望ましいキャリア形成を図る生徒の育成に取り

組んでいる。

「地域や地域産業とのつながり」を通して、生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を養う活動を通して、学校の重点目標の一つである「ふるさと鹿島を愛し、学校や地域に貢献する生徒」の育成につなげたいという思いがある。

そのために、生徒と教職員、地域が一体となって、創造的・組織的な学校づくりを推進している。

＜長崎県＞（種別：学校）雲仙市立小浜中学校

推薦理由

雲仙市立小浜中学校は、「小浜を愛し 心豊かに 自ら学ぶ たくましい生徒の育成」の学校教育目標のもと、教育活動に取り組んでいる。地元産業である観光業や農業、漁業の担い手不足が深刻な問題となる中、生徒自身に地域に対する当事者意識を持たせ、自分たちの力で新たな職業、人生を開拓していくためのチャレンジ精神と創造性を育むキャリア教育を「起業体験学習」を通して実践した。

＜主な取組＞

○起業体験学習プログラムを開発・実践

- ・株式の仕組み、株式会社設立、食品営業注意事項
- ・商品・デザイン発表会（プレゼン・資料作成）
- ・株式会社組織の構築（メンバー編制、役割割り振り）
- ・試作品作りに向けた協議（仕入計画、機材手配）
- ・会社説明会、株券販売会（プレゼン、予算案、ポスター作製）
- ・商品販売会（宣伝広報）
- ・株主総会（研究発表会）

○教科等横断的指導への取組

- （１）身に付けさせたい資質・能力の具現化
 - ・各教科等で身に付けさせたい資質・能力を設定、掲示
- （２）オリジナルキャリアパスポートの作成
 - ・教科の繋がりや目標達成度等を視覚的に理解しやすいデザイン
 - ・常に自分の目標を意識できるよう定期的に自己評価できる仕組み
- （３）キャリアボードの活用
 - ・各授業において、その時間に特に伸ばしたい基礎的・汎用的能力が何であるかを視覚的に理解できるよう教室に掲示

＜取組の成果＞

○起業体験学習を行う中で、人と関わる力や課題対応能力などを育成するとともに、地域への理解を深め、愛着を育む機会となった。

○地域の「ひと、もの、こと」について具体的かつ効果的に学ぶことができ、授業以外の場面でも学び合う生徒の育成に繋がった。

＜長崎県＞（種別：学校）長崎県立清峰高等学校

推薦理由

校訓である「誠實」の精神のもと、自分の進む道に心を込めて臨み、他人や自分をいつわることなく「真」をつらぬき生きていくことで、調和のとれた「人間力」を育み、生きる力と、未来を担う人材の育成に努めている。

○個々の進路希望・興味関心に応じた科目選択、時間割作成

・１年生は共通の時間割で、１年間を通して自分に向き合い、己の適性などを知り、職業理解を行い、進路実現に向けて学ぶべき科目を理解し、教師との面談を通して自分に合った系列・科目を選んでいる。２・３年生は、５つの系列に分かれ、一人ひとりが目的意識をもち、基礎学力の向上、専門分野の学習に意欲的に取り組んでいる。

○組織的・系統的なキャリア教育の推進

・総合推進部（キャリア教育の企画・推進を主とする校務分掌）の各学年担当者を中心に、学年ごとに育成する能力を明確にして、3年間を見通した継続的な取り組みを行っている。

第1学年『キャリアデザイン（設計する）』自ら学ぶ力を育成する

自己の能力・適性の理解、勤労観・職業観の育成

第2学年『キャリアビルド（構築する）』自ら考え実行する力を育成する

社会的視野を広げ探究心を育み、社会への認識を深め参画する姿勢を育成

第3学年『キャリアアクション（実行する）』自らの進路を実現する力を育成する

課題解決を図り、表現力を育成し、社会人としての意識や態度を育成

○地元の企業や上級学校、地域と連携したキャリア教育の推進

・1年次には、全員がインターンシップに参加し、地元企業についての理解を深めるとともに、就業に必要な資格・スキルを理解し、適切な職業観・勤労観を養っている。

・毎月第1日曜に実施される清掃ボランティア活動への参加により、地域の人の思いを知り、地域の課題を感じることができ、1町1高校として、地元を支える大きな力として期待されている。

<取組の成果>

○科目選択、時間割作成を通して、生徒自身の将来の夢やライフプランを具現化することで、それらの実現に必要な力の育成につながっている。

○地域との密接な関わりを通じて、地元企業就業への意識醸成とともに、地域への愛着を育む機会となっている。

○総合推進部・進路指導部を中心とした各学年での組織的・系統的な指導によって、適切な職業観・勤労観を持ったキャリア教育を行うことで、社会に適応する力を育成している。

<長崎県>（種別：学校）長崎県立島原翔南高等学校

推薦理由

地元の企業や自治体などと連携しながら、体験活動の充実を図り、地域課題の解決に取り組むなど、生徒の地元への理解・愛着・誇りを育み、地域を担う人材を育成するためのキャリア教育を推進している。

<主な取組>

1年次の「ふるさと学習」、2年次の「インターンシップ」でふるさとについて考察を深め、3年次にふるさとの課題を発見し、その解決法を考える「課題研究」に取り組む。以下は「課題研究」の内容の一部。

○「ふるさと納税でふるさとを元気に」

ふるさと納税を通じて南島原にお金を呼び込み、全国に魅力をPRすることでふるさとを元気にしたいと考えた。地元の製麺会社と連携し、コロナ禍において家庭で作成できる「そうめんクッキー手作りキット」を開発した。地元のスーパーで対面販売も行った。

○翔南原女（原城）の4コマ漫画 ～原城跡をもっとPRしよう～

地元の世界文化遺産である原城跡をSNSを利用してPRする方法を考察した。幅広い世代に親しみやすくわかりやすいものにするため、原城に関する4コマ漫画を作成した。4コマ漫画は、地元観光協会の協力を得て、毎週観光協会のInstagramに掲載された。

○「優しい人×自然＝民泊」

南島原市の「人の温かさ」や「豊かな自然」をより多くの人に知ってもらいたいと考えた。地元の観光協会や民泊経営者から情報を得て、農業体験や漁業体験の情報も記載した「民泊マップ」を作成した。

<取組の成果>

○「そうめんクッキー手作りキット」は南島原市のふるさと納税返礼品に登録され、令和3年11月中旬から販売が開始された。

○「ふるさと納税でふるさとを元気に」の取り組みは、令和3年度「長崎を元気にするアイデアコンテスト」において最優秀賞を受賞した。

○地域との密接な関わりを通じて、地域にまつわる職業への意識醸成とともに地域への愛着を育む機会となった。生徒のアイデアを生かした商品開発・販売といった取り組みを通して、生徒の意欲を引き出した。

＜長崎県＞（種別：団体）田平南小緑の少年団

推薦理由

田平南小緑の少年団では、「自然に親しみ守り育てる体験活動を通して、自然や地域社会を愛する心豊かな人間に育っていくこと」を基本理念としており、田平南小学校区内の恵まれた自然環境を活用し、児童の生きる力の育成を積極的に行っている。

【主な取組内容（令和3年度実績）】

- 食べられる山野草を学ぶ活動（4/23 実施、5・6 年生 25 名参加）
指導員の説明を受けながら学校周辺を散策し食べられる山野草を採取し、採取した山野草を調理・試食した。参加児童は野草について関心を持ち知識を得ることができた。
- デイキャンプ（8/7 実施、5・6 年生 21 名参加）
コロナ禍であるため、小学校校舎内にてデイキャンプを実施した。
指導員の指導の下、参加児童はテントの設営やかまど作り、ロープの結び方等を学んだ。
- とんとん山探索（9/27 実施、3・4 年生 16 名参加）
校庭に隣接している「とんとん山」と呼ばれる山で指導員の説明を受けながら探索を行った。参加児童は身近な木々や昆虫の名前などを教わり、葉の形や幹の模様などで木を見分けることができることを学んだ。
- 学校植林地の見学（11/16 実施、3・4 年生 16 名参加）
指導員と共に学校植林地を見学した。参加児童は植林地の中の記念碑で町の歴史を学び、様々な種類の木々を観察し、森林が果たす役割を身をもって学ぶことができた。
- イペーの木植樹（1/22 実施、5 年生 12 名参加）
以前、ブラジルへ移住された田平南小学校卒業生の方が、ブラジルの国花であるイペーの木を移植しようと田平町へ寄贈したが、気候風土が合わずうまく根付かなかった。その後、先輩の思いを受け継いでほしいとの願いから、田平南小緑の少年団の指導員や平戸市農林課職員より指導を受けながら植樹した。現在は順調に育ち、開花するに至った。参加児童はこれまで見たことがない花に感動した様子で、先輩の熱い思いに触れることができた。
- イチイガシの森見学（1/26 実施、3・4 年生 18 名参加）
小学校区内に在るイチイガシの森を見学した。参加児童は指導員の説明を受けながら木の幹に触れたり、土のにおいを嗅いだりし、五感を通して森の豊かさを理解した。
- 校内の花の植樹、地元の道の駅などにプランターを贈る活動（年間）
- 老人ホーム訪問（9/14 実施、全学年 64 名参加）
敬老の日に合わせて、全校児童で寄せ書きを作成し、老人ホームを訪問して、お年寄りの方々と交流している。

＜熊本県＞（種別：学校）津奈木町立津奈木小学校

推薦理由

津奈木町の課題の一つに、農業の後継者不足による休耕地の増加があった。また、津奈木小学校においては、農業体験学習の実施や東日本大震災の被災地への支援方法を模索していた。双方の思惑が一致する形で、JA 青壮年部の協力のもと休耕地を利用した地域の特産品であるサラダ玉ねぎの栽培が始まった。ところが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、物流が止まったり、学校が休校になったりしたため、収穫したサラダ玉ねぎは行き場を失ってしまった。そこで、ネット通販会社「(株) 食文化」の協力を得て、インターネットを通じて販売したところ、完売することができた。その後、津奈木町と「(株) 食文化」は令和3年12月に農業を通じた子供たちのマーケティング学習に関する連携協定を結び、本事業が本格的に始動した。

サラダ玉ねぎの栽培を中心となって担当するのは3、4年生である。津奈木町は、かつて水俣病の被害があり、それを教訓に環境や健康への意識が高い。児童が栽培するサラダ玉ねぎは、土壌も薬に頼らず日光消毒をしたり、化学肥料を半分で栽培したりと健康に配慮している。1、2年生は出荷用の箱に津奈木町に関係のある絵を描く作業を担当している。津奈木町は「緑と彫刻のある町」としてアート活動に力を入れているので、今後は地域でアート活動をしている方に指導を依頼する見通しである。5年生は販売サイトとメールマガジンの作成を担当し

た。作成にあたっては、「(株)食文化」の方にも授業づくりから参画していただいた。5年生児童は「要素分解」という手法を用い、サラダ玉ねぎの価値を多面的にとらえ、流行語等も取り入れて、キャッチフレーズを考えていった。互いのアイディアをタブレットで共有し一つの形として作り上げていった。サイトに用いた写真は、PTAによる写真コンテストで公募したものを使用した。出荷は5、6年生が担当し、5キロずつ量って1500キロのサラダ玉ねぎを箱詰めした。箱の中には、3、4年生が書いた手紙を同封した。

販売開始後300箱のサラダ玉ねぎは瞬間に完売し、レビューは全て「5」であった。また学校には消費者の方からお礼のお手紙が数枚届いた。児童は達成感に満ちあふれていた。売上金の一部はPTAに寄付され、用途は学校に一任されているので、今後は本事業がさらに充実していくために、どのように活用していくかを児童と話し合ったり、活動に必要なものを購入したりしていく見通しである。

小学生の取組として、児童自らネット販売サイトを作成し、出荷作業まで行った例は少ないと思われる。水俣病の歴史を経て、環境や健康に配慮した取組を発信していることから、この事業を通して児童は多面的に物事をとらえられるようになったことが分かる。ICTの技術も格段に進歩し、これまで知らなかったネット販売という職業についても深く関わることができた。また全校児童のみならず、保護者まで巻き込み、地域の力を活用して取組を進めていることにも価値がある。今後は売上金の一部の使途を考えさせることで、一歩踏み込んだキャリア教育を展開していくことが期待できる。

＜熊本県＞（種別：学校）御船町立御船中学校

推薦理由

学校教育目標を実現するために「御船中 For the future プラン」を策定し、次の3つのプロジェクトを実践している。

1つ目は、「夢を抱く（生き方との出会い）」Encounter プロジェクトとして、外部講師を多数招いての生き方に関する講演会を実施し、コロナ禍にあっても地域や地元企業と十分な連携を図り職場体験を実施している。さらに、生き方に焦点を当てて地域の方に聴き取りを行い、自分たちの考えを整理して発信する総合的な学習に取り組んでいる。特に、生き方に関する講演会を年間計画に位置付けた取組や、職場体験の経験と協力いただいた事業所の職員の方との出会いを生かした探究的な学習は優れた実践である。

2つ目は、「夢を言葉にして一歩踏み出す（表現力育成）」Take a step プロジェクトとして、読書活動やNIE活動の推進、集会・生徒会活動の工夫、生き方に関する学びを劇化して発信する学習成果発表会等に取り組み、地元紙に多くの生徒が将来の夢や意見を寄稿する等、夢や希望を語る実践を行っている。特に、2年4か月の期間に93人の生徒の意見が新聞掲載され、保護者・地域を啓発し、キャリア教育への理解と協力を得る取組は優れた実践である。

3つ目は、「夢の実現に向けて努力する（学力向上）」Dreams come true プロジェクトとして、普遍的な授業改善の視点を掲げた授業実践や家庭学習の習慣化、仲間づくり等に取り組み、成果を生んでいる。特に、「SMARTな授業実践」と名付けた校内研究は、小学校との連携が広がり、全国学力・学習状況調査でも成果を示しており、他県からも視察に訪れている。また、生徒主体の取組と保護者との連携を柱とした基本的生活習慣の育成は、朝食摂取率の向上や家庭学習時間の確保に成果を残す優秀なものである。

さらに、3つのプロジェクトが生徒や教職員等の主体的な創意工夫で取組の改善・創造が図られているPDCAサイクルは特徴的であり、生徒の課題対応能力やキャリアプランニング能力を育成する特筆すべき実践である。

＜熊本県＞（種別：学校）熊本県立熊本西高等学校

推薦理由

1 学校の特徴

熊本県立熊本西高等学校は、昭和50年に開校し今年度で48周年を迎え、普通科・普通科体育コース・サイエンス情報科を有する普通高校である。

令和3年度から、熊本県教育委員会の「ICT特例推進校」、さらには、令和4年度からイノベーションハイスクールの指定を受け、ICT活用と教科横断的・探究的な学びの一体的な取組により社会の課題を解決し、地域に貢献する人材を育成している。

2 キャリア教育への取組

(1) 西高アカデミックインターンシップ（通称：NAIS）

令和元年度から、普通科1年生を対象に県内の7つの大学（熊本学園大学、崇城大学、東海大学熊本キャンパス、九州看護福祉大学、ルーテル学院大学、尚絨大学、熊本保健科学大学）と2つの専門学校（大原学園、九州中央リハビリテーション学院）と連携した「アカデミックインターンシップ」（5日間）を実施している。事前に訪問する学校についての調べ学習を行い、実際に各大学・専門学校での講義に参加している。講義参加後は体験のまとめ資料を作成し、発表を行っている。

(2) 高大連携による最先端技術体験

サイエンス情報科1、2年生では、県内の2つの大学（熊本大学、崇城大学）と連携し、各大学の研究室を訪問して最先端技術の研究を体験している。サイエンス情報科の前身である理数科から20年以上にわたり連携を続けている。

(3) 地域探究活動

2年生の未来探究（総合的な探究の時間）を活用し、地域探究活動を行っている。今年度は、「地域探究活動として、地域の課題解決に取り組む」ことを目的に（一社）みらいず設計Lab.と連携した活動を行っている。

環境・生活、食品ロス、観光、鳥獣被害など10テーマを設定し、クラスの枠を超えたグループ分けを行っている。

昨年度は、SDGsをテーマにしたグループが地元のホテル（KKRホテル熊本）と協働し、地元特産品の活用やリサイクル、プラスチック削減を意識したオリジナル弁当の開発・販売などを行った。

(4) インターンシップ

生徒の進路希望が多い介護・医療系をはじめとする学校近隣の事業所でのインターンシップを2年生の希望者を対象に実施している。今年度からは、NAISで連携した大学より就職した実績のある事業所でのインターンシップも計画しており、「少し先の未来」を体験させることで、これまで以上に明確な意思を持った進路選択と、更なる学習意欲向上を図りたい。

(5) 職業ガイダンス

コロナ禍によりインターンシップが中止になったことをきっかけに、2年生を対象に県内の医療・福祉、看護、製造業、行政機関等の担当者を学校に招き、職業ガイダンスを実施している。生徒は講話を聴くだけでなく、事前に各事業所が設定したテーマについて調べ学習を行い、講話の前に発表をしている。（R3年度は10事業所が参加）

(6) 熊本市青年会議所との連携

熊本市長が掲げるローカルマニフェストの進捗状況を知るとともに、市民による政治参画の重要性を理解することを目的として令和3年度から熊本市青年会議所主催によるローカルマニフェスト検証会に参加している。

ローカルマニフェストを知るとともに、検証を行い、高校生の視点での政策提言を行うために3回程度の勉強会にも参加している。

<宮崎県>（種別：学校）えびの市立飯野中学校

推薦理由

飯野中学校は、「Think Globally、Act Locally（広い視野をもって まずは足下から）」をキャッチフレーズに、「持続可能な社会の創り手となる」生徒の育成を目標に掲げ、隣接する県立飯野高等学校を含め地域や家庭と連携しながら、飯野中でしか味わえない教育を展開する学校を目指し日々の教育活動に取り組んでいる。ここ2年間で「Scrap&renovate」の考えの下、カリキュラム・マネジメントを行い、これまでの取組の更なる充実を図っている。中でも『えびの学』（地域資源を生かした「総合的な学習の時間」）を中心とする「キャリア教育」については、働き方改革も踏まえ、コロナ禍においてもできる、また地域人材や専門家も活用しながら地域を巻き込んでできる取組を開発し、市内外へ積極的に発信している。

①「えびのお仕事図鑑制作プロジェクト」

新型コロナウイルス感染症の影響を受け実施できなかった職場体験学習に代わって、地域で活躍する16名の講師を招聘し、生徒自らがインタビュー・撮影・原稿作成と、GIGAスクール構想で一人一台配付されたタブレットを上手に使う「えびのお仕事図鑑」を制作した。完成した図鑑は市役所や商工会に納品し、市民の目に触れ

る市内各所に設置していただいた。市商工会からこの図鑑制作を依頼された設定になっており、図鑑制作という仕事を体験することもこのプロジェクトの特色であり、生徒の様々な力の育成につながった。

②「対話型キャリア教育プログラム 飯野版ひなた場」

県教育委員会が開発した「ひなた場」を飯野版にリメイクし実施した。もともとは大人と語るプログラムであるが、隣接する県立飯野高等学校の高校生と人生について語る形に変え、授業を実践し、大きな成果を上げた。

③「中高連携したプログラミング学習」

県立飯野高等学校と連携し、高校での授業の講師を本校でも招聘し、ドローンを使ったプログラミング学習を行った。単にプログラミングを学ぶ授業ではなく、「目標設定する→挑戦してみる→理解する→改善する」という「プログラミング思考」を学ぶ内容となっている。

以上、本校は①～③の内容をはじめとして、地域と連携した上で、生徒一人一人がこれからの社会で必要となる資質・能力を身に付けながら自分やふるさとの未来を考えることのできる「キャリア教育」について組織的・系統的に取り組み、えびの市全体の『えびの学』の見直しに大きく貢献している。

<宮崎県> (種別：学校) 国富町立木脇中学校

推薦理由

国富町立木脇中学校は、全国に先駆け、平成5年度から「職場体験学習」を導入し、「体験的な活動を通して、地域とともに生き方を学ぶ教育」が脈々と受け継がれ、現在に至っている。また、近年では、令和2年度から「キャリア教育を推進するための基盤づくり」を全職員で共有し、3年間をかけて組織的に系統性のある計画・実践をしている。

中学校学習指導要領が令和3年度から全面実施されたことを受け、本町においても、教育研究センターで作成した「キャリア・パスポート」を小学校から中学校への接続を含め、効果的に活用するように指導している。その中でも、キャリアに係る取組を行った際に、記録をとる時間や場を週時程に位置付ける工夫をしたり、全職員で学びを蓄積するポートフォリオ的な活用を意識した上で、継続的に実践したりする取組が見られる。生徒自身が「自己の変容を実感できるしくみ」が形になっている点が評価できる。

また、「キャリア教育を推進するための基盤づくり」の着眼点として①総合的な学習の時間、②キャリア教育の理解、③特別活動の3点に絞り、特に総合的な学習の時間においては、改善の視点を、「探究的な活動」「地域に根差した体験活動」「3年間を系統的、連続的につなぐこと」としている。これまでに、地域コーディネーターの協力のもと、地域人材を効果的に活用する取組は推進されていたが、学校区という地域はもとより、役場や町内の事業所等にも「つながり」を求める働きかけを行い、「生きてはたらく資質・能力」を生徒各々に身に付けることができるような取組を実現するために、第3学年時においては、一人一研究を行うというゴールイメージをもち、俯瞰的に3年間を見通した計画を確立できている。

さらに本年度は、令和5年度に全学校区に展開するコミュニティ・スクールを見据え、「町全体への波及」という考えのもと、本町の全学校の管理職、教職員に対して、全5回の「カリキュラム・マネジメント研修会」を実施している。中核である指導教諭を研修講師としたことで、町全体にキャリア教育を推進していく機運が高まっている。

<宮崎県> (種別：学校) 椎葉村立椎葉中学校

推薦理由

○ 日本三大秘境と呼ばれる本村の未来を担う宝として生まれ、育まれた生徒のほとんどは、中学校卒業後に村を離れ進学等を行う。村長は卒業式で「椎葉村に戻ってきてほしい」と村民の思いを代弁する。椎葉中学校では、村民の願いを真摯に受け止め、ふるさと椎葉村のよさや価値、村民の生き方等から自分の生き方を見つめ、探究していくキャリア教育としての学習を総合的な学習の時間を核として進めている。

○ 総合的な学習の時間では、令和2年度まで特設で行っていた「地域創造探求事業」を年間指導計画に組み込み、3年間を貫くテーマや各学年のテーマを設定し、地域を担う人材育成を目指したカリキュラムになるよう改善を図っている。

○ 椎葉村地域おこし協力隊や合同会社U I キャスト（椎葉村で人口減少の課題にチャレンジしている企業）を

キャリア教育サポーターとして位置付け、各学年担当職員とキャリア教育サポーターの役割を整理し、連携体制を構築することで、地域との連携に係る教職員の負担を軽減するとともに、地域と密着した質の高い学習活動となるよう工夫している。

＜第1学年＞ 「椎葉村の自然や産業に学ぶ」…村の自然やそれに関わる産業から地域のよさや特色を学び、郷土に関心や親しみをもたせるとともに、椎葉村を愛する心を育てる。

＜第2学年＞ 「椎葉村の人について学ぶ」…地域・社会の人々とのふれあいをとおして椎葉村の職業を認識させ、郷土を愛する態度を育成するとともに、椎葉村を愛する心を育てる。

＜第3学年＞ 「椎葉村の未来について考える」…椎葉村の未来についての学習や自己の生き方について考える活動から、生涯にわたって自分がどのように椎葉村に関わり、貢献できるか考える。

○ 椎葉村と関わりながら自らのキャリアを構築する資質・能力を小中一貫で育成できるように、小・中学校の総合的な学習の時間のカリキュラムに椎葉中学校の取組を含めた内容を「椎葉村学」として位置付け、椎葉中学校長を委員長とする推進委員会の下で準備を進めている（令和5年度開始）。

＜鹿児島県＞（種別：学校）日置市立飯牟礼小学校

推薦理由

飯牟礼小学校は、児童一人一人に自分や集団の役割に意欲的に取り組ませることを通して、未来の夢や目標に向かって自立した人間としての資質や能力の育成を図っている。

① 身近な人の職業から学ぶ。【対象：5・6年生】

令和2年度 岩元 みさ氏 [世界一過酷といわれるサハラマラソンに出場]

⇒チャレンジすることの大切さを伝える。

令和3年度 萩原 聡志氏 [日本能力開発推進協会上級心理カウンセラー]

⇒自分の可能性を引き出すベストパフォーマンスの教え。

網本 麻里氏 [車いすバスケットボール日本代表]

⇒夢の実現に向けて努力するきっかけがもてるようにする。

令和4年度 今屋 千尋氏 [日置市に在住しながら国際線のCA]

⇒チームとしてお客様へのサービスを提供している。

② 視野を広げることで将来の夢をもつ。【対象：4年生～6年生】

JICA 国際協力員4人と在外教育施設派遣経験者2人を招き、world café方式で世界のことを学ぶ時間を設定する。

⇒児童はシンポジスト6人の中の3か所を回り、各国の文化や生活等の話を聞いた上で質問をする。

[自作パスポートにスタンプを押印]

③ 主体的に課題を発見していく力や創造性を育む。【対象：6年生】

就きたい職業についてまとめたことを全児童の前で発表する。※この取組は10年以上続けている。

発表の時間⇒児童集会時(1学期1回、2学期3回 計10人)

⇒キャリア・パスポートにまとめる。

④ 地元企業や自治体等と連携し、地域課題の解決に取り組む。【対象：全学年】

地元を盛り上げるために商品開発された菓子に児童が商品名を考えて、売り出す。

[飯牟礼加工センターへ注文し、飯牟礼ふれあい館で販売。商品名：茶ステラ⇒飯牟礼の茶を使ったカステラ]

⑤ 自治体等と連携し、児童の地元への理解・愛着・誇りを育む。

⇒地元の装飾関係の専門家を招き、もの作り体験を行う。

[ゴミ箱に装飾をして世界で一つのゴミ箱を作る。]

⇒地元で鉄鋼や木工でもの作りをする有名な方を招き、目の前で丸太をフクロウにする彫刻を見学する。

＜鹿児島県＞（種別：学校）志布志市立宇都中学校

推薦理由

「一人一人の可能性を信じ確かな成長につながるキャリア教育」という研究主題の下、自己の生き方を見つめ、目的意識をもって、夢実現に向けて努力する生徒の育成を目指してキャリア教育に取り組んでいる。

1 自己理解や他者理解に基づいた自己や集団の成長につながる確かな目標設定と具体的取組の明確化

コロナ禍により従来どおりの学習活動が行えない中、家庭や地域、企業などの協力を得て、人との関わりをもたせるための取組を工夫して行っている。また、体験活動等における目標設定と振り返りを充実させることにより、学校生活、社会生活、職業生活を関連付け、将来の夢と学びを結び付けさせようとしている。

2 小・中連携によるキャリア・パスポート等の活用を通じた系統的な指導

中学校入学時には小学校でファイルしたキャリア・パスポートを持参させ、中学校のキャリア・パスポートと一緒に保存させている。また、中学校区の4つの小学校との共通実践として「三つの時刻（起床・就寝・自宅学習開始時刻）」や自宅学習強調週間を設定し、9年間を通じた取組を行っている。

3 キャリア発達の変容に気付かせる評価の工夫

様々な学習活動において目標設定を行わせ、目的を明確にして活動できるようにするとともに、生徒が記入したワークシート等に保護者からコメントを書いてもらうなど他者評価も効果的に活用して振り返りを行わせ、肯定的自己理解が深まるよう取り組んでいる。

4 保護者のキャリア教育の意識高揚を図る工夫

高等学校へのPTA研修視察、高等学校等説明会への参加を促すとともに、様々な活動に保護者が関わるように仕掛け、保護者のキャリア教育の意識の高揚につなげている。

＜鹿児島県＞（種別：学校）鹿児島県立与論高等学校

推薦理由

【 学校概要 】

鹿児島県立与論高等学校は創立56年を迎える与論島内唯一の高等学校である。学科は普通科のみだが、2年次からは進路目標に応じて文理コースと総合コースを選択できるようにしている。また、総合コースでは商業科目を設定するなど、多様な進路希望にも対応できる教育課程を編成している。

令和4年度に「与論高校のビジョン」を策定し、「これからの時代に必要とされる資質・能力の育成を通して、地域のよりよい未来づくりに貢献する」ことを学校の存在意義であると定め、地域と連携した探究活動とキャリア教育に係る取組の充実を図っている。

【 取 組 】

1 「海洋教育」への取組

与論町教育委員会が主導する海洋教育推進協議会の構成校として、小・中学校とともに「海洋教育」に取り組んでいる。「海との共生」を大テーマに、生徒が設定する課題を歴史・文化・社会・産業・自然・科学の6つの領域に分け、探究活動に取り組んでいる。

活動に当たっては、地域の方々が随時、サポーターとして関わり、質問や助言などをいただくとともに、研究成果を地域の方々に公開している。サポーターの方々の来校頻度は高く、生徒たちの探究活動に深みを持たせている。また、令和4年度からは奄美大島に研究拠点を設けた東京大学大気海洋研究所との連携を開始。生徒たちが与論の水に関するテーマを設定して仮説を立て、地域の方々の協力の下で島内各地の水を採取・分析する研究を行った。8月上旬には、東京大学柏キャンパス内の大気海洋研究所を訪問してサイエンスキャンプに参加し、その研究成果は地域にもフィードバックした。今後もこれらの取組を継続し、与論島の人材育成につないでいく。

2 「島のしごとフェア」の開催

与論町商工会の協力の下、「島のしごとフェア2022」を企画し、7月末に実施した。これは島内16の事業所等が参加する職業ガイダンスで、生徒たちが島内の職業について知り、自らの将来や与論島の将来について考え行動することにつながる契機にすることを目的としている。生徒たちは各事業所の業務内容や福利厚生、業界の今後の状況等について事業所の担当者から直接話を聴き、質疑を行った。9割以上の生徒は進学希望だが、

高校在学中に与論島の仕事や経済の現状を知ること、大学や専門学校で学んだ後に直面する職業選択や就職活動において、自らの進路を考える手掛かりにすることや与論島に無い仕事は自ら創る、起業するという視点を育成することも狙いとしている。商工会や各事業所からは、生徒たちに業務内容を知ってもらったり与論島の将来のことを考えてもらえたりするよい機会になったと大変好評を得ており、次年度以降も継続して実施することで、与論島の活性化につないでいく。

3 「アシスタントティーチャー」の実施

与論町教育委員会の協力の下、進路が決まった3年生が2月に、町内の三つの小学校で1週間程度の授業補助（アシスタントティーチャー）を務めた。令和3年度から始めた企画で、地域貢献活動の一環として実施するもので、初年度は生徒9人が参加した。高校生が与論島の教育について課題意識を持つ機会にするとともに、高校生が授業補助に入ることで、小学校が児童一人一人に対してより細やかな指導を可能にすることと、小学校と高校との連携強化を図ることを目的としている。参加した生徒達から「子供達との触れ合いに感動した」「小学校の先生方が工夫する姿を間近で見て教育の奥深さを感じた」などの感想が多数寄せられるとともに、町教委・小学校からも大変好評を得た。令和4年度以降も継続して実施することで与論島の教育への貢献としてつないでいく。

【 成 果 】

与論高校は、日頃から役場や島内の事業所をはじめ地域の多くの方々をサポートとして関わる教育活動を展開している。同校のビジョン及びブランドデザインに基づく上記の取組は、生徒一人一人が地域のよりよい未来づくりを具体的に考え、行動する絶好の機会になるとともに、これからの自分の在り方・生き方を主体的に考えるキャリア教育の充実・推進に資するものとなっている。

<沖縄県>（種別：団体）沖縄県立八重山高等学校尚志会

推 薦 理 由

八重山高等学校を卒業して25年目に当たる卒業期が、生き方・在り方などについて在校生に示唆を与え進路に対する意識の高揚を目的とした「教育フォーラム」という特別授業を毎年開催し、キャリア教育の充実に寄与している。

本校卒業生で構成する尚志会がその役割を担い、平成6年度の第1回教育フォーラムから今年度まで25回続いている。第1回教育フォーラムのテーマ「文武両道にたけ 舞い立ちゆかん八重高生！」を皮切りに、毎年、テーマを掲げた取組となっており「自分らしく生きよう」「八重高発 世界へ」「島に生きる」「今、君に伝えたい！」「八重高（ここ）から未来へ」などのテーマ毎に、卒業して25年という月日を経験してきた様々な分野の先輩たちの話は、在校生たちにとってとても刺激になっており、進路決定の一助となっている。

コロナ禍において、今年度はYouTube ライブで配信し、チャット機能を使いながらリアルタイムで教室から質問・意見等を聞くなど、感染拡大防止策を取りながら工夫して実施していた。

様々な職業に就く先輩たちの轍は、毎回在校生たちから大きな反響があり、教育フォーラムの実施後も多くの質問が寄せられるなど確実に生徒自身に大きな影響を与えている。

これまで長年行われてきた尚志会の「教育フォーラム」は、生徒一人一人の社会的・職業的に自立に向けた能力や態度を育てキャリア発達を促す取組である。

<仙台市>（種別：学校）仙台市立仙台商業高等学校

推 薦 理 由

仙台商業高等学校では生徒一人一人の自己実現を目指し、3年間を見通した学年毎の指導の重点を設定し、各教科等との関連付けを図りながら、組織的・系統的なキャリア教育を推進している。その際、地域や企業と連携し実践的に商業について学べる機会を設定したり、生徒に対して適時進路情報を提供し各種資格検定に自ら挑戦できる環境を整備したりするなど、生徒の主体的な学びとなるよう工夫している。

<取組事例>

○3年選択科目「商品開発」の充実化

令和3年度にそれまでは商品の立案までとしていた学習を、実社会とのつながりを生徒が実感できるように地元企業と連携して、商品化し販売するまでの活動に見直し実践した。商品開発に当たっては、まず、開発テーマを生徒自身に考えさせ、社会にある課題の解決や地域貢献につながるような商品開発をしたいという思いを高めた。また、商品化の事前学習として、地元企業によるデザインや消費者についての講話を設定し、課題を解決するために必要な知識等を生徒自らで獲得していくように進めた。それらの学習が功を奏し、商品化する段階では、商品の材料やパッケージのデザイン、販売場所など細部にこだわって考えるなど主体的に取り組んだ。最終的には、専門メーカーに委託して商品を製造し販売するところまで体験したことで充実感や達成感を学びと共に大いに味わえる学習となった。学習の様子は新聞等で取り上げられた。

○商業情報部の活躍

仙台商業高等学校の部活動である「商業情報部」は、仙台経済圏における産業・経済の活性化を目指し、商業研究活動に取り組んでいる。また、授業で学ぶビジネスに関する知識等を実践する場として、部において「あきない屋」（商号）を経営し活気ある活動を行っている。開発した商品は地元になんだ菓子やレトルト食品など様々あり、県外や海外でも販売した。収益金は仙台市のイベントや東日本大震災復興の支援金としている。また、大会での優勝記録も数多く、仙台市キャリア教育アワードでの事例発表やテレビ番組の特集で広く紹介されている。

以上のような取組により、教育活動の好循環を生み出しながらキャリア教育の充実を図っている。

<さいたま市>（種別：学校）さいたま市立大原中学校

— 推 薦 理 由 —

大原中学校は、「自治」をテーマに、「大原前進プロジェクト」を実施している。「生徒たちの、生徒たちによる、生徒たちのための学校」を掲げ、自校を心地良い（Well-being）場所にするために、生徒が話し合い、行動し、納得解を見つける取組を続けてきた。具体的な取組は次の通りである。

【具体的な取組】

「伝え合う」活動の充実によって、生徒の活動を活発化し、主体的な参加を増加させることで、自分達の生活を自分達でより良くしていこうとする参画意識の向上を図っている。

1. 全ての教科領域で話し合い活動を充実させ、教員が「伝え合い」を取り入れた授業改善と一人一回以上の公開授業を行っている。
2. コロナ禍において、限られた機会を活かしながら、地域と連携を図ることで直接体験の場を増やし「伝え合う」活動の質の向上を目指してきた。
3. 「校則見直しプロジェクト」においては、生徒が主体となり、保護者等、地域からアンケートをとり、職員会議でプレゼンテーションを行うなどして新しい校則づくりを推進し、生徒の社会的自立に向け基盤となる能力や態度を育成している。
4. 「自治委員」（学級委員）を組織し、リーダーとして生徒全員がより良い生活を過ごせるように努めている。
5. 令和4年文部科学省主催「子どもたちの対話を通じた学校デザイン・プロジェクト第1回ラウンド・テーブル」に参加し「大原前進プロジェクト」の代表生徒がこれからの学校の在り方について語り合い、主体的に課題に取り組む姿勢を育んできた成果を発揮している。
6. 令和3年度は、新型コロナウイルスに伴う緊急事態措置及びまん延防止等重点措置のため職場体験事業「未来（みらくる）ワーク体験」を書面によるインタビュー形式にして実施した。
7. さいたま市選挙管理委員会と連携して中学3年生で選挙啓発出前講座を実施した。近い将来有権者となる生徒が選挙に対する正しい知識や重要性を学び政治や選挙に関心を高めていた。社会に積極的に関わろうとする姿勢を育んでいる。

このような取組を通して、生徒一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、「話し合い」「伝え合う」活動を行う中で人や社会との関わり、社会性や勤労観を養い、将来の社会人としてのよりよい生き方を探求する生徒の育成に取り組んでいる。

＜川崎市＞（種別：学校）川崎市立東小倉小学校

推薦理由

川崎市立東小倉小学校は、令和3・4年度に本市のキャリア在り方生き方教育研究推進校、教育課題（SDGs）研究推進校として、また、令和4年度には、国立教育政策研究所研究協力校（ESD）として、「進んで伝えよう 思いを受け止めよう 豊かにかかわり合おう～SDGsの実現につなぐカリキュラム・マネジメント」を研究テーマに、本市で実施している「キャリア在り方生き方教育」を積極的に推進している。

○持続可能な社会の創り手の育成を目指すカリキュラム・マネジメント

キャリア教育の全体計画に加え、SDGsの実現につなぐ道徳教育のグランドデザインを作成し、教科横断的に身につけさせたい資質・能力や、学校全体で取り組む手立て等を明らかにしている。育成を目指す資質・能力に向けて教職員が何にどう取り組むのか明らかにして、共通理解を図りながら持続可能な社会の創り手を育成している。

○かわさき SDGs パートナーである地域の企業等との連携

川崎市 SDGs 認証・登録制度「かわさき SDGs パートナー」の企業等と連携し、学習の充実を図っている。6年生の総合的な学習の時間では、SDGsの達成に向けて身近な地域社会の課題を見出し、主体的に探究して考えたことを実践した。約30団体の代表や職員を学校に招いて一人一台端末を活用しながら、課題の解決に向けた発表を聞いてもらい、アドバイスを得てより深い学びにつなげている。

○地域社会と連携したキャリア教育の推進

コミュニティ・スクールでは、地域として取り組めるキャリア教育の方法等について、地元企業の代表等も協議に参画している。学校教育目標を地域・保護者と共有し、子供達に「豊かな学び」を保障している。地域全体で子供達を育てていく機運を高め「社会に開かれた教育課程」の実現に努めている。

＜川崎市＞（種別：学校）川崎市立久本小学校

推薦理由

川崎市立久本小学校は、令和元年から2年に向け、本市のキャリア在り方生き方教育研究推進校として「やってみたい！なるほど！楽しいな！～かかわり合い 高め合う 子どもの姿をめざして～」をテーマに、研究を進めてきた。現在も研究成果を生かし、本市のキャリア在り方生き方教育を積極的に推進している。

○「明日も行きたくなる学校」の実現

「学校で仲間と一緒に勉強するのが楽しい」と感じられるような学習を通して、明日も行きたくなる学校を目指し、教育活動を進めている。日々の見取りから児童の実態を捉え、目指す姿を明確にして、仲間同士のかかわりが「学び」の質を高めていけるような授業づくりの手立てを協働で研究している。

○地元のNPO法人・企業と連携した教育活動の充実

社会に開かれた教育課程の実現を目指し、6年生では、第7回キャリア教育アワードを受賞している地元のNPO法人キーパーソン21や企業と連携して、自己理解を大切にしたい子供達のキャリア形成に取り組んでいる。一人一人が、自分の興味関心の源を発見し、自己の将来へ向けた夢や目標を見出すことを大切にしている。また、仕事を通して地域社会を元気にしたいという地元企業の経営者の思いを聞くことで、職業観・勤労観を育み、郷土愛、シビックプライドの醸成につなげている。

○豊かな人間関係を土台としたキャリア教育

本市独自の取組である「かわさき共生＊共育プログラム」を通して、子供達の社会的スキルや人間関係を育み、キャリア教育の土台としている。「主体的・対話的で深い学び」につなぐ授業改善、更にはGIGA端末を活用した新たな学びの在り方についても研究を進め、子供達の将来を見据えた教育活動を学校全体で取り組んでいる。

＜浜松市＞（種別：学校）浜松市立細江中学校

推薦理由

1 キャリア教育推進体制の構築と年間指導計画に基づいた取組

学校教育目標「夢実現へ挑戦する生徒の育成」の具現化に向け、基礎的・汎用的能力を育成するために、子供の実態に即してキャリア教育で育てたい力を明確にし、教育活動全体を通して、キャリア教育を展開している。

特に教科学習や教科外活動において、子供の学びが実生活や実社会とつながり、将来の自己の生き方を考えるキャリア教育を教育活動全体で推進するため、キャリア教育推進室を設置し、校内指導体制のもと、3年間を見通した年間指導計画を作成して、組織的・系統的なキャリア教育実践を進めている。キャリア・オリエンテーションを通して、教師と生徒がキャリア教育で育てたい力の共通理解を図り、活動前後の目標設定・振り返りを繰り返し行っている。その際には、キャリア・パスポートを積極的に活用している。また、PDCAサイクルに基づき、ルーブリック評価の結果等を踏まえて次年度の計画を立て、評価・改善を図っている。

2 学校運営協議会を活用し、地元企業・大学・自治体と連携した「ふるさとキャリア教育」の実践

令和2年度から総合的な学習の時間を「ふるさとキャリア教育」と位置づけ、キャリア教育で育てたい力の育成を目指して、地域を学びのフィールドとした探究活動を展開している。学校運営協議会を活用して、地元の商店街や企業、大学、自治体等と連携し、子供の自己肯定感の向上及び地元への理解・愛着・誇りを育み、地域の良さや課題に気づき、主体的に課題の解決に向けて取り組んでいる。社会参画・地域貢献・SDGsの視点から、将来のよりよい自己の生き方や、持続可能な地域づくりにつなげていく。

1年生：【地域探索】地域を見つめる

「地域のよさや自慢を見つけ、未来に残したい地域の魅力を探る」

- ・地域探索、地域ボランティア、地域の方から地域の歴史や見所講座、新聞記者から取材のコツ講座など、体験を通して地域を知り、見つめる活動を実施した。

2年生：【地域貢献】地域を支える

「地域で営む人々の思いや願いに気づき、仕事の魅力を探る」

- ・職業講話、職場体験活動を実施した。学校運営協議会を活用し、学校支援コーディネーターを中心に、委員が約60箇所の活動先等に依頼した。受け入れ先や保護者を発表会に招待し、ICT機器を活用して発表し、地域社会への発信の場とした。

3年生：【地域参画】地域を創る

「地域のよさや課題に気づき、魅力ある未来の細江を探る」

- ・発表会では、地域の活性化に向けて、区役所が運営する地域バスのラッピングを提案した。現在、生徒の提案が実現し、生徒たちがラッピングデザインを考案中である。
- ・本市は「SDGs未来都市」であることから、地元大学との連携により、SDGsについて学ぶ演習を実施した。

【ホームページ】 <https://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/hosoe-j/>

＜京都市＞（種別：学校）京都市立西京高等学校（定時制課程）

推薦理由

西京高等学校定時制は、昭和10年に閉校した京都市立専修商業学校を起源とし、85年余りの歴史を刻んできた。令和3年4月に開校した定時制単独校「京都奏和高等学校」にその教育資産を引き継ぎ、令和4年度末に在校生を卒業させ閉校を迎えることとなる。

○自立に向けた個別のキャリア支援

全て生徒の得意・不得意等を速やかに把握し、自立に向けた支援を行うため、独自のアンケート調査を実施し、気になる生徒への複数の教員からの定期的な声掛けなど教員全員で組織的な支援体制を構築している。また、スクールキャリアコンサルタントによる進路ガイダンスや個別の進路相談を実施し、進路選択の支援を行っている。

○総合的な探究の時間の取組

SDGsや成人年齢の18歳引き下げ、多様性等の社会的事象を課題とし、他者と調和しながら共生することや自己の在り方や生き方について考えることで卒業後の自立と社会参加を促し、主体的に行動する力の育成を目指している。そして、情報化やグローバル化が進展していく社会で生きていくための基盤となる考えやこれからの社会で生きる力の育成を図っている。

○就職希望生徒への取組

進路調査・進路相談を綿密に実施し、早期に就職希望者の把握に努めている。そして、労働知識に関する講話の他、ハローワークが主催する「就職ガイダンス」に参加することを原則とし、本人の職業適性を確認させた上で、就職希望先を検討させるなど、ミスマッチをなくす工夫を行っている。また、就職未決定者については、ハローワークの各種機関に繋いだ上で卒業させている。

○専門家と協働した支援

スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールキャリアコンサルタント等の専門家を配置し、教職員との緊密な連携の下、生徒のキャリア支援を行っている。

＜京都市＞（種別：学校）京都市立伏見工業高等学校（定時制課程）

推薦理由

伏見工業高等学校定時制は、昭和19年度京都市立第二工業学校の夜間部として創立され、「ものづくり」「まちづくり」の実践的な技術の向上を図る教育活動を展開してきた。現在は、外部機関と連携し、地域課題の解決を目的とした教育活動を進めるなど幅広くキャリア教育の充実に努めている。尚、同校は、西京高等学校定時制との再編・統合により令和3年4月に開校した京都奏和高等学校にその教育資産を引き継ぎ、令和5年度末で閉校となる。

○キャリア科目の設置

学校設定科目「キャリア研求」では、技術者として必要な資質・能力を育成するため、自己理解・自己管理能力の向上を図るとともに、スクールキャリアコンサルタントによるガイダンスや外部講師を招聘した進路講演を行っている。また、社会保険労務士を講師として招き、働くために必要な知識を学び、職業観・勤労観の育成を図っている。

○地域における市民活動と通じた社会課題解決に向けた学習

企業の転出、商店の衰退や交流機会の減少などの地域課題の解決に向け、行政機関や福祉施設、企業、地域等との連携の下、地域の魅力の認知度向上や地域資源の有効活用などを図る取組を行っている。生徒自身が、地域の様々な問題に気づき、その問題解決を通して地域の一員としての自覚を育み、シチズンシップの教育にも繋げている。

○専門分野に関係する職業経験

学校から専門分野に関係するアルバイト先を紹介する等して、職業現場における実地的な知識や技術・技能に直接触れることにより、学校での学習と職業の関係についての生徒の理解を促進し学習意欲を喚起するとともに、生徒に自己の職業適性や将来設計について考える機会を与え、主体的な職業選択の能力や高い職業意識を育てている。

○専門家と協働した支援

スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールキャリアコンサルタント等の専門家を配置し、教職員との緊密な連携の下、生徒のキャリア支援を行っている。

＜神戸市＞（種別：学校）神戸市立神港橋高等学校

推薦理由

神港橋高等学校におけるキャリア教育は「カリキュラム・ポリシー；CP」に基づき計画、実施している。数々の取組は開校当初より行っており、PDCAサイクルを繰り返す中で、コロナ禍においても継続し、生徒の主体性及び企画構築力、実践力等の向上に大きく貢献している。

「総合的な探究の時間」で行う探究活動を、1年「神戸ディスカバー」（地域探究）、2年「プロフェッショナル私の流儀」（職業人インタビュー）、3年「橘プロジェクト」（課題研究）の3回転させるとともに、「神戸ディスカバー」ではフィールドワーク、「私の流儀」ではインタビューという探究の必須過程をドリル学習させる。また、3年間を通じて賛否が分かれる社会的論争課題を取り上げたモラルジレンマ学習に取り組み、ディスカッションを通じてコミュニケーション能力を育成するとともに、自己肯定感や他者に対する基本的信頼関係といったチームで探究に取り組む上で前提となる「学びの土壌」の醸成を図る。こうした多層的・系統的学びの上に3年で課題研究に取り組むことで「主体的・対話的で深い学び」が実現する。

神港橋高等学校は、学校が提供する特徴的な教育活動である「カリキュラム・ポリシー；CP」を「モラルジレンマ（Moral Dilemma）」「インターンシップ（Internship）」「地域連携・協働（Regional Cooperation）」「探究活動（Active Learning）」「企業連携（Industry-School Collaboration）」＝MIRAI3と定めている。

カリキュラム・ポリシーのうち、「インターンシップ」は一般的な休業中の短期インターンシップではなく、通年型（毎週木曜日、朝から一日中、年間20回程度）を実施している。「地域連携・協働」では地元・神戸市兵庫区と地域連携協定を締結し、地元の産官学公からなる「神港橋コンソーシアム」を設立して、タウンミーティングなどの様々なプログラムを展開している（文部科学省「地域との連携による高等学校教育改革推進事業」アソシエイト校に認定）。また商業高校として「企業連携」授業も盛んで、一日ホテルの運営一切に携わる「高校生ホテル」や、地元観光バス会社と連携し、企画・販売から当日の添乗までを担う「高校生バスツアー」などを実施している。

また、地域協働活動の核となる神港橋コンソーシアムには、兵庫区まちづくり課以外にも兵庫図書館、まちPRオフィス（NPO）、しゃらく（NPO）、大阪教育大学、神戸市教育委員会のオリジナルメンバーに加え、令和3年度からは、神戸商工会議所、神戸商店街連合会、神戸観光局、鈴木商店記念館（双日、太陽鋳工）といった地元産業界、更に大学にもメンバーが広がっている。